

「ウツス」ということ

— 北海道芦別健夏山笠の博多祇園山笠受容の過程 —

福間裕爾

“Transfer” — The Process of the Acceptance of the Hakata Gion Yamakasa in the Ashibetsu Kenka Yamakasa in Hokkaido

はじめに

- ①「電承」による伝播
- ②「本物」志向
- ③権威化の道程
- ④受容の個性化
- ⑤権威と序列
- ⑥「ウツス」ということ
- ⑦構築されるハカタ
おわりに

【論文要旨】

山笠とは豪華な人形飾りを乗せた「作り物」のこと。北部九州を中心に分布する。なかでも「博多祇園山笠」は、七百六十二年といわれる伝統に裏打ちされた求心力から、各地の祭礼に多大な影響を与えてきた。その関係性を表すものとしてハカタウツシという民俗語彙がある。北海道の「芦別健夏山笠」は、そのうち最も遠隔地の事例である。今から十八年前に始まった現代の祭りである。この両者の縁を取り持ったのが、一本のテレビ番組だった。筆者は電子メディアによって民俗が伝えられることを「電承」とよんでいるが、芦別はこれに該当する事例である。

当初、芦別山笠は博多山笠の刺激を受け、模倣することで自らの祭りを変容させたにすぎなかったものが、時を重ねるにつれて芦別の博多山笠受容は本格化し、最終的には「作り物」の枠を越えて、博多の民俗文化そのものを求めるようになっていく。その過程には、テレビ、実体験、物資、人物交流による受容段階があり、複合的に博多の民俗文化が芦別に伝播・受容されてきた経過を概観することができる。これに伴

い博多山笠との系譜関係が意識化され、そこに様々な権威化の言説が生まれる。結果的に芦別にハカタが構築されることになるが、これは「博多」のイメージを再生産したものとなる。

本稿は、以上のようなこの両者の関係のなかに、民俗伝播・受容の基本的ありかたとは何かを発見する意図のもとにまとめている。これまでの民俗学ではあまり問題とならなかった、電子メディア、「かつこよさ」、共同意識、集団の特性による受容差を要点とし、調査者のかかわりの視点を含めて実際の民俗文化受容の現場で、それがどのような影響をもってきたかを、当該地域の人々の語りと新聞の言説でもって記述・分析を試みた。

筆者はこの事例を叙述するなかで、これまで民俗学でいわれてきた、いわゆる「古風」の残存という問題が、実は新しく構築された結果によるものではないかという指摘を行なった。

はじめに

山笠—ヤマカサ—とは、通称ヤマとよばれ夏の祭礼「祇園」や秋の祭礼「供日」のときを中心に登場する「作り物」のことである。「鉾・屋台」などが含まれる山車と同じ範疇に属するもので、その分布は北部九州を中心とした広がりを見せ、現在廃絶したものまでを含めると、数は優に百を越える。山笠を大別すると、屋形に稚児などを乗せて踊りなどを披露する「屋台山」と、波・岩・屋形などを背景に、歌舞伎や浄瑠璃の一場面を表現した人形を飾り付けた「人形山」の二種類がある。人形山については、筆者はその形態と分布特性から、さらに五系とその他に分類している。

このような北部九州の山笠は、博多という都市を中心に展開する様相を見せる。その核は「博多祇園山笠」(以下、博多山笠)という国指定無形民俗文化財である。分布の系譜を丹念に見ていくと、各地のヤマが、何某かのかたちで、必ずその影響を受けていることが浮かび上がってくる。それは、山笠の形態や人形飾りという物質的な側面であつたり、祭りに携わる人びとの服装、身体技法、運営組織、山笠という祭りに寄せる「思い」であつたりもする。つまり物心両面にその影響が見られるということである。その要因には、歴史的背景(藩政支配、石炭産業等による人の集住)、都市と農・漁村との交流(都市の吸引力)、「伝統」文化に対する憧憬などがあり、近世から街道や海上航路を通して山笠が周辺に伝えられ、ひとつの民俗文化圏を形成してきた⁽¹⁾。

玄界灘沿岸では、このような現象をハカタウツシという言葉で言い慣わすが、これは、民俗伝播のありようを表現した民間解説にほかならない。また、この「ウツシ」という言葉には、都に対する「憧れの視線」が内在しているともいえ、その伝播のベクトルを暗示してもいる。佐賀

県東松浦郡一帯で聞かれる、山笠の始源伝承にみられるミヤコとの関係性言説はそれを如実に語るものといえよう⁽³⁾。

またこの分布には、ある線を境にして突然広がり止まってしまふという特性がある。受容状況が空間に現れてくるのである。民俗学では、伝播にしろ、受容の問題にしろ、あまり積極的に論議されることはなく、柳田国男の言うように「飛び飛びに離れた」地点にある事象について関係付けて論じることは主流ではなかった。日本全土をひとつの「郷土」として捉え、そのなかから「日本的なもの」を抽出することで理論化を進めようとした柳田の方向性からすれば、本来の属性ではない要素が表出する伝播的事象は、その範疇に入らなかったであろう。とはいっても、我々の生活のなかで伝播にまつわる模倣という行為は日常的な営みである。それは、一己の範囲には留まらず、いわゆる「共同体」が他所の要素を見習って自らの規範とすることなど、過去から現在まで綿々と続いている。その行為のなかに、当該社会の民俗文化に対する指向性と受容の問題が内包されており、民俗学にとっても重要な課題を含んでいると考えられるのである。

本稿では、山笠という作り物を模倣する過程によって起こった伝播・受容のありかたを問題にする。果たして、他から伝えられた民俗事象が、どのように当該地域に受け入れられ、変化し、定着していくか。つまり「ウツス」こと、これを論じてみたいのである。事例として、博多山笠の影響を受けて自己の祭りを創ってきた北海道芦別市の「芦別健夏山笠」(以下、芦別山笠)を取り上げ、その博多山笠及び博多の民俗文化受容の過程を提示する。まさに九州と北海道という「飛び飛びに離れた」部分にあたる事象である。

博多山笠の変化

本題に入る前に、芦別山笠の雛形となった博多山笠の変化について概

観しておく。博多山笠は、七月一日から半月間、福岡市内を熱気の渦に巻き込む祭礼である。人形を飾り付けた豪華な作り物が、大勢の男たちによって昇かれ、博多の街を巡行する行事である。夏の疫病平癒を目的とした行為として七百六十二年の伝統を持つとされ、伝統的祭りの範疇で語られる博多山笠だが、現在の姿は近代化による変化・変容を反映しており、山笠は二種に分化している。実際に街を巡行する低い「昇き山」と据えものの高い「飾り山」である。十五メートルを遙かに超える高さを誇った山笠が、明治四十三年の電車架空線の設置で、巡行することが困難となってしまったことに対する博多の人びとの解答が、この二種の作り物となったのである。この変化のなかには、低い山を昇いていても、気持ちは高い旧来の山笠にある、という思考の継承があった。形態は変化しているものの、その精神は過去から現在に至っても変わっていないというわけである。

しかし、この変化がもたらしたものは、実は大きい。博多山笠の最高潮の行事は、十五日の「追い山」である。午前四時五十九分、一番山笠が櫛田神社の境内に設けられた「清道」に昇き込まれる。以降五分間隔で、七本の山笠が次々に勢いよく昇き込まれ、全長五キロの博多の街へと出てゆく。この近代化による作り物の変化は、山笠に「勇壮豪快」という形容を付与した。それまでの十五メートルもの山笠は、重く操作が困難で速く巡行できる構造ではなかった。巡行途中で休憩をとりながら進んでいた様子は、江戸時代の記録に残されているほどである。それが、低い昇き山となって、重量も減り操作性が向上することでスピード感を増し、勢いあるものへと変化した。これこそ、追い山のタイムを華々しく発表する契機となり、全国的に勇壮な祭りと呼ばれるようになった要因であった。このように見えてくると博多山笠は、実は、近代化に順応するべく工夫され変化・変容してきた祭礼といえるのである。

もちろん、逆行もあった。それは都市構造との関連である。戦前まで、

博多の街は「木煉瓦」で道が覆われていた。この上に水を撒くと、車輪を持たない山笠は滑るように走って速かった。⁽⁷⁾この木煉瓦も、戦争の空襲で焼けてしまった。今のアスファルト舗装になってからは、しっかりと水を撒かないと抵抗が大きくて昇けない。かつての山笠の方が「山足」は速かったのである。この条件下で豪快さを維持するために、よりたくさんの人手が必要とするようになったのである。戦後の一時期、山笠が存亡の危機に瀕したことがある。それは、博多自体の住人が減って、祭りを維持できなくなってきたからであった。しかし、博多には近世以来の「加勢」の伝統があった。それでこの危機を乗り越えてきた。他所から山笠の昇き手を加勢人として雇うのである。周辺農村から多くの昇き手が雇われて「山昇き」に出てきた。その加勢人も、都市の吸引力と関係していた。博多周辺の加勢地帯では、山笠の分布が空白となり、それぞれの村の社の祇園祭りが博多山笠と連動して構成されていたのである。⁽⁹⁾昇き山の変化・変容のなかには、このような近代の経過と分布の問題を含んでいることになる。

低い勇壮な昇き山に対して、高い飾り山は「豪華絢爛」と形容される。ここにも、近代化による変容がある。博多人形師が半年近くをかけて制作するもので、歌舞伎や浄瑠璃の一場面を、波・岩・屋形などの背景に配した博多人形で表現する。「表」と「見送り」の前後両面に別々の表題による飾り付けを施すのである。かつて山笠が分化する前までは、昇くことを想定して、人形の構造や飾り付け方に制約があった。しかし据えものとなった飾り山はそれがなくなり、人形の配置など、ますます見せ方に工夫が凝らされ芸術化していった。その結果として、豪華さを増してきたということができよう。ある意味、博多山笠のもう一つの修飾である「豪華絢爛」という言葉は、この時に定まったと考えても誤りではあるまい。

①「電承」による伝播

芦別山笠は誕生して平成十五年で十八年になる新しい行事である。以下、芦別の博多山笠受容経過を報告する。筆者はその動きを、便宜上次の六期に分けて把握している。

- 第一期「電承期」…昭和五十九～六十二年
- 第二期「書承・口承期」…平成一～三年
- 第三期「認知期」…平成四～五年
- 第四期「転換期」…平成六～七年
- 第五期「公認期」…平成八～十年

表 芦別の博多祇園山笠受容の経過

受容期		出来事	
受容期	年月	出来事	出来事
第一期「電承期」	昭和35年6月	「芦別まつり」始まる。	第二期「書承・口承期」
	昭和45年7月	芦別市主催となり「芦別市民まつり」と改名。	
	昭和51年7月	「まとい踊り」始まる。	
	昭和54年7月	「芦別健夏まつり」と改名。	
	昭和59年8月	NHK特集「熱走！博多山笠」放送。	
第二期「書承・口承期」	昭和60年7月	「まとい踊り」に「かつぐ山車」登場。	第三期「認知期」
	昭和62年7月	「あしべつ健夏まつり」を楽しくする会」結成。	
	昭和63年7月	「あしべつ健夏まつり」を楽しくするために計画・提案書」提出。	
	昭和61年7月	博多山笠を模した「山笠」2本を製作。	
	昭和62年7月	「山笠」が芦別市の補助金で4本に増える。	
第三期「認知期」	昭和63年7月	「山笠」が「芦別健夏まつり」の主流となる。	第四期「転換期」
	昭和64年7月	「まとい踊り」が消滅し「健夏山笠」に変更。	
	昭和65年7月	博多視察を芦別市に要請。	
	昭和66年7月	博多山笠視察調査」実施 「博多山笠視察調査報告書」出る。	
	昭和67年7月	「博多祇園山笠ガイドブック」を入手。	
第二期「書承・口承期」		平成1年9月	第五期「公認期」
		平成2年3月	
		平成3年3月	
		平成4年3月	
		平成5年3月	
第五期「公認期」	平成1年3月7月	「あしべつ健夏まつり」を楽しくする会」を解散して「芦別健夏山笠振興会」を設立。	第六期「完成期」…平成十一年～現在
	平成2年3月	「黄金水松」の由緒完成。	
	平成3年3月	「芦別健夏山笠振興会」会則を制定。	
	平成4年3月	「芦別健夏山笠振興会」紋章を制定。	
	平成5年3月	「芦別健夏山笠振興会」の当番法を久留米餅で製作。独自のデザインで発注するも、手違いで博多下新川端と同じ柄となる。	
第六期「完成期」…平成十一年～現在	平成6年3月	「博多祇園山笠ガイドブック」の複製を大量配布。博多派遣予算づくりのために「人材育成資金造成ビアパーティー」を始める。	この区分に沿って筆者が調査に入った平成十一年までを記述するが、構成の関係で時間軸どおりでない部分もあることを、あらかじめお断りしておく。なお、博多山笠が導入される以前の昭和三十五年から第二期までの動きについては、すでに一稿を草したことがある。 ⁽¹⁰⁾ そのため、ここであらためてその間の分析などを提示することはさしひかえ、本稿推進のために最低必要と思われる骨子だけを記述することにする。本稿全体の見取り図として、芦別の博多受容の動きを表として付しておく。なお、本稿で使用する資料はことわりのない限り、筆者が行った聞き書きによるものである。
	平成7年3月	「博多祇園山笠ガイドブック」の複製を大量配布。博多派遣予算づくりのために「人材育成資金造成ビアパーティー」を始める。	
	平成8年3月	「博多祇園山笠ガイドブック」の複製を大量配布。博多派遣予算づくりのために「人材育成資金造成ビアパーティー」を始める。	
	平成9年3月	「博多祇園山笠ガイドブック」の複製を大量配布。博多派遣予算づくりのために「人材育成資金造成ビアパーティー」を始める。	
	平成10年3月	「博多祇園山笠ガイドブック」の複製を大量配布。博多派遣予算づくりのために「人材育成資金造成ビアパーティー」を始める。	

受容期		出来事	
第一期 「書承・口承期」	年月		
	平成2年8月	博多祇園山笠をマスターし、芦別独自の山笠スタイルを確立するという「芦別健夏山笠の（最終目標）」が確認される。	
	9月	博多祇園山笠振興会会長の「お目こぼし」。「手拭制度」を導入。	
	平成3年1月	臨時総会において「流総代制度」の導入を決定。「市役所流」認定。	
	7月	山笠行事でのホイッスル使用を中止。「追い山」で、博多山笠の「櫛田入り」を意識した「一番街のセレモニー」始める。	
	8月	博多から春口栄二氏ほか一名が山笠の技術指導で芦別来訪。	
第三期「認知期」	11月	芦別山笠台を博多山笠と同規格に修正することを検討。	
	8月	博多祇園山笠上飾り導入に係わる調査で3名が博多へ赴き、博多人形師亀田均氏と会う。「本場なみ」という新聞報道。	
	7月	芦別山笠の山笠飾り製作のため、亀田人形師が芦別を現地調査。	
	5月	博多人形師による「山笠講演会」開催される。博多人形師の山笠飾り初めて芦別に登場。亀田人形師の飾り据え付けの様子、NHK福岡局同行取材により、福岡で放映される。	
	7月	博多人形飾りの導入決定のための抽選会開催される。	
		博多風に流の名称にともない、「市役所流」は「市流」となる。	
		亀田人形師から提供された図面で、山笠台五本とも博多山笠と同規格に修正を完了する。	
		博多祇園山笠振興会との歴史的会見。	
		博多派遣で、13名が「集団山見せ」、前「博多祇園山笠振興会会長」の「追善山」、「流昇き」、「追い山」に参加。	
		博多人形を乗せた山笠が芦別を初めて走る。	
受容期		出来事	
第三期「認知期」	年月		
	平成4年7月	「本場博多に正式認知」の新聞報道。	
	8月	「弟格」という春口氏の発言新聞報道。	
	9月	「市流」の独立問題起こる。	
	平成5年7月	飾り山の建設を決議する。	
	8月	亀田人形師作の福岡新天町の飾り山を芦別に移設。亀田人形師飾り付け。	
第四期「転換期」	6月	婦人部の炊き出しを中央流が始める。	
	7月	博多派遣で、11名が「集団山見せ」、「流昇き」、「追い山」に参加。	
	8月	博多大黒流下新川端町から町総代新島雅貴氏、取締役田中哲氏、顧問春口栄治氏外一二名を招き指導を受ける。	
	9月	飾り山「五条大橋臣仕替」芦別初公開。	
	平成6年5月	流主体の運営に「芦別健夏山笠振興会」を大改革。「流委員制」の導入。	
	6月	目標をハード面からソフト面に転換を決定する。「運営規定」に「追善山笠（追善山）」を盛り込む。	
	7月	「市流」を飾り山担当の流として独立承認。	
	8月	「流当番制」の運用開始。	
	9月	「流運営規定」に「追善山笠」の対象者を規定する。	
	11月	「追い山」のコースを変更。出発点と決勝点を中心街に設定し、集客をはかる。	
		博多派遣で、13名が「お汐井取り」、「流昇き」、「朝山」に参加。	
		「追い山」決勝点の横断幕導入を検討する。	
		「追い山ならし」を検討する。	
		「市流」の当番法被を製作する。	
		流主体による組織改廃。	
		平成7年2月	
		「追い山ならし」開催を決定する。	
		福岡読売新聞が芦別健夏山笠取材に来訪。	
		読売新聞に連載記事「北国のオイサ」で、芦別健夏山笠と博多祇園山笠の交流が紹介される。	
		博多派遣で、9名が「お汐井とり」、「流昇き」、「朝山」に参加。	
		栄流・中央流が詰め所を開設する。	
		「追い山」決勝点横断幕を設置する。	
		「追い山ならし」を始める。	

表 芦別の博多祇園山笠受容の経過

受容期	年月	出来事
第四期「転換期」	平成7年7月	芦別から北海道新聞の記者が博多に取材に向く。「山笠の旅、肌で感じた本家の格」連載始まる。博多山笠「唯一の公認」という新聞報道。「当番引継」の儀式を始める。「追い山」の「清道入り」が検討される。平成八年度に飾り山を更新することを決定。芦別市に助成を求める。
第五期「公認期」	平成8年5月 6月 7月 8月 9月	総会の議事はすべて全会一致で決することに變更。総代会 博多山笠振興会役員視察のため来芦の知らせ入る。 新調した飾り山「秀吉賤ヶ岳の誓」公開。直会を各流詰め所で実施するようになる。 博多派遣で、7名が「集団山見せ」、「流昇き」、「追い山」に参加。「芦別健夏山笠振興会」役員は芦別を訪れる予定の「博多山笠振興会」役員の挨拶回りを行う。 「博多祇園山笠振興会」役員が芦別健夏山笠を視察に訪れる。 「博多山笠振興会」が公認。「北の山笠に及第点」と新聞報道出る。 「忘年会・宴会で祝い目出たを歌うこと」が決定される。
	平成9年2月 5月 6月 7月	「芦別健夏山笠振興会」の手拭制度から、「博多紋り」の項目消える。 「芦別健夏山笠振興会十周年記念式典準備委員会」設置。 芦別市長に「博多山笠振興会」から「集団山見せ」での台上がりの招待がくる。 「芦別健夏山笠振興会」青井会長急逝 青井会長告別式、当番法被で50人以上が参列。 「追善山」の要領を決定する。 博多派遣（15日）、この年から「芦別健夏山笠振興会」から「流」の派遣に変更する。 栄流から4名、市流から3名が「追い山ならし」、「集団山見せ」、「流昇き」、「追い山」に参加。
第五期「公認期」	平成9年7月	林芦別市長、博多山笠「集団山見せ」で台上がりを務める。 「博多山笠のしおり」に「博多祇園山笠振興会」会長石橋清助氏が書いた芦別健夏山笠紹介の記事が掲載され、見物客に配布される。 芦別初の「追善山」。
	平成10年5月 6月 7月 8月	栄流、中央流及び緑幸流が流が詰め所を開いた。山笠行事はタイムレースではなく、「黄金水松に奉納して市民の無病息災を願う行事」であることを再確認。 「芦別健夏山笠振興会創立十周年記念事業」として昇き山の人形更新、記念誌の発行、流ごとの当番法被の製作、鼻冠の作成、記念式典挙行の特別会計可決される。 昇き山の人形飾り更新を決定する。 下新川端町が大黒流当番町を務めるに際して、通常の博多派遣ではなく、役員派遣を決定する。山笠参加を遠慮する服喪期間は四十九日と決定する。
第六期「完成期」	平成11年7月	博多への役員派遣。芦別健夏山笠振興会「役員2名、市流8名が下新川端町で当番町の加勢のため、お汐井取り」から「追い山」までの全日程に参加。 昇き山の人形飾り更新される。 各流の当番法被が完成し、5流全部が独自の文様となる。 「芦別健夏山笠振興会十周年史」発行される。 「博多山笠祇園山笠振興会」役員、櫛田神社宮司ほかを招待して、「芦別健夏山笠振興会創立十周年式典」挙行。 完成した流ごとの当番法被を着用して、故青井会長墓参りを行う。 筆者と中央大学M氏が芦別健夏山笠の調査を行う。

*「芦別健夏山笠振興会」総会・総代会はか議事録、「芦別健夏山笠振興会十周年史」、「北海新聞空知版」から作成。

博多の発見

昭和三十五年六月に芦別市労農商協議会が主催して始まった「芦別まつり」は、芦別神社例大祭・山神祭（炭坑守護の社）・戦没者慰霊祭などの神社祭祀に、芦別公園まつり・水道機械展示会・素人のど自慢コンクールなどの娯楽的行事を組み合わせたものであった。行政が関与したイベントとはいえ、まだ基幹産業であった石炭産業振興という面が濃厚であった。

昭和四十五年、芦別市が「石炭の町から観光の町」という基幹産業の転身をはかるべく建設した施設「芦別レジャーランド」の開園に際し、市主催の「芦別市民まつり」となった。観光客誘致にこれを活用する目的から開催日もレジャーランドの開業にあわせて、七月十八日からに変更され、行政主導の「地域振興」の役割を担うことになった。この「まつり」は、芦別神社という伝統的・宗教的な「場」から離れ、これ以降毎年新しい要素を加えながら、イベントとしての体裁を整えていく。そのなかで模索された行事が、現在も続いている「千人おどり」と後に博多山笠受容の背景となる「まとい踊り」だった。「まとい踊り」は、昭和五十一年に芦別観光協会の肝いりで「芦別の名物」とに創作されたものである。各職場単位のグループが、大、小の火消し組のまとい飾り三百本を振りかざしながら目抜き通りを行進する勇壮なものであった。

行政のイベントという性格上、関係機関の都合によって開催日程は毎年変わる不定のものだった。その日程決定には、基幹の石炭産業との関係が反映された。それがいかに濃厚であったかは、昭和五十九年に、芦別鉱業所の公休日との兼ね合いから、八月十三・十四日のお盆に実施されたことを見れば明らかである。結果的に、鉱業所員の参加と帰省客を見込んだ、このお盆開催は失敗に終わってしまう。この失敗のなかから「祭りの原点」への回帰という志向が生まれ、日程を固定する方向へと進むことになった。

そのなかで、問題化したのが「まとい踊り」であった。当時、この行事に参加するため各町内や職場は、アルバイトを雇って対処していた。しかし、この踊りを賃金労働と捉えた若者達に、祭りの熱気を表演できるわけもなく、形骸化が著しく、なんとか行事を盛りあげたいとする関係者にとって悩みの種となっていたのである。

昭和五十九年夏、NHK特集『熱走！博多山笠』が放送された。「健夏まつり」活性化模索のために、全国各地の祭りを検討していた芦別の人びとには、テレビを通して伝えられた博多山笠の迫力と活気が、今の芦別の現状打開にとって理想のかたちに映った。「博多の発見」である。この年以降、芦別は博多山笠を取り入れる動きを始めていく。「電承」の始まりである。

博多山笠の「電承」

早くも翌昭和六十年の「芦別健夏まつり」から山笠が登場した。それは有志によって作られたものであった。『熱走！博多山笠』を収録したビデオと写真のみを資料として制作されたものであったため、実際の博多の山笠とは似ても似つかぬものとなった。どちらかというと、「弘前ねぶた」のような姿の山笠である。当然のごとく、芦別にはそれを動かす技術もなかった。このときの有志は、山笠はただ担



芦別最初の山笠 昭和60年

いで走ればいいだけではないことを身を以て知ることとなった。それから博多山笠にまつわる身体技法や、その背景にある思想などの探求を始めていく。そして、この年の十月に、有志は「あしべつ健夏まつりを楽しくする会」(以下、「楽しくする会」)を結成する。

「あしべつ健夏まつり」には神事性がない。それは、行政の催事としては当然のことである。「楽しくする会」は、イベントが何故に散漫であり、参加者・見学者ともに情念の発露を見ないかという要因を、博多山笠をはじめとする伝統的な祭礼との比較分析から、ここに見いだした。彼らはその検討結果を、「あしべつ健夏まつりを楽しくするために 計画・提案書」(以下、「提案書」として芦別市役所に提出した。そのなかで構想されたものは、車輪のない山車にご神木を乗せて担ぎ、最終日に「追い山」を行うというもので、あきらかに博多山笠を雛形にした行事構成案であった。また、問題となっていた「まとい踊り」をその山車が通るコースの「清め祓い」として組み込み、「芦別らしさ」を加味したものを提案している。これは「あしべつ健夏まつり」へ神事的要素の導入を図り、イベントから祭礼へという方向転換を意図したものであったといえる。

博多との接触

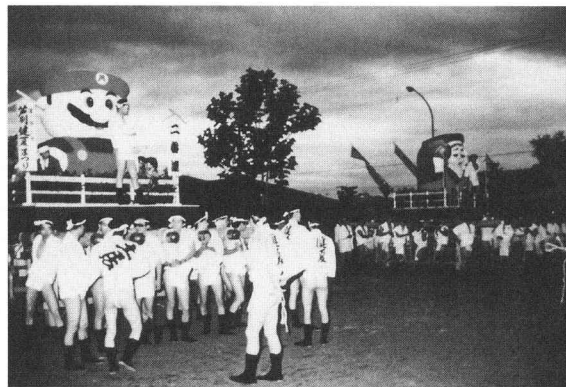
昭和六十一年、「提案書」にそって、芦別の山笠はさらに博多を意識したものへと変貌していった。それまで鉄で制作していた山笠の台を、博多同様に木製とし、また人形を乗せるというものだった。ただし人形は、発砲スチロールの張りぼてであった。この動きのなかには、博多と取引があった「楽しくする会」のY氏によって得られた、芦別に博多山笠のノウハウを提供してもよい、という博多祇園山笠振興会(以下、「博多振興会」)の非公式情報が、大きく影響している。芦別は、これによって、まつりの進むべき方向を正面切って「博多」へ向けていく。翌年は

山笠が四本に増え、昭和六十三年には、それまで山笠と混在していた「まとい踊り」を廃止し、「健夏山笠」という名称で「あしべつ健夏まつり」のメイン行事としての位置を占めるまでにいった。とはいっても、この時点ではノウハウは博多からまだ移植されておらず、手探りの状態で博多山笠の心象を模倣し続けていた。しかし、ビデオや写真だけの情報を頼みとした模索には限界があった。

平成元年七月、芦別市から「楽

しくする会」の五人が博多に派遣された。当初見学だけの予定であったが、彼らはY氏の取引先を通して知り合った博多山笠大黒流に属する下新川端町(以下、下新)の春口栄治氏の紹介で、実際の山笠行事に参加することになった。これが、芦別が実際に博多と接触する最初の機会となった。その経験は、ビデオから得た情報量をはるかに凌駕していた。彼らは物質的なことのみではなく、組織、しきたりなど、目には見えない思想的な部分までが総合されて博多山笠という行事が成立していることを知るのである。

博多から戻った五人は、芦別山笠に必要なものは、神事的な要素を元とする「抛り所」と行事全体を強力に牽引する「組織」であること認識する。その動きは同年九月、「楽しくする会」を解散し、「芦別健夏山笠振興会」(以下、「芦別振興会」)の創立という動きへと繋がっていった。



二代目の山笠 昭和61年

博多山笠受容の開始

「芦別振興会」は、さつそくもう一つの課題「拠り所」導入の問題に取り組む。博多山笠は櫛田神社という精神的な中心を持っているが、芦別にはない。行政主催のイベントに内包された芦別山笠の核を神社に求めることはできないことであつた。そこで、着目されたのが市内にある文化財の「黄金水松」という、アイヌ民族の伝統を伝える「神木」だつた。

この神木に奉納する行事を芦別山笠と位置づけ、「拠り所」を創出することになり、以降、振興会の紋章制定、当番法被の模作、手拭制度の創設など、博多そのものを芦別で実現しようという動きが進行していった。

さらに、博多に倣つて儀礼面での整備も進められた。博多山笠の最高潮行事である「追い山」が、芦別でも平成二年から開始されるのである。それと同時に始められた「若松取り」創出には、芦別が指向する神事性が現れている。博多山笠では、山笠が動き出すに際して、山笠やその施設、順路などを清める意味で、

海から砂を取ってくる「お汐

井取り」という行事を行って

いる。しかし、いくら博多同

様の行事を行いたくとも、芦

別は海から遠く離れた内陸に

あり、その実現は困難であつ

た。そこで、編み出されたの

が黄金水松の枝を取ってきて、

山笠に供えるというものだつ

た。芦別の条件に適合する形

として、博多の文化要素が翻

訳されて取り入れられたので

ある。



黄金水松

書承・口承のはじまり

五人の博多派遣者は、博多山笠の経験ということだけではなく、いくつかの博多のモノを芦別にもたらした。そのひとつ『博多祇園山笠ガイドブック』という小冊子は、ビデオとやらんで芦別で山笠を行う際の教科書とされるようになった。これには、山笠の昇き方など技術的なことの記述があり、博多の技術を文字のうえで理解することに繋がった。また、博多からお土産として持ち帰られた博多織の帯やタバコ入れが、芦別でステータスシンボルとなったのもこの頃である。

この時期、当初見よう見真似で始めた頃とは、山笠の形態、組織、昇き手の衣装など、目に見えるところでは格段の進歩を見せていた。しかし、文字や映像では、技術に潜むコツのような、言語にならない部分については、さすがに見聞だけではどうにもならなかった。そこで「芦別振興会」は平成三年七月に博多から二人の人物を招聘する。技術指導のためである。ここで、言葉に

ならない、山笠の秘訣が人か

ら人へという伝承を果たすこ

とになる。博多山笠が内包す

る意識やしきたりまでが、こ

の機会に芦別へと「口承」で

伝えられたのである。ところ

が、この伝播によって問題も

でてきた。そのとき伝えられ

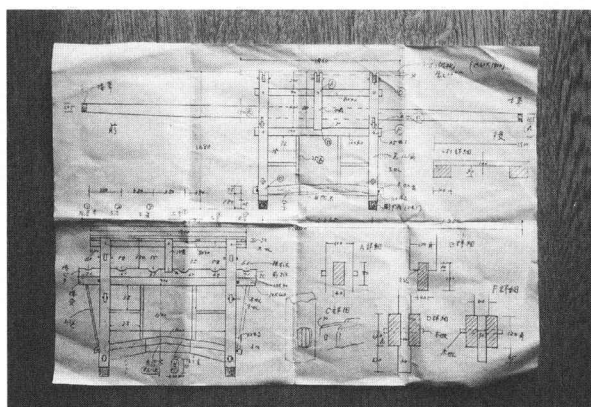
た山笠の昇き方は、芦別の制

作した山笠では実現できない

ことが判つたのである。それ

は、高さ・重さなどの山笠の

規格が博多とは違つていたか



博多山笠台の図面

らだった。これに対処するため、翌平成四年に博多から正確な山笠図面を入手して、すべての台を作り直すことになった。これで、モノ的には、博多と寸分違わぬものとなった。博多を発見してから、八年の歳月が流れていた。

伝播の段階

以上、テレビの情報によって、芦別が博多山笠を発見し、それを北海道へ移植する過程を概観した。マス・メディアは一对多という情報伝達体系であり、受け取り先を特定しないのが特徴である。この「多」のなかで、情報を受信したのが芦別だったことになる。その要因は、「あしべつ健夏まつり」の現状をなんとか改善したいという問題意識にあることになるだろう。その模索のなかで、求める理想型がおぼろげながら形成され、参加者の希求する方向性が博多山笠と同調したのだといえよう。つまり、芦別が求めるものが、そこに揃っていたということである。ここまでの経過についてメディアを基準にまとめてみると、次の三段階に分かれる。

○昭和五九年～六三年 第一段階「電承」。マス・メディアの情報から山笠の形態や身体技法を模倣する段階。

○平成元年～二年 第二段階「書承」。博多から入手した「ガイドブック」等のテキストを用いて行事を行う段階。

○平成三年 第三段階「口承」。実際の博多での経験や、博多からの指導者派遣によって、より細かな対話を重ねね行事を洗練させる段階。

山笠という民俗行事が伝播し受容・伝承されていく際に、芦別ではこれだけの段階を踏んでいることになる。

民俗の伝承はこれまで「口承」「書承」を中心として考えられてきた。

近代までの農村のような閉じた社会では、もちろんそれで可能だった。しかし、電子メディアが発達した現代社会においては、段階の順序は異なるだろうが、この三つのメディアが総動員されて、民俗行事が伝播・伝承されていくという認識が、当然のこととなってくるであろう。

この段階で注目すべき点は、単なる作り物の模倣に留まらず、山笠が包含する博多の民俗文化全体を受容しようという動きに変わってきている部分である。山笠の形態を模倣することだけが目的であれば、それが完成したことで終結するが、博多山笠の背景となる民俗文化までを受容するとすると、形だけの模倣ではとうてい不可能となり山笠行事全体の組織・儀礼・思想など、目に見えない部分までを学ぶ必要がでてくるところを示唆している。

芦別のこれまでの模倣の過程をみると、目に見える形が整っていくことに比例して、無形の部分への憧憬が強くなってきていることが解る。たとえて言うなら、「博多」というチャンネルに周波数が調整された状態ということができよう。

②「本物」志向

博多派遣者が運ぶ情報

平成四年に博多と同一の規格の山笠を実現した芦別では、それ以降「本物」志向が急速に芽生えてくる。その先駆けとなったのは、平成元年に始まった博多派遣である。

昭和六十年に出した、芦別最初の山笠は意外に盛り上がり、参加した人々も満足感が得られた。それで、「本場」に行ってみようということになった。「本場」とは博多のことである。

最初の博多派遣は、山笠がどうして人びとを熱狂させ得るのか、その要因を探るために始められたことがこの話から判る。山笠という形に潜む何かを求めて、「本場」へ赴いたわけである。彼らの博多での見聞と実際の山笠行事での体験は、山笠の重量感、当番法被の質感、手拭の使用方、祭り全体の雰囲気など、テレビなどの映像からは認識できない情報が、芦別に伝播するきっかけとなった。すでに述べた当番法被や手拭などの芦別での模作の動きが、この博多の経験を経た後に行われていることを考え合わせると、この影響は明らかである。

翌年には、芦別から毎年博多に人を派遣するための組織・資金面での整備を始めるべく「芦別健夏山笠人材育成事業推進委員会」を組織する会の職務は、「博多への派遣に関すること」、「勉強会の企画、実施に関すること」、「広報宣伝に関すること」と決められた。¹³組織的に博多派遣が制度化されたわけである。これで派遣者は、博多での経験やモノを定期的に芦別に運ぶ役割を担うこととなった。

派遣者のもたらした情報は、博多により近づこうとする動きを誘発し始める。平成二年八月一日発行の芦別市役所の広報誌「広報星の降る里『あしべつ8』」には、次のような派遣者の体験談が載っている。

昨年博多に行って、山笠を体験しました。とにかく、スケールのかさと歴史の重みを感じましたね。山笠を通じて、ふだんでは付き合う機会にないような人と会えたり、友達の輪が広がるのが、ひとつの魅力ですね。お祭りは、ある意味では男を誇示するものだからね。男たるものを見ている人に感じてもらえばいいですね。博多の女性も「男らしい」と言っていました。

七月九日から一日まで、博多で本場の山笠を体験してきました。一つの山に、八〇〇人くらいの人がいって、これが七つあるんです。

ものすごい迫力でした。お汐井取りという行事では、海に向かって往復五キロの道を走るんです。ちょうど夕陽が沈もうとする瞬間に海につくので、本当にだれでも手を合わせます。

と参加してみなければ分からない臨場感や迫力などを伝え、続いて、

博多の山笠に近づきたいのはもったいなく、まだ人が少ないですからね。それに一〇〇年もたてば 伝統もできるだろうけど、今はまねるのが精いっぱいだからね。毎年変わってくると思いますよ。祭りは、見るよりやるものだからね。担ぎたいから自分で作って、ぐったりするまでやって、それを見ている人がすごいな——と思ってくれば、最高だね。(三頁)

と結んでいる。博多同様の山笠を実現することが目標であるが、芦別の現状としては未だ「物真似」の段階に留まっているという認識があることが解る。しかし、毎年の博多派遣によって、その姿は徐々に博多へ近づいていくという見通しも語っている。また、繰り返しということが伝統を醸成することであるという認識もこの言葉から理解できる。この時期をさして『芦別健夏山笠振興会十年史』¹⁴(以下、『十年史』)は、

平成二年は組織を充実した年であった。……締め込み、地下足袋、脚絆、水法被、晒しの一括購入を行い、従来と違い用具も一新され、より博多に近いものとなった。(二二頁)

と記している。博多に「近いもの」という物言いに、まだ博多のものは同一ではないという意識が現れている。このころの博多を見極めようという芦別の視線は、山笠の細部にわたるまで張り巡らされていた。そ

れは、山笠が止まっているときに台の周囲を飾る「台幕」の見積を取り、山笠が巡行するとき台脚最下部に取り付けられる鉄杵「銅鉄」を注文していることから明らかである。銅鉄などは、山笠を遠くから見ても分かるものではなく、ましてテレビ映像からではその存在すら分からないものである。これは、担ぐのではなく「昇く」という博多山笠独特の身体技法には必要不可欠なものである。引きずるようにして走る山笠の台脚を地面との摩擦から守る道具で、近代以降に使われるようになったものである。以上の状況をみると、博多派遣が詳細な情報を芦別に伝え始めていることが判る。

博多人形師との出会い

芦別山笠の形が整うに従い、博多に対して求めるものが外からでは分らない部分つまり、組織、儀礼、思想などにまで拡大されてきたが、ここに「まるごと博多を取り入れる」という志向が併せて見られるようになる。その端緒は、「山笠の形が整ってくるにつれ、本物の山笠人形を乗せたいという気持ちで会員の間で高まっていた。」(『十年史』四〇頁)と述べているように、山笠の人形飾りを、芦別で製作したものではなく、博多人形師の手によるものを乗せたいという願望となって現れた。それはとりもなおさず「本物」の博多を求めること、つまり「真正性」を追求することであった。平成三年十一月三十日付「北海道新聞空知版」には、

飾り人形は発砲スチロールや張り子を使った苦心の作で「有り合わせのようでも力が入らない」というのが関係者の不満のタネ。振興会の役員たちは昭和六十四年から毎年、本場・九州の博多祇園山笠の視察に行き、「いつか本場並みの山笠がほしい」との思いを募らせていた。

とあり、昭和六十一年にはじめて製作したときには、「本物そっくりに見えた」(『十年史』二五頁)張りぼて人形を乗せた山笠が、この時点では単なる類似品としての認識に変わっていることが解る。博多派遣によつてもたらされた情報の影響である。

さつそく、「博多祇園山笠上飾り導人に係わる調査」(16)というところで、平成三年十一月十二日から三日間、芦別山笠の人形飾り製作を請け負ってくれる人形師を捜して「芦別振興会」の三人が博多に出向いた。博多に到着した一行は、春口氏からひとりの博多人形師を紹介される。亀田均氏である。博多人形作りの神様といわれた小島与一最後の弟子であり、政財界の著名人や歴史上の人物等多くを作成したことで知られる肖像人形を得意とする人形師である。一行は、写真等により芦別山笠を説明し、「芦別振興会」の熱意を伝え、山笠人形三体の製作を依頼した。

ここで博多人形のことを述べておく。通常知られる博多人形は小型の土人形である。対して山笠に使われる人形は、顔は和紙の糊貼り、手足は麻縄を解したもの、を膠で固め、鍍はダンボール紙に金紙等を貼って作られる中空構造を持つ特殊なものである。それは、山笠が単なる据え置き飾り物ではなく、人によって移動するための「作り物」であったからだ。軽さが重要な問題であったわけである。簡単にいうと等身大の張りぼてであるが、表面を緻密に着色し、人毛や玉眼などを用いて仕上げ「生き人形」ともいわれる写実性を特徴とする。特殊な技術が必要とするため、現在、山笠の人形製作に携わる人形師は非常に数が少ない。

亀田氏は芦別の一行に、通常の山笠人形ではあり得ない製作法を提案する。博多山笠の人形飾りは、巡行中に勢い水を浴びるため祭が終わる頃には形崩れしてボロボロになる。五年、十年ともたせる気であれば、顔と手はFRP成型とし、鍍もFRP板、金欄(西陣織)も表面をビニールコーティングした物を使い、塗料もFRP用の特殊塗料を使用し、顔と手については、その耐用年数に応じて、数年後に表題を替えても使用

できるような表情で作るというものであった。⁽¹⁷⁾これは七月九日から十五日の七日間昇いて取り崩す博多の山笠人形飾りと違い、芦別が毎年人形を作り替えることができないという実情に鑑みたものであった。しかしこれには問題もあった。何年もの使用に耐えるようにするには高価な材料を使わざるを得ず、費用が高額となることである。だが亀田人形師は芦別から提示のあった予算内で三体は作成できるという見通しを示す。博多の山笠人形を芦別で昇きたいという念願をもつてやってきた「芦別振興会」会長の青井慎介氏は、その場で話を決める。ここに、博多の山笠飾りそのものを芦別に移植する足がかりができた。

このときの調査は報告書としてまとめられ、平成三年十一月二十二日に開催された「博多祇園山笠上飾り導入事業に係わる打合わせ会議」で報告された。問題は資金だった。それを検討する会議には、芦別山笠振興会役員、芦別山笠振興会各流赤手拭以上のほか、芦別十一町の町内会長⁽¹⁸⁾も参集した。金額について、会議は紛糾した。平成三年十一月二十九日付「空知タイムス第五九一三三号」は「博多人形上飾り導入」資金どうする「三体で五百万円町内会から批判も」という見出しで次のように伝えている。

……導入の資金については、振興会の予算に加え、地域振興奨励費補助金百万円のほか、さらに宝くじ助成金二百五十万円に補助のメドが立ったが、二百七十万円は上飾りをつける「三流れ」で負担しなければならぬ、と報告された。

これに対して町内会側からは「事前に相談もなしに決めてくるとはけしからん」「一般経費のほかにさらに負担がかかるのは、町内会としては無理」などの批判が出た。しかし、まつりを大きく発展させることでは、全員が一致。この日は「開基百年事業の一部として、市に補助金を要請してみるのはいかがでしょうか」などの提案が出されたが、結論は持ち越した。

提案をした「芦別振興会」会長の青井氏が、「この歳になるまで、人からあんなに怒られたことはない。」「十年史」四〇頁」と、述懐するほどの紛糾であった。これはまた、「本物」の博多人形を取り入れたいという「芦別振興会」の方針が、地域全体にまでは浸透していなかったことを物語つてもいる。結局、この方向性が定まるのは、芦別市から補助金を引き出すことに成功した後の翌平成四年一月三十日に行われた「健夏まつりに伴う、山笠に関して理解を深めるためのつどい」での町内会の承認を待つことになる。

博多人形師の芦別来訪

平成四年三月六日、亀田人形師が現地調査で芦別を訪れた。芦別用に山笠人形を制作するに際して、全体のコースや保管場所などの調査をするためであった。「雄大な北海道で昇くのだから目一杯の大きさで作りたい」「十年史」四三頁」ということの視察であった。このとき亀田人形師は、博多山笠が電灯線架設などの近代化に伴って低く変貌していった歴史を思い、できることなら本来の博多山笠を芦別で実感できるように規格を実現したかったのだと想像される。その思いに対して、「芦別振興会」は亀田氏に次のような書簡を送り、高さを四メートル六〇センチに押さえるように要請している。

役員間では、折角立派な上飾りを作ってもらうのだからコースを替えてでも、大きな物を作ってもらってはどうかとの意見も出されましたが、他に二箇所、ほぼ同じ高さに電線が通っている箇所があるため、安全性を考慮したと、アーケードのある通りが市の中心部でありながら衰退しつつある商店街であり、心情的に何とか山笠を通してあげたいといったこともあって、最大高四メートル六〇センチでお願いすることとなりました。⁽¹⁹⁾

この高さ制限は、物理的な障害だけではなく、本来の目的である「地域振興」という観点からなされていることが解る。しかし、それを「心情的」と述べるところに、当初の目的とは異なる方向、つまり博多山笠を芦別で実現することへ重点が移ってきていることを物語っている。

その翌日の七日、亀田人形師は予定にはなかった講演を行っている。急遽設定された講演会ではあったが、聴衆の

多くが博多に対する思いを一層深くしたものであった。博多の伝統技術を持し、博多山笠とともにある彼の話は、単なる講演ではなかった。

それは想像以上の力を持っていた。亀田人形師はすなわち「本場」博多の山笠そのものであったからだ。彼の話す言葉のひとつひとつが、「博多」を希求する芦別にとって、神の声にも等しい威力をもつて聴衆のところに響いた。平成四年三月十二日付「空知タイムス」はその模様を「健夏山笠にエール まつりへの情熱強調 将来は独自の山笠を」として次ぎのように伝えている。

……同日夜の講演会で亀田さんは「自分も長崎県の炭坑マチで育った。芦別と隣マチの赤平という名を聞いてとても懐かしい。二日かけて芦別市内を回ったが、創作意欲が湧いてきた」と話し、短時間の視察でしっかりイメージをつかんだようだ。



アーケードを通る昇き山 平成11年

また、芦別の山笠に対して「よその伝統あるまつりをそのまま持ち込まなくても」という一部の無関心層について、亀田さんは「博多山笠は七百五十年という古い歴史はあるが、元はといえば京都のまつりの流れから始まった。芦別の山笠も、せいぜい五、六年後には、人形はともかくとして、小さな飾り、小道具くらいは、芦別の人たちが作って独特のものを育てていけば立派なまつりになる」と述べ、「とにかく、まつりが好きだという情熱を高めていくことが何よりも大切」と芦別山笠を励ました。……「まつりに対する心さえ間違わなければどんどん新しいものを取り入れていくべきだ」などと話し、聴衆を引き込んでいた。

博多山笠は、京都祇園祭から受容した形を独自のものに発展させてきたものの、という亀田氏の話は、「本場」博多の山笠そのものを受容すること、つまり「ウツス」という芦別の動き自体に整合性を与えることとなった。またそれは、芦別の独自性創造とも相反しないということを博多が認めたことでもあった。

彼は、この講演のほかにも、さまざまな「言葉」を芦別に伝えた。それを地元紙から拾ってみると、「博多の伝統文化が北海道に伝承するのはとてもうれしいこと」、「北海道に熱狂的な『山のぼせ（山笠ファン）』がいたことがうれしい」とある。博多山笠製作に携わり、自らも山笠行事に参加する人形師の目からみても、その形と意識が芦別に伝わっていることを認めていることになる。

ここにある「山のぼせ」とは、祭りに熱中するあまり仕事の手が着かなくなるといふ日常とは異なる精神状態という語彙である。博多山笠を習熟するにつれて現れる傾向があり、ある意味、博多の山笠を理解したことと証とされることである。以下の博多派遣者の話は、その本質を伝えている。

博多山笠の上下関係は、ひとつひとつ仕事をこなして位を登っていく。この感覚は「山のぼせ」になれば人に伝えることができる。

特殊な意識状態になってはじめて、山笠が理解でき、それを他人に伝達できるというわけである。確かにその通りで、博多では、山笠技術の上達や積極性が向上してきたとき、「山にのぼせてきたのが分かる」というような具合に使われることが多い。しかしまた、この言葉ほど他者が理解し難いものであることも確かであろう。外面から観察して判ることではなく、山笠行事のなかで意識を共有してはじめて認識できることなのである。つまり体験なくして理解し得ない物言いなのである。亀田氏のこの発言は、芦別のなかに博多の心性との類似を見出していることになる。

このあとの芦別では、博多の人形飾りを迎える準備があわただしく進められた。博多の規格に合わせての山笠台の製作、山笠を納める山小屋の準備などである。⁽²⁰⁾

同年五月、亀田人形師はできあがった人形とともに再度芦別を訪れる。しかし、山笠飾りは三体しかない。この時点で、芦別には山笠を出す集団が五つ存在し、これを博多風に「流」とよんでいた。⁽²¹⁾博多には、現在七つの流が存在する。⁽²²⁾いくつかの町内が集まってひとつの流を形成しているのである。芦別に限らず、北部九州の博多山笠を模倣する地域では、流という語彙の使用は一般的であり、町組や運営単位の呼称としてではなく、単なるファッションとしての使用までも認められるが、芦別の場合は、博多同様に町組の意味を持ったものであった。

さて、三体の人形をどのように配分するか、「芦別振興会」は総会を開き希望を募る。高額出費が必要となるため、希望は渋いのではないかと当初予想に反して、五つの流すべてが希望したため、抽選を行って決定している。⁽²⁴⁾これは博多の人形飾りを希求する認識、つまり博多その

ものを求めるという意識が、この頃すでに芦別山笠に携わる町内においてはほぼ一致したものとなっていたことを体现している。

「人」というメディア

芦別が博多山笠の人形飾りを移入するまでを見てきた。ここまでの芦別のありようは、様々なメディアによって伝えられた博多山笠の「情報」を受容し、模倣・物資移入という手段によって、博多山笠に近づいていくという営為であった。

この動きのなかで、大きな役割を果たしてきたのは、春口栄治氏と亀田均氏という二人の人物だった。春口氏は、博多大黒流下新で実際に山笠運営に携わってきた人である。山笠の役職では、取締の経験がある。取締というのは、博多山笠で町の実働部隊である赤手拭を統括する役職のことで、実際に山を動かす責任者である。山笠全般にわたる知識が必要とされる役職であり、山笠に対する貢献度を考慮して選ばれる。博多派遣や法被・手拭などの模倣についても、彼の存在なしには実現し得なかったことである。とはいっても、彼の存在なしには実現し得なかったのは、平成三年の七月が最初である。それまでの交流はあくまでも間接的なものであった。彼によって刻々と伝えられてきた博多山笠の技と思想が、その後の芦別の博多人形導入へと繋がっていくきっかけを作った。実際、博多人形導入にあたって、もうひとりのキーマンである亀田人形師を紹介するのも、春口氏であったのである。

ここまでの博多山笠受容の歩みを見ると、この二人のかかわりにより、芦別と博多との交流が速度を増し、盛んになっていった様子が窺える。「人」というメディアが、芦別と博多という状況の異なる社会を接合させる役割を果たしてきたことになる。芦別にとってみれば、二人の存在が、博多化への大きな推進力となったことは間違いない、単に見聞したことからの模倣では、ここまで短期間に博多の民俗文化受容は達成さ

れなかったと推察できる。すなわち「人」が結ぶ「縁」の効用である。

民俗学は「一己」を描いてこなかった。たとえ個人の事象についての記述があつたとしても、全体と共通するものという前提である。それは、民俗文化を総体として捉えたいという学問全体の指向性を反映したものであつたように思われる。しかし、ある文化の伝播や受容を考える場合、一己のもたらず要素を抜きにして考察することは、現実を直視しないことと同義となる。どこにでも、影響力を持つ世論リーダーが存在し、その工夫が全体のものとなつていった事例は多い。しかも、その過程においては、権威付けや伝統の再解釈が見られることも特徴である。山笠を「風流」と捉えた場合には、その性質上一己の存在意義はより大きなものとなる。個人の起こした事件や工夫が、「粋」だと理解され全体のものとなり日常化していく事象などは、過去の歴史を覗くと散見している。民俗学がその点を避けてきたのは、一過性の歴史事象ではなく、何代にもわたつて永続し、同様の形式が伝えられていく「伝承」という概念に縛られてきたからである。

芦別が博多を知るきっかけは「電承」であつたのだが、それをつないだ結節はあきらかに「人」であつた。春口氏である。彼を通して、亀田人形師という新たな結節点がここに誕生したことになる。

飾り山の実現

昇き山の次は、飾り山の実現である。博多山笠には、近代化の変容形態として二種の山笠が存在することは既に述べた。低い昇き山と高い飾り山である。芦別が現代の博多山笠を受容するに際して、このどちらが必要要素であると考えていたことは、平成三年に博多人形師の調査で博多に出向いた際、飾り山についても詳細に調査していることから明らかである。

昇き山三体の導入が完了した平成四年十二月十八日に行われた「平成

五年度飾り山笠及び上飾り導入打合わせ会議会」では早くも飾り山実現の方法を模索し始めている。当面は残った二つの流の昇き山人形飾り完備を優先する方向性が決定されているが、飾り山の導入に向かつていくことは、芦別にとつては予定された行動であつた。戦略的に「芦別振興会」創設五周年となる平成五年に、飾り山笠を建設する方針とした。ちょうどこの年が芦別市開基百年にあたり、その特別補助金があてにされていたためである。実際に「芦別振興会」は補助金支出の陳情を芦別市に対して行い、これまでの資金調達方法に加えて、寄付部門を強化し自前の資金調達に奔走する。

結局、補助金など予算措置もうまくいき、亀田人形師が制作した新天町（福岡市中央区天神）の飾り山を譲り受けることになった。これが芦別山笠最初の飾り山となるのである。平成五年七月十六日、亀田人形師が芦別を訪れ、JR芦別駅前ではるばる九州からコンテナで運ばれた飾り山の飾り付けを指揮した。『十年史』では、



新天町の飾り山 平成5年

七月一六日に披露された飾り山の標題は、「五条大橋臣仕誓」であった。東京以北で始めて建設された飾り山笠に、連日大勢の見物客が訪れた。青井会長も飾り山笠の前におかれたベンチに腰掛け、「芦別健夏山笠もついにここまで来たか。」と、夜遅くまでしみじみとながめていた。また、緑幸流に「加藤清正」、北流に「桃太郎」の山笠人形が乗り、五流すべての山笠人形が亀田先生の作品となった。(四七〜四八頁)

とある。青井会長の「ついにここまで」という言葉は、芦別の博多受容の達成度についての言説であるが、まだ、完成ではないという意味も含んだものであるとされる。しかし、モノ的には、受容はここに一応の完成を見たと考えていいだろう。

③権威化の道程

「博多振興会」の芦別山笠発見

博多の人形飾りが芦別に届いた平成四年の五月、亀田人形師に同行したNHK福岡局が、博多人形の飾り付けの模様を取材し、九州地区ローカルで『北海道に渡った山笠』として放送した。それをきっかけに博多でひとつの事件が起こった。「この番組を見た、博多祇園山笠振興会役員の間で『伝統ある山笠が北海道へ出たのはなぜだ。』と話題になったのである」(『十年史』四三頁)。

前「博多振興会」会長が非公式に芦別山笠を認めた「お目こぼし」⁽²⁶⁾に始まり、毎年の博多派遣の受け入れを認められていた芦別にとって、これは青天の霹靂であった。当初この取材番組は、全国に放送されるはずであったが、バルセロナオリンピック報道の関係で、九州地区ローカルでの放送となった。また、五分間レポートというかたちであったため、

どのように芦別が博多を取り入れてきたかなど詳細な情報が報道されることなく、ただ芦別に博多の山笠が飾られたという現象のみの報道となった。北海道で放送されなかったため、芦別の人びとがこの放送をビデオで見たのは、八月五日以降のことになっている。⁽²⁷⁾

この博多における反応は、芦別に博多山笠が運ばれて行ったことは、博多全体が認めていたことではなく、春口・亀田両氏と下新の、いわば個人的レベルのこととして「博多振興会」が黙認していたことを示している。⁽²⁸⁾そして、ここに至って初めて、流失問題が博多全体のものとして浮上してきたことになる。当時を回想して春口氏は「芦別の山笠を指導しているということ、『七百五十年の伝統ある山笠を持って行った』といっぱい博多からやられた」と言うが、まさにその通りだったのであろう。

しかし、芦別にとって救いとなったのは、「博多振興会」で話題になった中に、流失と捉える否定的な意見に混じって、「北海道にこれほどの山笠をやっているのか」⁽²⁹⁾という驚き、つまり肯定的な反応があったことであつた。この事件を契機として、芦別は「博多振興会」の公認という手続きを模索することになる。早速「博多振興会」に説明するため、「芦別振興会」会長名の書簡を「博多振興会」会長宛に平成四年六月十五日付で送る。それには、芦別がテレビ番組で博多山笠を知り、試行錯誤を繰り返しながら山笠の体裁を整えてきたこと、その間に大黒流下新の春口栄治氏との知己を得て、昭和六十二年から延べ四十人が博多に赴いて博多山笠を研修していることなど、芦別のこれまでの歩みとそれに伴う博多との交流を述べたものであった。「更にその間、樋口武之介前会長ともご面識を得て博多の山の伝統に深く感銘を受けた次第でございます」と、前会長が既に芦別山笠のことを知っており、「お目こぼし」⁽²⁶⁾されたことであることを強調したうえで、平成三年度に博多から指導者を招聘して指導を受けたことなどを知らせ、今回の博多人形導入の顚末について次のように記している。

山台は道産の材で曲がりなりにも形は出来ましたが、どうしても上飾りの博多人形は当地では作成できず思案をしておりました処、春口栄治氏のご紹介によりまして亀田均先生にお引き合わせをいただき今年三体の博多人形の完成を見るに至りました。

この博多の人形が芦別で実現したことについての現地の反応を、

やっと当地の山にも魂が入り会員の喜びはもとより、今年の七月八日の「健夏山笠」の「追い山」に対する市民の期待も大いに高まりを見せております。ちなみに昨年の当地の「追い山」には、昇山五本と二本の子供山に約一〇〇〇人の参加がありました。尚来年は本市の開基一〇〇年、市制施行四〇年の記念すべき年にあたり、更に残りの二体の博多人形の作成を亀田先生にお願いをして山の充実に努めてまいる所存でございます。

このような書簡を送り、「芦別振興会」から役員三名が、「博多振興会」を訪ねるのである。しかし、これまで個人的レベルだったにしろ、博多との交流が多々あったにもかかわらず、何故に「博多振興会」との接触がなかったのか、不思議な感じもするが、その点について書簡は、

本来であればもうすこし早く御地の振興会にご挨拶を申し上げるのが筋でありましたが遂、御地の山の伝統と歴史の重さを見ると、心ならずも遅れてしまったのが正直な処でございます。

と述べており、博多の伝統に対する憧憬が、芦別にとっては畏れにも近いものであったことを示している。

七月十二日に博多櫛田神社で行われた「博多振興会」との会見は、「罵

声さえ覚悟していた」と関係者が述べるほど、芦別にとっては沈痛なものを受け止められていた。後に芦別では、この会見を「歴史の手一本」とよぶようになるが、その場で「博多振興会」の会長から出た言葉は、意外にも「芦別のことは、樋口前会長から聞いています。手一本入れます」であった。芦別の心配は杞憂に終わったのである。何故か。その会見の背後には、マスコミが存在したのである。当時のことを同席したS氏は、

芦別の山笠が博多に認められていく過程は、樋口会長の「お目こぼし」に始まり、平成四年の博多祇園山笠振興会との歴史的な手一本で完了するが、これは、実はテレビによって上手に運ばれたものだった。

芦別の我々が博多祇園山笠振興会に出向く様子は、NHKテレビによって密着取材された。いよいよ会見というカットの撮影になると、ディレクターが「手一本を入れるシーンを撮影します」ということで、みなに伝え、「芦別のことは、樋口前会長から聞いています。手一本入れます。」という芦別を認める言葉を、会長自身の言葉をディレクターがテレビ用の台詞としてアレンジした。ただ、博多の役員にとっても、うまくNHKに進められたという感じをもっているようだった。緊張の極致で出向いた私たちには不思議に映った。

と述べている。テレビというマスコミが伝統文化伝播の媒介をするだけではなく、確執のある異なる地域を結びつける結節機関として機能していたのである。ともあれ、ここに芦別山笠が「博多振興会」に認められるということになるのである。ちなみに「手一本」とは、博多山笠で物が決定・解決した際に行われる手締めのことである。

平成四年七月二十日付「北海道新聞空知版」はこの会見の様子を「本

場博多が正式認知「本家」手本に九年『伝統受け継いで』と激励」という見出しで次ぎのように報じている。

九州・博多で七百五十年の歴史を誇る博多祇園山笠が、芦別健夏まつりの呼び物・健夏山笠を正式に「承認」した。博多をモデルに手づくりの山車でスタートして今年で九年。北国の夏祭りに博多の山笠が登場しているのを知った祇園山笠振興会の役員が健夏山笠振興会（青井慎介会長）に説明を求め今後もしっかり受け継ぐよう激励して承認した。その朗報が健夏山笠が終わった十八日夜、市内で開かれた打ち上げ式で披露された。

……これを知った祇園山笠振興会は、伝統を守る立場から青井会長に説明を求めた。同会長は十二日、博多を訪ねて健夏山笠の趣旨を話し、まちおこしのために果たしている役割を説いて協力を要請した。同振興会役員たちも熱意を理解し「北海道を代表する祭りに育ててほしい」と激励の言葉を添えて「認知」した。

また、後日芦別で報告されたこの時の会見の内容には、

……芦別健夏山笠は今年、博多祇園山笠振興会から正式に認知していただくことができました。これは、「芦別健夏山笠がここまで本格的に、真剣にやっているなら仕方あるまい。」ということ、ただし、博多祇園山笠振興会としては、今後どの様なところから伝授して欲しいと言ってきたても教えるつもりはないので、芦別健夏山笠振興会においても同様の取扱いとしていただきたい。」とのことでございます。⁽³⁰⁾

とあり、博多の芦別「認知」が異例のことであり、芦別から二次的に博

多山笠を伝播させることを禁じるという言説となってくるのである。

芦別が博多山笠の存在を知ったのも、NHKのテレビ番組だったが「博多振興会」全体が芦別山笠を知ることになったのも、同じ局の放送だったことは、テレビという媒体が、いかに文化伝播や受容に影響力があるかを示していることでもある。また、芦別と博多、ともすれば葛藤を生みかねない地域集団を結びつける役割を果たしたのも、テレビの力であったといえるであろう。先に述べたS氏の話のなかにある「うまくNHKに進められた」という部分はそのことを如実に語っていることになる。

マスコミの芦別山笠発見

マスコミによって結節された博多と芦別。この会見以降、報道のなかに現れる二つの地域の関係性を語る言葉には、様々なものが現れることになる。平成四年の会見直後には「認知」という言葉が使われているが、これは、「博多振興会」が初めて外界である芦別を認識したことを意味した。それはまた、福岡のマスコミ全般にもいえることであった。

平成七年六月九日、読売新聞福岡総本部社会部より取材の申込みが芦別市観光課観光事業係に来る。そのときの電話通話記録によると、

突然で恐縮だが、北海道で「博多祇園山笠」をやっている炭坑町があると聞き、読売新聞（七月）の全国版の特集として組みたいと企画している。ついては、芦別健夏山笠の設立の経緯と携わっている人物を取材するため、六月一三日（火）～六月一六日（金）まで、直接貴市へ伺い取材したいと計画している。

とあり、「博多振興会」との会見によって芦別を知ったことが窺われる。さらに、六月十二日にファックスで企画書が送られてくる。それは次の

ようなものであった。

連載企画「北国のオイサ——海峡を渡った博多祇園山笠」(仮題)企画書
博多祇園山笠が、なぜか北海道のかつての炭坑の町、芦別市でも
地元の人たちのよっておこなわれていた。「芦別健夏山笠」名前こ
そ違うものの、博多人形を乗せた五基の「かき山」も同じなら、水
はっぴ、締め込み、脚絆に地下足袋のかき手の姿もそっくり。

祭りの期間も七月中旬で同じ。地元の人たちにあいさつ回りする
祝儀山もあれば、本番の追い山タイムレースもある。「かき山」ば
かりではない。「飾り山」も展示される。「子供山笠」もある。運営
するのも博多と同じ山笠振興会。祭りの節目はみんなそろって博多
手一本で締める、といった具合に、何から何までそっくりなのだ。
どうして千数百キロも離れたかつての炭坑の町で博多山笠が?連載
はそのナゾを追う形で進む。

博多山笠との類似・同質性の問題が取材動機になっていることが理解
できる。北部九州では、博多に倣った山笠を行っているところは珍しく
はない。しかし、北海道という遠隔地に、どうして博多に倣った山笠が
存在するのか。その要因を取材するというものであることが解る。企画
書は続けて、

北海道の美しい初夏の風景、博多と芦別で続く山笠の練習、準備風
景などを織り込みながら、山笠振興にかける博多と芦別の人物たち
の姿、交流の模様などをこもごもに紹介する。合わせて、炭坑の町
から観光の町に生まれかわろうと、直面する困難と戦う市民たちの
けなげな姿、北国の町で山笠が果たそうとしている役割なども伝え
る。山笠にかぎらず祭りと社会の関係を考えさせるよう広い視野で

とらえる。

とあり、博多との交流や地域での問題を報ずる社会的な記事にしたいこ
とが記されている。形式は夕刊社会面カラー連載企画で六、七回(二ペー
ジ特集一回含む)を予定し、掲載範囲として、福岡県、大分県などの北
部九州地域と山口県、そして北海道地元地域版などを提示している。

この取材は、「芦別振興会」の全面協力で行われ、「北国のオイサ 海
峡を渡った博多山笠」というタイトルで七月三日から五回連載された。

北海道では一日遅れの四日からの連載となった。九州版と北海道版では、
配信日の他、記事に若干の違いがあった。たとえば、第一回目の見出し
「博多人形師が山作り指揮」が北海道版では「芦別と博多 飾り付けも
板に付いて」と変わり、内容についても、用語の解説などが補記された。
また読みかたについても「赤手拭」を九州版では「あかてのこい」とす
るのに対し、北海道版では「あかてぬぐい」と表記するなど、北海道の読
者を意識したものとなっていた。全体の構成は芦別がテレビで博多を発
見してから、博多山笠を北海道に導入する過程や、「博多振興会」との
会見、人物交流などを関係者の話で綴るというものであった。

この新聞報道の意義は、福岡のマスコミが芦別山笠を発見したこと
であった。実は筆者も、新天町の飾り山が北海道に行ったことは知ってい
たのだが、この記事を見て初めて、芦別を訪れようという気持ちになっ
たのである。情報としての露出度も大きかったと見ていいだろう。

これに対して、今度は芦別から「北海道新聞」が博多へ取材に向かう。
奇しくもこれも同じ平成七年のことである。七月九日から三日間にわた
り下新に赴いた芦別の博多派遣者を中心に取材し報道している。「芦別
から博多へ 山笠の旅」と題した記事は、「肌で感じた本家の格」「流昇
きに挑んだ五人」「本家に認められ感激」と七月十三日から連日の三回連
載であった。連載初日の記事には、

玄界灘に沈む夕日を浴び、汗まみれの顔が輝いていた。福岡市箱崎浜。芦別健夏山笠振興会から派遣された一行十人は、博多祇園山笠の最初の行事、箱崎浜の真砂を持ち帰る「お汐井取り」から本家山笠の前半行事に参加してきた。七百五十年の伝統を誇る博多と十二年目の芦別。格式、規模、勇壮さ・どれにも圧倒されながら一行は本家山笠の吸収を続けた。九日から三日間にわたった「山笠への旅」を三回に分け紹介する。

とあり、以降芦別からの博多派遣者の活躍や下新の人々の語りなどを交えて、芦別と博多の交流の歴史を記述している。芦別と博多の橋渡しに尽力した、春口氏や亀田人形師の話はその中核をなしている。どこか、先に述べた「北国のオイサ」の記事を彷彿とさせるものがある。新聞という媒体が、博多と北海道というそれぞれの視点から、互いに取材をしたという事実。この背後には、先に述べた、「博多振興会」の芦別山笠「認知」という事実が大きく影響しているのは間違いないだろう。この記事連載の翌日平成七年七月十六日付「北海道新聞空知版」では、次のような見出しの記事が踊ることになる。

「追い山笠」に五千人の熱気

博多祇園山笠（やまがさ）から全国でただ一ヶ所、山笠祭りを公認されている芦別健夏山笠が本家・博多と同じ十五日、「追い山笠」で最高潮に達し、約五千人の見物客が沿道に詰めかけた……

たまたま、この年は博多と芦別の追い山が同日となった。「全国でただ一ヶ所、山笠を公認」という部分に、これまでマスコミに多かった「認知」という言葉からの進展が見られる。このように社会的にひとつ踏み込んだ「公認」という表現が用いられるようになった背景には、いまま

で見てきたマスコミの交流が影響を与えていると見ていいだろう。互いのマスコミが事実確認を終えたということである。

同族的系譜の言説

「博多振興会」の正式「認知」を経たことで、芦別は博多山笠そのもの持ち込むことに、気兼ねをする必要がなくなった。それにともなって、芦別山笠と博多山笠が断絶したものではなく、同一系譜上にあるということと言説化し始める。ここでもう一度振り返って、それまでの言説の変化を整理しておきたい。

昭和六十年当初、博多を意識始めたときには、博多のことを「本場」とよんでいた。博多人形を導入するときも、新聞などには「本場なみに」という言説が盛んに用いられている。しかし、この「本場」という表現には、芦別と博多を繋ぐ要素を示すものは含まれない。山笠にとって博多が正式な場所であり、その産地を示しているに過ぎないのである。ところが、平成二年になると博多を表す場合に別の言葉が「本場」と並んで使われるようになる。

「芦別振興会」会長の言葉を伝える同年七月四日付「北海道新聞空知版」の以下の記事では、

昨年から本家博多に会員が出掛けて研究を重ね、道内にはちょっとない迫力のある祭り。多くの道民に見て欲しい

とあり、長らく博多を志向し、その導入に意を用いてきた関係者の間では、さらに踏み込んだ表現として「本家」という言葉が使われ始めていたことを示している。この語彙の使用が、平成元年から「芦別振興会」が始めた、博多大黒流下新に研修生を送る博多派遣がきっかけになっていることは確かである。しかし、この時点では、まだ博多のなかのひと

つの町である下新との交流であり、博多全体との交流が確立されているわけではなかった。

芦別の意識としては、「博多に近づく」ということは、すなわち博多山笠の同族的関係入ることを意味していたと思われる。それは、この語彙の持つ意味からして「分家」ということが想定されていることから明らかである。

翌平成三年、このころ「本家」と併せて「山のぼせ」という言葉が芦別で使われるようになる。⁽³²⁾平成三年七月二十六日付「北海道新聞空知版」には、この年博多に派遣された「芦別振興会」の赤手拭の随想を載せているが、

……今回は博多の大黒流から春口栄治氏ら二人の役員らも招くことができた。芦別を愛し、祭りを愛する市民の手によって、この健夏山笠も定着したように思われる。博多つ子に負けず劣らず芦別つ子にも「山のぼせ」(山笠に夢中になって仕事が手に付かない人の意)が数多く現れる日も近い。

芦別でも博多山笠の形態を模倣し行事を実施するなかで、博多同様の気性までもが醸成されつつあることを示している。また、両者の気性の近似性を表すものとして、「博多つ子」に対して「芦別つ子」という表現も現れている。これもまた、系譜参入へのまなざしであろう。

平成四年の芦別山笠への博多人形導入で、「今までの健夏山笠は仮の姿」⁽³³⁾と言うように、この博多を芦別で実現することが本来の目的であることを公言する。平成二年に定めた「博多祇園山笠をマスターし、芦別独自の山笠スタイルを確立させ、まちづくりの原動力にすること」という芦別山笠の目標からすると、ひとつ段階を越えたことになる。同年七月の「博多振興会」との会見は、いままで、芦別山笠と博多山笠との交

流が下新というひとつの町レベルに留まっていたものから、博多全体へと広がることを意味した。

これ以降、「本家」という同族的系譜のなかで、博多と芦別が語られてきたことが、そのまま「家族」という比喩に移行してゆくことになった。会見直後に芦別を訪れた春口氏のコメントを乗せた平成四年七月二十二日付「北海道新聞空知版」は、「山笠」を通して友情広げよう」と題した記事のなかで、

「芦別のみなさんの山笠(やまがさ)にかける意気込みは本当にすばらしい」芦別健夏まつり(十八、十九日)のメインイベント・健夏山笠の視察に九州からやって来た博多祇園山笠の春口栄治さん(五二)は「弟格」をほめちぎった。

と伝え、博多山笠に対して、芦別山笠がその「弟」であるとの比喩を用いている。親族関係よりも、家族関係の方がより近い関係である。これからすると、博多山笠との距離が近くなったという芦別の感触を、この表現に見ることができる。

いずれにしても、このような同族的系譜を強調した言説を組み立てていく営みは、芦別が博多文化の正統な受容者であることを表明する方法であったことに間違いはない。

流当番制の影響

平成四年の「博多振興会」の認知は、組織面でも大きな影響を芦別に与えることとなった。平成六年に実施された「振興会の大改革」と言われるものがそれである。その要点は、「流」主体の運営に転換するというものであった。それまで、「芦別振興会」が中心となって山笠行事を仕切ってきたが、これからは、各流に山笠の運営をまかせるように変更

することである。

博多山笠では、「博多振興会」がその中心としてあるものの、運営自体は各流の独自性に任せられている。昇き山を出す七流は、それぞれ独自の方法で山笠を運営している。流が異なれば、組織・運営も違うというのが博多の特徴である。各流は「博多振興会」を通じて緩やかに繋がっているという構造である。山笠全体として統一でなければならぬ事柄、例えば神事・行事などの日程や、服装、交通規制の問題など、は振興会が決定するものの、その実施主体はあくまでも流である。

芦別が博多と一体化していくうえで、最終的には流主体の運営に移行したいという希望は当初からあった。流に山笠運営に関する実践力ができるまでの当面の間「芦別振興会」がその任にあたり、条件整備を進めてきたのであった。しかし、飾り山導入の実現を区切りとして、平成六年五月二十日の総会で、次のように表明する。

平成元年九月八日に設立した芦別健夏山笠振興会は、当初目標達成年次で設定した平成五年度までに飾り山の建設、博多人形師作成の上飾りの導入、博多と同規格の山笠台の建設、当番法被の導入、水法被規格の統一、手拭制度の充実等ハード面に関しては当初掲げた目標をほとんど達成した。

第一次目標は飾り山の導入でほとんど達成したというのである。ここに「芦別振興会」の博多山笠受容の方法論が見える。それは、ハード面の博多受容に意を注いできたことを意味する。それがこの年に完了したというのである。いわば、モノの伝播が一応の終結をみたことを述べているわけである。続けて、

しかし、流組織の充実及び昇き手の増加に関しては、当初の見込

みを大きく下回っている。については、これらの改善を図るため、次期長期目標として

- ① 流組織の充実と自治精神の確立。
 - ② 流主体による山笠行事の実施と当番制度の確立。
 - ③ 振興会組織の民主化と機能の縮小。
- を掲げ、目標達成年次を平成十年度に設定するものとする。⁽³⁴⁾

とあり、芦別の博多山笠受容が無形の組織・意識へと向けられていくこと、つまりソフト面の充実へ転換することを宣言している。流主体の運営への転換によって、「芦別振興会」の権限を縮小し各町の自主的精神を育てようというもので、それを五年間で実現しようというのである。また、芦別における流の性格を、「山笠行事を執り行うため、町内又はこれに準じた団体が結集した組織を流としようする」⁽³⁵⁾、「流は三以上の町内又はこれに準じた団体が構成され、運営されることが望ましい」と規定しており、博多のように町組と同義に用いている。

ひとくちに流の運営といっても、博多のなかでも様々な方法がある。「当番町制」をとっている流、「流当番」と言い流に属する町全部で運営にあたるもの、「もやい当番」、「ブロック当番」と言い、複数の町が連合して当番にあたるやりかたなどである。⁽³⁷⁾ 芦別は、春口氏を通じて博多下新との交流が続けてきた。下新の属す大黒流は、当番町制で山笠を運営している。改正された「運営規定」の第一条には、

流は、当番制を取り、その年の山笠行事一切を取り仕切る当番町、翌年の当番町となる受取町及びその他の町といった体制で運営することが望ましい。⁽³⁸⁾

とあり、博多山笠の流による運営方法のうち、大黒流の方法を採り入れ

ようとしていることが解る。これは平成元年から行っている博多派遣や、平成二年に芦別山笠の作法を大黒流の方法に統一していったことなどから当然のなりゆきであったと思われる、博多との交流が生み出した成果である。そのうえで、流ごとに規約を作ることになるが、その年の芦別山笠実施直前の六月に施行された「流会則」によると、この流当番制については、

(当番制度)

第四条 山笠行事の運営及び流の運営に係わる事務は、町内又はこれに準じた団体の当番制とし、その年の山笠行事の運営及び流の運営に係わる事務の一切を取り仕切る当番町、翌年の当番町となる受取町及びその他の町の体制とする。⁽⁴⁰⁾

と、当番町の仕事分担を定めている。五つの流にそれぞれ当番町を定め、流の内部で山笠の運営を行うというのである。しかし、先に述べた「運営規定」の九条を再度見ると、

その年の一番山笠を当番とし、当番となった流は資金造成ビーパーティー、本部詰所開き、若松取り及びその他別に定める行事の準備を行うこととする。

とあり、各流の当番町とは別に、毎年の一番山になった流が「当番」となって、芦別山笠全体の行事を取り仕切るという方法も併せ持ったものであることが判る。これを視ると、大黒流の方法だけではなく、博多でいう「流当番」の要素をも加味して創作された方法であると推察される。当番町制と同時に流全体としても山笠運営を行うこの方法を、芦別では「流当番制」とよぶが、ここにも、芦別の博多受容実践のありかたが現

れているといえる。流や当番町の力が発展途上にあり、それを補う方法を併用しているといえるのだが、その補助的方法を模索するにも、博多にある既存の要素から選択しているのである。

組織変更にともなう「芦別振興会」は、各流をとりまとめる組織に変容していく。会則には、「振興会は、総会で承認された流によって構成する。」⁽⁴¹⁾と謳われ、ここに至って組織面においても博多との同質化が始まることになったのである。

ところで、組織面の博多同質化は、モノの移入が契機となって突然起こったことではない。もちろん、それを増速したということでは、博多の山笠人形の力は大きかったことは否めないだろう。しかし、その推進力そのものは、別の次元に存在した。芦別健夏まつりが博多山笠を発見したときの驚きと憧れがその原点である。博多と同じ土俵に立つことにより、「憧憬」を実現しようというもので、組織面の博多との同質化は当初から計画されたものであった。それは、博多人形の導入を決定する前の平成三年のことになるが、「芦別振興会」が流当番制に先駆けて「流総代制」を導入していたことに現れている。「十年史」には次のようにある。

一月二四日の臨時総会で会則を変更し、流総代制度を導入した。これまで、振興会本部が各流に指導者を派遣するといった方法で運営してきたが、山笠の自治精神に則り、流主体の運営に向けて一歩を踏み出す形となった。(三九頁)

「芦別振興会」が各流の責任まで持つという運営だったのを、この時点から流の自主性を尊重する方向へと少しずつ変容し始めていたことが理解できる。いわばトップダウンからボトムアップへという思想である。この考え方の最終着地点が流当番制だったのである。そして、その原点となったのが、ここにあらわれる「自治精神」という言葉である。

「自治精神」の受容

博多人形による昇き山がそろい、飾り山が芦別に実現した。これに伴い、芦別山笠の身ぶりも徐々に変化が現れていた。平成元年からの博多派遣で、正確な博多の身体技法が伝えられてきたからである。

たとえば、それまで芦別では山笠が巡行するとき、ホイッスルで先導するという方式をとっていた。それを流総代制に移行した平成三年から中止する。それまで芦別では、山笠を昇くことに慣れもなく、重い山笠を動かすには、どうしても合図は必要であった。しかし、博多山笠を実際に経験し、その神事的な意味を理解するにおよんで、山笠巡行はスポーツ的なものではあり得ず、ホイッスルはそれにふさわしくないし、不要なものであるという認識が生まれてきたわけである。

博多において山笠は、昇き手全員のヤーという合図とともに、一呼吸おいて動き始め、同様にして止まる。もちろん、進行停止の合図を送るのは山笠の実働を指揮する取締である。しかし、それは声でなされるのではない。山笠の前方において手を挙げるといふ動作によって、山笠の



手を挙げて指示を出す大黒流取締
昭和63年

台上がりに伝えられ、それが大勢の昇き手に伝達されるというシステムになっている。端から見ると、それは山笠が自動的に動いているように見える。

このような山笠の動きとの連想から現れてくる言説が「自治精神」である。それは、「自治都市」という博多のアイデンティティと深く関わって成立したものである。「中世から貿易都市として栄えてきた博多は自治都市であり、そのなかで醸成されてきた山笠は政治的な圧力で一度も中止したことはない」という言説がその代表であろう。これは近代に創りだされたものであり、実際の歴史事象とは若干異なっている。江戸期には福岡藩の厳格な支配を受け、作る山笠の表題などは前もって「下絵」を藩に提出することで検閲を受けているし、祭りの実施にあたっては、山笠の先導を奉行などの役人が行っている。また、現代の博多山笠を語るときには、なくてはならない水法被なども、明治期に西欧衛生観念を導入した行政当局の、裸では山笠をさせないという圧力に譲歩した博多の町側の策であったものであることなど、数えればきりが無い。しかし、現代まで博多山笠が継続してきた要因を述べる場合に、この「博多における自治精神」は必ず使用される言説である。

以下の平成十五年七月九日付「読売新聞」に掲載された「山笠の伝統と心意気を生かして、博多のまちづくりを！」という記事の中に表れる、現在の「博多振興会」会長の後藤久義氏と福岡市長山崎広太郎氏の言葉は、それがいかに典型的であるかを示している。

博多祇園山笠は、国指定という冠の付いた重要無形民俗文化財です。中世の自治都市・博多で生まれ、以来博多の発展とともに引き継がれて、今や七六二年の伝統があります。私たち博多のモンには特別の思い入れがあります。

博多部のまちは往時のにぎわいが薄れ、夜間人口が減っていて、

定住化対策が一番の課題です。山笠の昇き手も外部からの応援を借りているのが現状です。しかし、博多のモンには智慧があります。街づくりにも住民の自主性、自治の精神を生かしたいですね。

……地域コミュニティの活性化による自治―をまちづくりの柱にしています。海によってアジアに開かれた元氣印の福岡市と称されていますが、博多山笠に象徴される市民の氣概、博多っ子氣質があればこそです。自治の根源とわれる、山笠の糸乱れぬまとまりは見事です。

この「自治精神」という言説は、芦別においてどのように受容されていったのだろうか。平成元年に「芦別振興会」が制定した会則には、

(目的) 第二条 この会は、博多祇園山笠及び博多祇園山笠振興会にならない、芦別市において芦別健夏山笠を振興することにより文化の向上とスポーツ精神の昂揚をはかり、ひいては郷土発展の一助となることを目的とする。⁽⁴³⁾

とある。この時点まで山笠はスポーツ的要素で理解されていた。この「スポーツ精神」というところに、ホイッスル使用の根拠はあったと考えてもよいであろう。それが、「博多振興会」の認知を受け、飾り山の導入を果たした後の平成六年には会則が、

(目的) 第二条 この会は、博多祇園山笠及び博多祇園山笠振興会に倣い、山笠行事を通して文化の向上と自治精神の確立を目指し、ひいては芦別市の振興、発展の一助となることを目的とする。

と変化する。この「自治精神」という言説が、以降の芦別における博多受容において重要な位置を占めるようになってくる。

平成三年に、博多山笠のお汐井取りの代替行事として「若松取り」が始まったが、その成立過程においても、この言説が既に受容のフィルターとして働いていたことが、次の話からも窺える。

若松取りを始めたころは、博多のお汐井取りに倣って、「黄金水松」まで走っていくことも考えたが、距離が遠すぎて難しかった。それで、何人かで櫓を渡してリレー形式にしたら、という案も出た。しかし、それではスポーツ大会になつてしまい、山笠にふさわしくないということになった。

この判断には山笠を神事的性格と捉えた結果だけではなく、「スポーツ精神」から「自治精神」へという芦別の山笠に対する意識変容の過程が作用しているといえるだろう。

博多では、山笠の「自治精神」と組になるものとして「手一本」が取り上げられる。外部からは「博多手一本」とよばれる手締めである。手締めには関東式と関西式がある。前者が三拍三回を基本とし、俗に「三七拍子」とよばれるのに対し、後者は関西式の二拍三回を基本とする方法である。これがどのように「自治精神」との関係言説として組み立てられているのか、NHK連続ドラマ『走らんか』の原作となった『博多っ子純情』の作者長谷川法世氏が、平成十五年七月九日付「読売新聞」に語ったことを例に視てみよう。

私は冷泉町生まれで、山笠については何でも知っています(笑い)。なかでも、「手一本」に注目したいですね。山笠準備でも節目ごとに、議論の後は必ず「手一本」を入れます。自分の意見が少数の場合、

煮詰めて、煮詰めて、大勢が決まったら意見を引っ込みます。いつまでもぐずぐず言っていたら山は動きません。「手一本」は全会一致を表すものですから、民主主義の最高の形です。そして、流の組織は上下関係が厳しいピラミッド型社会なのも特徴です。役員は威張らない。大きな声でてきぱきと指示する。すてきな運命共同体です。

博多生まれの彼は、手一本は民主主義すなわち「自治精神」の現れであると言っている。また、この同じ紙面で対談した博多上川端通り商店街理事長は、

博多山笠があるおかげで横のつながりができていることはありがたいですね。一声かけると一〇町一五町にまで話を通る。そして「手一本」で話が進みます。よその都市にはありません。長幼の礼が行き届いているのも博多の良い点です。山笠に参加する子どもたちは礼儀正しい。気持ちがいいですね。

と語っている。この言説は、手一本が山笠運営に限らず日常生活にも秩序と調和をもたらし、博多らしさの現れともなっていることを説明している。

では、芦別では手一本をどう捉えたか。「芦別振興会」役員のT氏の話をみれば自ずと明らかになる。

山笠の会議や打合わせで、論議するのは日常的。芦別は「論議ベタ」で、ともすれば、後クサレを残すことも、まま見られたが、山笠の熱い論議となることはしばしばで、結論は明白のまとめ、その後、「手一本」を入れて散会する。この「手一本」の後、その内容については論議を蒸し返したり、ましてや、これをくつがえすことなど、

しない。対立、遺恨を残さない知恵で、論議上手になってゆくように思われる。住民参加、住民自治にとって、このようなことも大切なことと思われ、よく考えてみれば、これは議会制民主主義の原則だ。⁽⁴⁾

彼は平成二年に博多に派遣され、初めて手一本を体感したときの様子を次のように語る。

手一本は芦別ではなじみのない新しいもので「変わっているな」と感じた。軽いカルチャーショックを感じた。しかし、ヨーという低い声で手一本を入れるところに、祭りで高揚した雰囲気や「抑えたポテンシャル」で表現する仕組みを感じて、これも、「重厚さがあった、かっこいいな」と感じた。また、この手一本は江戸神輿との違いも明らかにしてくれた。

芦別では、平成三年に手一本が「芦別振興会」の総会のなかに儀式として登場している。⁽⁴⁵⁾とはいうものの、実際に芦別山笠に導入すると、ちょっとした混乱を引き起こした。

最初に手一本を始めたとき、何度やっても、どうしてもうまく行かなかった。それで、手打ちのリズムを変えようかという話まで、真剣に話し合われた。

これは、芦別でそれまで行われていた手締めが関東式であったからだ。関西式の拍数が少なく、ゆつくりとした調子の手一本を習得するのに、時間を必要としたのである。「手打ちのリズムを変えようか」というのも芦別が慣れ親しんできた身ぶりとは異なったものであったことを意味している。しかし、うまくいかなかったのはそれだけが理由ではない。

『十年史』は、

平成元年以前は、ゴールをして台上がりをしていると、勝手に山を崩し始めるので山に乗っていられた。また、祝い目出た、手一本も好き勝手にやっていた。(二三八頁)

と述べ、「平成元年以前は」というところがそれを語っている。元年は「芦別振興会」が結成された年である。手一本が「自治精神」に関連した大切な儀礼であると芦別に理解されないまま行われていた時期にあたる。それまで手一本を入れる場面も統一的に決められておらず、つまり儀礼の手段としての位置づけがなされてなかったのである。意味不明な動作を模倣するときに、習得が困難になることはままある。芦別の状況はこれを反映していたのではなかったかと推測する。また、先に紹介したT氏の言葉からすれば、芦別が「論議ベタ」というそれまでに醸成されていた芦別の日常意識が、この身体技法に適合できない要因であったと考えることも可能であろう。いずれも「意識」が鍵を握っていたことになる。

その後の平成八年五月十七日の総会で、「(総会の成立及び議事) 第七条 3 総会の議事はすべて全会一致で決する」と決定方法を会則に盛り込んでいる。手一本とその根本である「自治精神」の受容の最終的な姿である。

④ 受容の個性化

流の個性化

流主体の運営となった芦別では、加速度的に博多化が進行するようになる。改正に携わったS氏はその模様を次のように述懐する。

芦別の山笠が変わり始めたのは、平成六年の「流当番制」施行からです。流ごとに独自に人を集めて教育するようになり、独自性が見られるようになりました。

芦別がこれまで行ってきた博多山笠受容の方法は、「芦別振興会」のT氏の言葉を借りると「根こそぎ全部持つてきて、真似しまくる」ということであつた。その過激な方法に秩序をもたらしていたのが、「芦別振興会」の一元管理であつた。芦別における博多山笠受容を推進し、その管理を厳格に行ってきたのだから、流としての個性表出も制限せざるを得なかったわけである。しかし、管理されたものはそれ以上の広がりやバリエーションを生まないという特質の通り、既に述べたように、物質的な整備は完了できたが、参加者の増加などの問題を解決できずにいた。それは、意識に帰属する事柄だったからである。次の話などは、この制度になって起こった意識変化の典型例である。

芦別で最初に当番法被を作ったのは平成二年のこと。今は中央流の法被になつていゝものである。作つた数が少なかったこともあり、当番法被は役員の法被という認識だった。このころは、当番法被を平素に着ることに抵抗があり、気恥ずかしい感じだった。しかし、平成六年の振興会の改革で流主体の運営を行う流当番制になり、法被を人前で着ることが恥ずかしいと思わなくなった。そして、法被が「粹」だと見られるようになった。

法被自体は博多と同様な素材、類似の柄で模造しているのだが、それを使う芦別側が博多同様の意識に成長していなかったことになる。「気恥ずかしい」と感じた意識が、この改革後の意識変化とともに、観衆からも粹と見られるまでに変化している。

また、流の個性化と自主性という面からは次のような話がある。

平成六年に流当番制にしたときに、振興会から各流に詰め所を開くように打診した。翌年最初に栄流が開き、中央流が続いた。当時は振興会のなかでも詰め所の設置は早すぎるのではないかという意見もあった。しかし、これはやってみて正解だった。いまでは流の自主性が出てきて、芦別山笠が発展していく足がかりを作っているからだ。

「詰め所」というのは、昇き手が集まり、行事前の準備や直会などで参集する場所である。それまでは、「芦別振興会」がひとつだけ開いていた「本部詰め所」を各流が使っていた。博多では流内各町に詰め所があり、行事が終了したら必ずそこで直会という慰労会が行われることになっている。まだ早いと判断

されていたのは、この詰め所での行事が、博多でも厳し いしきたりのもとに行われるからである。儀礼の混乱という面が心配されたのである。しかしそれは杞憂に終わ り、流の個性が発揮される きっかけとなり、芦別山笠成 長の基盤になってきたことを 示している。

中央流は、芦別山笠発祥の 地とされる中央町という町内 で構成されている流で、芦別



詰め所で接待する博多大黒流赤手拭 昭和63年

の博多山笠発見からこの時点までをリードしてきたところである。対して栄流は栄町という商店街で流を形成し、ひとつの昇山を持っている。町の住人が少ないので、人員確保も大変だという。自宅は別の流内だが店舗が栄町にあることから栄流に参加する人、最初に山笠を昇いたのが縁で今でも栄流から参加する人など、居住地が流外にある人が多いのが特徴である。なぜ人が集まるのか、栄流の人びとはこの町に「義理と人情があるから」と答えた。やはり意識の問題として捉えているのである。

博多の流各町も、居住者だけでは山笠を運営することはできない。江戸期からの加勢の伝統は現代にいたって、栄流と同じように「職縁」で人を集めるという方法へと変化している。博多山笠は、歴史的に周辺地域を様々なかたちで巻き込むことで維持されてきたのである。⁴⁶その紐帯になっていることが、栄流がいう「義理と人情」に近い意識といえる。博多山笠に周辺から参加する人々も、毎年同じ町内から参加する。町を変えて山笠に出る人もたまには見られるが、博多の町からは、「義理と礼儀に欠ける」としてよしとされないのである。その意味で、栄流における周辺の人々との交流は、博多に見られることと同じなのである。



栄流の詰め所 平成11年

また、改革のなかでも大きな目的となった参加者の増加については、

平成元年までは子どもが少なかった。平成六年に流が主体になる流当番制の方針がでると、子どもが山笠に参加し始めた。

といい、子どもの参加が増えるなど、良好な結果を出している。博多山笠は、子どもから老人まで、多層な年齢の参加者によって行うのを常とする。その年齢に応じて仕事があり、それが一体となってはじめて山笠行事が完遂できるのである。なかには、子どもにしかできない大切な役目がある。「先走り」と「招き板」である。先走りは、山笠の到来を告げるもので、子どもが走り抜けるともうすぐ山笠が来るということが分かる。招き板は「○番山笠 ○○流」と墨書した立て板を持って走り、山笠を招くように板を動かすことからこの名がある。⁽⁴⁷⁾これとて、子どもがいないと実現できない。

子どもの参加を積極的に進め、町内すべての住民が山笠に参加できる



博多大黒流の招き板 昭和63年

ものにしようという動きも、流のなかに見いだされるようになってくる。緑幸流はそれに熱心であった。この改革前年に緑幸流から博多に派遣されたW氏は、この招き板の使い方を詳しく学び流の子どもたちに伝えている。「芦別振興会」の議事録に招き板の文字がはじめて現れるのは平成五年七月のことである。⁽⁴⁸⁾緑幸流は、この流当番制実施によって参加者が増え、子どもの参加は一番多くなったところである。それは、この流自体の構造にも原因があった。現在、緑町、幸町、雇用促進ひばり団地の三町で構成される緑幸流は、平成元年に中央流から分離独立して成立したため、参加人員が不足するという問題を抱えていた。しかしながら、このハンディは逆に緑幸流を博多に近づける結果を生んだ。博多の各町も、緑幸流と同様の問題を抱え、居住者が減少するなかで山笠という伝統行事を維持し続けるという問題を解決するため、人集めを多面的に工夫してきたからである。『十年史』は、

平成七年より当流地域の緑ヶ丘小学校の当時四年生の児童八名程が、招き板・提燈を持って、祝儀山笠・追い山ならし・追い山笠の行事に先走りとして参加する様になりました。(九一頁)

と伝え、博多山笠の子どもの要素



芦別緑幸流の招き板 平成11年

を最初に取り入れたのが緑幸流であることを伝えている。また苦勞のなかで醸成された、地域ぐるみの山笠への志向性を、次のように話す人もいる。

芦別山笠には、まとい踊りから引き継いだ子どもの山車がある。現在、これも博多の子供山のように変えたいという気持ちがある。特に、人間の少ない緑幸流はこのことに熱心である。子供山笠と子供会との関係などを考えて、現在のような、山笠の将来性に繋がらない子供会行事ではなく将来の昇き手として戻ってくることを期待できるものにしたという意向がある。また、祭りの華やかさという点から女性参加の道も探っている。

男の祭りといわれる山笠からすると、女性参加までも眼中において、町内行事としての発展を模索する様子は、「芦別振興会」の一元管理から外れてきているといえる。しかし、緑幸流は決して、博多山笠の芦別での実現という目的からかけ離れて流の個性を発揮しているのではなかった。この緑幸流の動きについては、あとで詳述する。そして、ともかくも流当番制施行時の一番山がこの緑幸流であったのである。

このような流に見られる個性化は、芦別の博多化という目的から大きく逸脱するものではなく、むしろかえって博多に近づいているようにも思える。平成元年から続いている「芦別振興会」による博多派遣の賜であるとも想像されるが、すべてがそうであろうか。

ここ十年で、芦別では博多になにもかもが似てきた。「気持ちが揃い、それが形に反映してきた」そのきっかけになったのが緑幸流・栄流である。しかし、博多派遣の経験者はいずれも少ない。

博多派遣者が少ない流にそれが具現している状況からすると、それには別の要因があると考えるのが妥当である。「気持ちが揃い、それが形に反映」という部分、いままでの形から意識へという進行からは逆の展開に注目する必要がある。モノの移入や博多派遣だけが芦別の流の博多化を進めていることではないことが判る。博多派遣者が少ない流が意識の面では、より博多に近づいているという事実。それは、この流当番制による流の個性化が、博多との共鳴をもたらしていることを語っている。つまり同じような条件のもとでは、類似的思考が生み出されるということでもあろう。しかしこれは、前段の「芦別振興会」の条件整備などとの複雑な絡みがあつてのこと、決して自然発生的なことではないのもちろんである。

ともかくもこの改革で、「芦別振興会」の管理指導がなくても、ある程度自律的に博多の民俗文化が芦別に受容されていく基盤ができあがつたといえるであろう。

伝承管理集団としての市流

ここで市流のことを述べておかなければならない。芦別山笠には現在、全部で六つの流がある。そのひとつである市流は、他の流とは違った性質を持っている。市役所職員を中心とする流で、平成元年「芦別健夏山笠市役所若手の会」から平成三年に「市役所流」と名称を変えて、芦別山笠の博多受容において中心的な役割を果たしてきた。「市流」という博多風の名称になったのは、平成四年のこと。ちょうど博多の山笠人形が導入された時期である。市流の特徴は、五流がそれぞれ昇き山を持っているのに対し、それを持たないところにある。人数的には、構成員はどよりも多く平成四年の時点で八十六人を数えていた。決して昇き山を持ってない人数ではないのだが、その理由を「芦別振興会」のS氏は次のように語る。

舁き山を持たない市流は、芦別山笠を縁の下から支えることを目的にしてきた。市役所職員が九十九・八パーセントという構成から、行政として行事を成功させるつとめもある。……「流当番制」で行う事柄は市流でまず実験してから、各流に打診するようにしている。市流は一から四までの組で構成されているが、追い山当日は、市の一が緑幸流、市の二が北大黒流、市の三と四が中央流の加勢にまわる。

この話から、市流は博多の流儀を芦別が受容する際、その実効性を確認後に各流に伝達するというフィルター的な役割と、枠をはずれて山笠が違う方向に行くことを制限する役目を担っていたことが解る。それは、これまで「芦別振興会」が担っていた機能を継承したものといえ、芦別山笠の博多化をはかるうえで重要な、行事におけるそれぞれの作法や身体技法を統一するための措置であった。真正な博多山笠を芦別で広め定着させていくためには、ともすれば流動的になりがちな、身体技法や作法などを博多の様式で保持する機能を重視しているのである。

また、市流が追い山の際に他の流の加勢をするという点についても、博多から学んだものであることは確かである。市流は「博多化」のための管理集団であるとともに、山笠を実働させるための加勢町の役割も果たしてきたのである。しかしこのように、芦別山笠の基礎を固めてきた市流にも、悩みがあった。

流当番制になって、市流でもいろんな不満が出てきた。一番の不満は「どうして舁き山が持てないんだ」というものだった。その声をS総務は「お客さんを集めるのは二の次であり、まず山笠を文化として根付かせよう、その縁の下の働きを市流がしよう」ということで、話をまとめた。市流は各流のなかで一番の人員を持っているの

で、このような不満が出てくるのも当然である。しかし、誰かが縁の下の力持ちを果たさなければ、根付く途中の山笠が枯れてしまうからだ。

若手には、「これだけの人がいて、どうして舁き山が持てないのか」という不満が内在していたのである。この要求に対して、平成四年九月十八日の総代会は「市流の一本化について検討の結果、将来市流は一本で行くこと。舁き山五基は将来とも維持すること」の二点を確認したとあり、市流の舁き山は認められなかったのである。そのかわり、飾り山が実現した平成六年に開かれた定期総会で、

市流は、舁き山笠を持たない流であることから、現在、振興会が直接運営管理している飾り山に関する一切の業務を移管し、新たに六番山笠市流として認定するものとする。……また、市流は、飾り山笠の流となることから六番のまま据え置きとし、祝儀山笠及び追い山笠の行事については、他の流に参加するものとする。当番については、北流が一番山笠となったときに合同で行うこととする。⁽⁴⁹⁾

と決定され、飾り山を担当する流と位置づけられている。S氏は「この飾り山だけを出す町と言う理屈も、博多から学んだものである」と、この運営方法について語った。確かに、博多には舁き山を出す七つの流の他、飾り山だけを出す町や団体は六つ存在する。⁽⁵⁰⁾このようにして飾り山を自らの流の山笠とすることで、市流若手の不満を解消していったのである。

芦別山笠としては、博多と同一性を求めるのであれば、舁き山は七本あってしかるべしである。現在の博多山笠では、七本の舁き山が出るからである。それを差し置いても、市流をこの位置に留めている理由は、

博多山笠を芦別が受容するに際して、その伝承管理を厳格にする必要性からのことと推察できる。この分析から、市流は芦別における博多の民俗文化受容を促進し、正統なたちで定着するように管理する機能を持つ集団として規定されていたといつてよいだろう。

それでも昇き山を持ちたい、という市流の熱望は冷めることはなかった。「芦別振興会」は、これを解決するのに、⁽⁵¹⁾ 少なくとも博多山笠へ回歸する。平成六年八月十二日に行われた臨時総会で、山笠を昇く日をも一日増やすことが検討されているのである。

これまでの芦別における博多山笠受容経過を整理しておくと、博多山笠の主な行事は、お汐井取り、流昇き、朝山、追い山ならし、集団山見せ、追い山である。このうち、芦別は平成二年までに、博多山笠のお汐井取りに該当する部分を「若松取り」、流昇き・朝山を「祝儀山」、そして「追い山」と実現してきた。まだなのは、追い山ならしと集団山見せである。集団山見せは博多の特殊

な事情によって昭和三十七年に新しく始まった行事である。福岡市は博多部と福岡部という二つの文化の異なる町が連結して近世に成立した。福岡が藩主黒田氏によって新しく開発された町であるのに対して、博多部は中世からの歴史を有し、独特の文化が華開いたとされる。確かに近代までは、博多部と福岡部では、言葉・習慣などが異なっていた。山笠はこのうち博多部の祭りとして存続してきたものだった。集団山見せは、それ



芦別祝儀山 平成11年

まで山笠が旧博多部を出るこ
とがなかったのを、市民の祭
りとしての意味合いから、福
岡部に昇き入れて公開したい
という福岡市からの要請に
よつて始まった。当初博多か
らは、「福岡部に繰り込むの
は山笠の歴史に例がない」と
か「博多山笠は櫛田神社の奉
納行事であり、見物中心のパ
レード化はもつてのほか」な
どと反対意見も多かったとい
い、七流のうちこの行事に加
わらないとするとところもあつ

たが、結果的に「福岡市の発展に役立つ」ということで実行に移された。⁽⁵²⁾
対して、追い山ならしは、山笠行事の最高潮行事追い山の予行練習。こ
のときの山笠の走り具合をみて調整し、本番に供えるという意味がある。
平成三年七月二十日に山笠の技術指導で芦別にやってきた春口氏は、
芦別山笠を評して「芦別の山笠は、博多という集団山みたいですね」と
発言している。この「集団山」とは、集団山見せのことである。芦別の
山笠はこの行事に類似していると指摘したのである。芦別としては、こ
の指摘から、集団山見せを選択してもよかったはずである。しかし、平
成六年十月に行われた総代会で、流昇きか「追い山ならし」か、という
ところまで話がまとまる。そして平成七年二月三日の臨時総会で、

追加行事を次のとおり執り行う。

1 追加行事は『追い山ならし』として七月一三日(木)午後七時に



芦別追い山一番山の昇き出し 平成11年

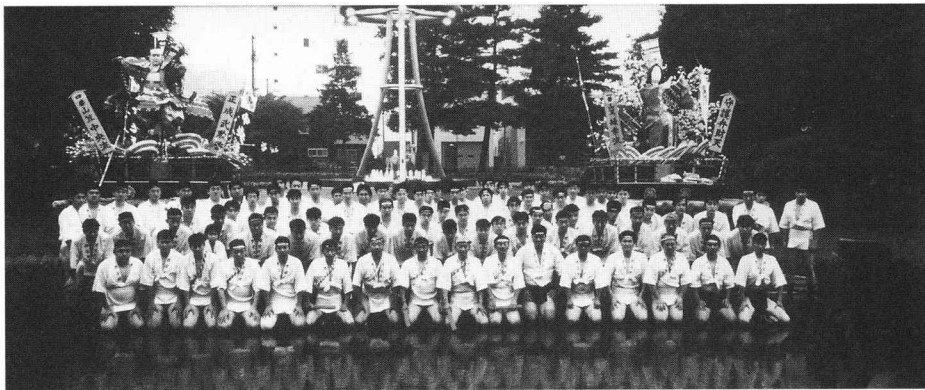
行うこととし、『祝儀山笠』を七月一日(火)午後七時に移動する。

2 コースは1km程度とする。

3 内容については、市流一基、他の五流合同で一基の計二基によるタイムレースとする。⁽⁵⁴⁾

結果的に観光化の道としての集団山見せより、伝統的行事の位置づけになる『追い山ならし』を選択したのである。そして、昇き山を熱望していた市流をその主役にあてた。この選択には、山笠を町おこしという名のイベントではないものにするため、伝統的な行事を志向してきた「芦別振興会」の意向が大きく働いていたのだらうと思えた。しかし、その真意はもつと違うところにあった。S氏はそれを次のように語る。

昇き山をもう一本増やしたい、そして市流で持つて昇きたい、という要求に応える意味ではじめたものである。市流には血気盛んな若いものが多く、どうして昇



追い山ならしに結集した市流 平成11年

き山が持てないのか、という不満が抜き差しならぬ問題としてあった。その憤懣のガス抜きとして始めたのが「追い山ならし」であった。若いメンバーの欲求を解消するためには、市流の実力が示せるものである必要があった。追い山ならしにはそれがあった。「競争にこだわる」ことである。これで、「実力を示したい」ということだった。

市流の不満解消法として博多山笠の伝統的装いに内面化された競技性を採り入れたのである。とはいっても、これでまたひとつ博多へ近づいたことにならない。最初の「追い山ならし」の感想を語る青井会長の話を書いた平成七年七月二十三日付「北海道新聞空知版」では、

初の「追い山ならし」

盛り上がりました。博多でやっている「追い山ならし」を初めて取り入れたこともありました。見せ場の追い山に対し、二日前の追い山ならしはいわば予行演習。しかし、参加する六つの流のうち、ただ一つ山笠を持たない市職員の市流と他の選抜の一騎打ちですから力が入りました。

と伝え、昇き山を持たない市流の不満を一気に解消するような状況だったことを伝えている。また、S氏は、

追い山の二日前に行われる「追い山ならし」は、加勢町としての市流と他の流が対決する行事として捉えています。芦別山笠行事のクライマックスは追い山ですが、市流のクライマックスは「追い山ならし」なのです。

と語り、伝承管理集団としての市流にとって、これが中心行事であるという認識になっている。ここに至って芦別山笠は、博多山笠が持つ伝統的行事のほとんどを、北海道の地で実現することとなった。

博多受容の増速

流当番制の実施の影響は、儀礼面においても新たな博多化をもたらした。平成七年から始まった「当番流引継ぎ」という行事にそれが見られる。博多大黒流においては、追い山終了後、飾りを下ろした素山をその年の当番町から翌年の当番町「受取り町」の詰め所へ昇りて行き、引継ぎ目録とともに渡す。双方の当番町役員と昇き手が対峙し、引継ぎの口上のあと、手一本で締めて互いの労をねぎらう。これを「当番町引継ぎ」とよぶ。この引継ぎのあと、当番町は流各町を回り、御礼を述べる。

芦別は、この要素を当番流引継ぎという方法で、山笠終了後に行われる「反省会兼臨時総会」⁽⁵⁵⁾で行う儀礼に反映した。『十年史』には、

八月十一日の反省会兼臨時総会から「当番流引継ぎ」が追加され、毎年反省会の席で引継ぎを行うこととなった。当番流の役員と受取流の役員が向かい合って手一本を入れ、引継ぎ完了となる。(五六頁)



博多大黒流当番町引継ぎ 昭和63年

とあり、明らかに博多の様式模倣を意図したものであることが判る。これとて、流当番制実施前には実現できなかったことである。組織的な基盤が同じになることがもたらした結果であるといえる。しかしながら、儀礼自体は博多と全く同じにはなっていない。芦別の実状に合わせた受容法である。

初めて当番流引継ぎが行われた同じ席上で、博多山笠受容の究極目標である芦別での

「櫛田入り」すなわち「清道入り」の実施の気運が生まれている。⁽⁵⁶⁾議事録によると「将来に向けて『清道入り』等についても検討する」⁽⁵⁷⁾ことが審議されている。これも、流当番制の実施と無関係ではないだろう。現実には、費用と場所の問題で実現には到らなかったものの、⁽⁵⁸⁾このころの芦別は何かをせずにはいられないほど、博多を過剰に受信する体質へと変貌していたことが窺える。

「決勝点の横断幕」実現もまた、その状況を示している。博多の追い山は、櫛田入りの後、旧博多部五キロの行程を駆ける。そして、須崎間屋街のある廻り止めに入る。ここがゴールである。そこには赤地に白抜きで「決勝点」⁽⁵⁹⁾記された横断幕が張られる。芦別の場合はJR芦別駅前の通りから出発してそこに戻ってくる。出発点とゴールが同じになっているが、ここに「決勝点」と記した横断幕を張ろうという動きが、平成六年に起こっているのである。⁽⁶⁰⁾実現したのは、流当番制を実施した翌年



下新と手一本を入れる当番町 昭和63年

の追い山からである。その仕様は「赤地に白抜きで『決勝点』と染めた横幕⁽⁶¹⁾」となっており、博多の様式そのものを受容しようとしていたことが解る。しかし現実には、直前の会合で「白地に赤字で『決勝点』と染めた横幕⁽⁶²⁾」に変更されている。ここに博多との反転が見られる。この点をS氏は、

本来なら、博多と同じ「赤地に白抜きで『決勝点』と染めた横幕」を使いたかったのですが、その費用があまりに高額となる事を知り、「白地に赤地で『決勝点』とペイントしたものにしたのです。製作も近くの看板店に依頼しました。この横断幕は博多と同じということ



芦別山笠の決勝点横幕



博多山笠の決勝点横断幕

を意識したものの、博多山笠のひとつひとつの物の値段の高さがネックになり、現実的なかたちで実現したものです。

経費面からの転換であるというが、博多に近い形で実現するという方法であることには違いないと語っている。ここに芦別の博多受容実践のありかたが見て取れる。それは、「芦別振興会」の紋章制定のなどのように、すでに芦別が何度も経験してきたことである。意識は博多に繋ぎながら、現実的方法によって模倣するということである。⁽⁶³⁾

飾り山の更新

流当番制実施の主眼は、ソフト面の充実にあった。博多山笠同様の地域基盤である流を整備することによって、博多山笠が持つ精神性を芦別において育てていくことに目的があった。それは、既に述べたように着実に進行していた。

平成七年八月当番流引継ぎが行われた席上で、「飾り山笠更新」の提案が行われ、九月八日の臨時総会で以下のように決議された。⁽⁶⁴⁾

飾り山笠については、平成五年に始めて建設したところであるが、既に三年を経過していることから人形も色あせ、傷んでいる箇所も相当見られるようになってきている。については、平成八年度に飾り山笠を更新することとし、費用については平成六年度から積み立てている飾り山修繕基金のほか、市に対して助成金を要請する等の対策を講じることとする。

それまでは、福岡市天神の新天町で使われた飾り山を、平成五年に芦別に譲り受けて毎年飾ってきた。しかし、経年劣化のために人形が色あせ、痛みも多々見られるようになったというのである。博多周辺の山笠

実施地域では、博多山笠終了後に飾り山を運んで、自らの祭りに飾るところは多い。しかし、その全部が博多人形師からのリースという方法で実現しているため、祭りが終わると飾り山の一切は、人形師に返還されるのである。芦別の場合は、距離的な問題もあり買い取りとしたため、毎年の展示による劣化はどうすることもできなかったであろう。

芦別の飾り山は博多山笠自体の移入という範疇に入る。それは、流当番制実施以前の芦別にとって、「ハード面の充実」という目標からすれば、妥当な選択であった。平成六年に「芦別振興会」が「ソフト面の充実」へと方針転換したが、それを踏まえてこの更新を観ると、飾り山そのものよりも、「更新」という方法に主眼が置かれていると考えることができる。つまり、「山笠は毎年作り替えるもの」という博多の意識を受容しようとしているのである。博多では、山笠飾りは昇き山・飾り山を問わず、毎年更新される。その理由には次のような説明がある。夏の疫病送りとしての起源を持つ山笠は、追い山が終了するとすぐに壊される。これは、山笠に宿る神威によって疫病を送り出し、その疫病神を祭りそして破棄するという「祭り棄て」の理論にあるというのである。芦別の飾り山更新の言説から、それを見いだすことはできないが、芦別の山笠を「祭り」として理解するという志向性は民間信仰的部分と不可分離の関係にあり、無意識のうちに博多における「更新」の心性が反映したのではないかという推測ができる。

しかし、芦別市に対してそのような理由でもって、補助金を申請することはできない。あくまでも、芦別市の観光に寄与すると言う点が強調される必要があった。平成七年九月五日付で芦別市長宛に出された「陳情書」には、

……芦別健夏山笠振興会は平成元年九月八日の創立以来、単なるイベントではなく、地域に根ざした本物の『祭』を目指して各種の行

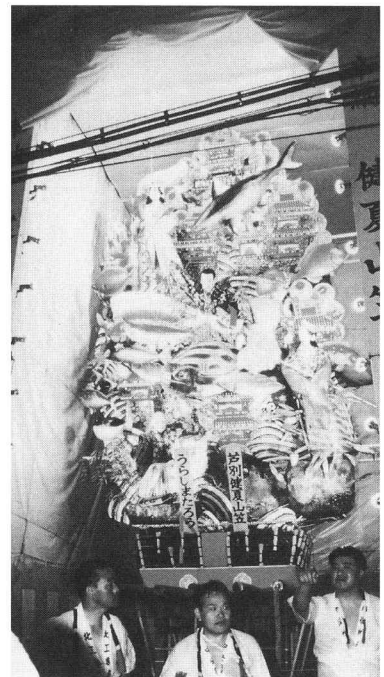
事や組織づくりを行なってきたところです。

さて、振興会では平成五年度に貴市の御協力を賜り、飾り山笠を建設したところですが、東京より北で飾り山笠が建てられたのは初めてということで、以来、大変な御好評をいただいております。特に今年は、七月二日の北海道新聞の一面にカラー写真で紹介されたことにより、観光バスが立ち寄るなど連日たくさんの観光客が訪れておりました。しかし、この飾り山笠も既に三年を経過したことから、人形も色あせ、傷んでいる箇所も相当見られるようになっていきます……

民間信仰的部分は「単なるイベントではなく、地域に根ざした本物の『祭』」という部分に表白されているものの、「東京以北で初めてのこと」であり、新聞の一面に載り、観光客が多くなったことなど、芦別市の観光資源として効用を主な理由としてあげ、振興会で工面できない部分に補助金の助成を願っている。結局、市からの補助を受けて飾り山を平成八年に更新することになる。同年六月二十五日付「北海道新聞空知版」には、「秀吉ら武将あでやか 博多から念願の自前の山笠到着」という見出しで次のように伝えた。

……飾り山笠は、本家の博多祇園山笠にならい三年前から登場した。これまでは博多から譲り受けた牛若丸と弁慶を描く「五条大橋仕置」を飾り、自前の飾り山笠は関係者の願いだった。……青井会長は「やはり自前は格別。亀田先生の人形は目の輝きや迫力が違う」と喜んでいた。

同じ亀田人形師の作であるものの、「自前」のものであるということ、が、「目の輝き」「迫力」の違いとして関係者に認識されていることを、



更新された飾り山 平成11年

この記事は伝えている。芦別最初の飾り山は、意識のうえではまだ、それはあくまでも「新天町の飾り山」であって、芦別山笠そのものではなかったのである。芦別の「自前」へのこだわりは、博多受容が「芦別らしさ」という個性化の方向へと進み始めたことを示している。

5 権威と序列

「博多振興会」役員の芦別来訪

飾り山の更新が実現した平成八年。「芦別振興会」に激震が走る。

六月二十一日の総代会でその年の行事の詳細を協議していたところ、亀田先生から連絡が入り、博多祇園山笠振興会石橋清助会長ほか数名の役員が、芦別健夏山笠の視察に見えろとのことであった。長野事務局長からこのことが報告されると、会議の席は騒然となった。
(五九頁)

「博多振興会」の役員が芦別に視察に来るというのである。いかに芦

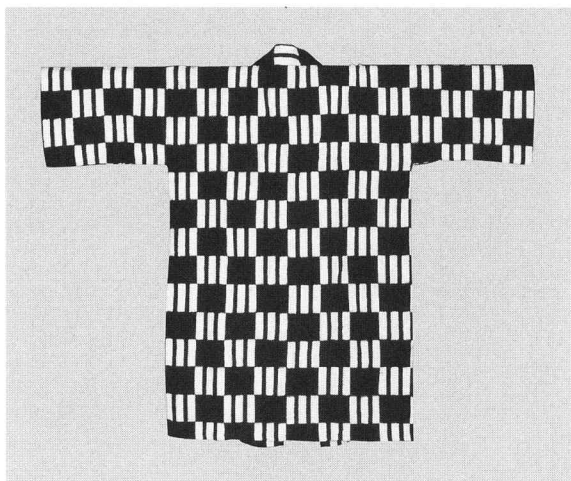
別にとって衝撃であったかをこの『十年史』は伝えている。続けて、

この会議には、相談役である林市長も出席しており、芦別市としても出来る限りのバックアップをするとの言葉をいただいた。(五九頁)

とあり、単なる「芦別振興会」の問題ではなく、芦別市としても対処するということになっている。博多から芦別へは、春口氏・亀田氏の他、下新から数名が訪れてはいたが、「博多振興会」の正式訪問ということになると、それまでとはわけが違ってくる。

芦別では、「博多振興会」役員来訪前に急いで処理しておかなければならない問題がいくつかあった。まずは、当番法被である。芦別山笠では平成二年から当番法被を着用している。製作当初のものは、独自の模様を意図したものの、手違いから、模様が下新と全く同じものになっていた。⁽⁶⁵⁾平成四年にやっと芦別独自の法被となったものの、数が依然として不足していた。

当時榮流ではまだ多くの人が下新の当番法被を着ていました。振興会では、近い将来その当番法被は着ない



博多下新川端町の当番法被

ようにしなければ
ならないとの論議
をしていた矢先
……

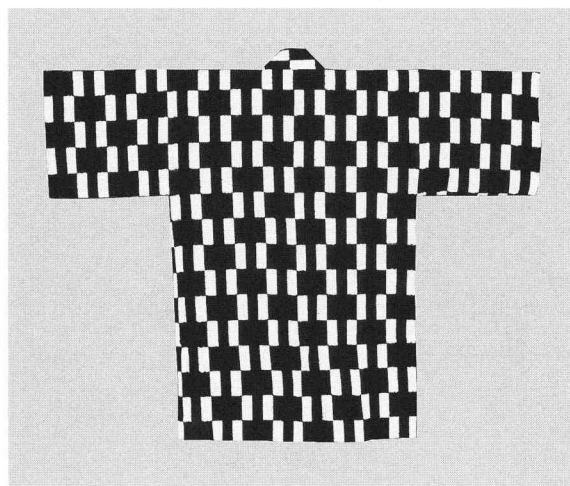
の「博多振興会」の来
訪だった。そこで、

栄流が法被の緋模
様の白地の部分を
黄色に染めたので
す。黄色であれば
下新とデザインが
違うというわけです。

この行為は、「芦別振興会」が決定したことではなく、栄流が独自の判断で行ったことであった。博多と同じになることを目指してきた芦別にとっては、下新の当番法被を身につけることは理想であり、晴れがましいことであった。しかし、本家「博多振興会」の前では、それは憚られることに変貌するのである。このことは、伝播にまつわる文化受容自体が「階層性」を内包していることを意味している。

それから「餅まき」である。芦別では追い山終了後に、現在でも各昇き山の上から観衆に紅白の持ちを撒く行事を行っているが、これは博多山笠に見られない要素である。先ほどの当番法被の問題とは、全く逆の論理になるが、

芦別独特の行事に追い山の後の「餅まき」がある。最初は「お客さ



芦別最初の当番法被

んが寂しかろう」という
ことで平成元年に始めた
ものである。博多との交
流が進むようになって、
「博多には無いことだか
ら」止めようということ
になった。

博多に近づくことと、この
餅まきとは相容れない。ど
ちらかというと「芦別らし
さ」が現れたものであるが、この
役員来訪に際して、廃止が検
討されることとなる。このよう

な葛藤の様相は、何も芦別に限ることではなく、ある文化を受容する場
合に必ず現れてくることである。当時の様子を平成八年七月四日付「北
海道新聞空知版」は次のように伝えている。

……別健夏山笠振興会の青井慎介会長らをさらに感激させているの
が、本家の博多祇園山笠振興会の来訪だ。石橋清助会長をはじめ役
員七人が十九日から三日間、初めて芦別入りする。

「北の山笠」として全国でただ一ヶ所認知されているとはいえ、
関係者は緊張気味だ。博多の中村全事務局長は「いわば本家と分家
の間柄だが、歴史が違っているので同じものとは思っていない。親睦を深
めるのが狙い」と話し、青井会長は「ありのままを見てもらい、意
見をもらえればありがたい」と語る。



餅まき 平成11年

「博多振興会」事務局長の話は、「本家と分家」という同族的系譜は認めているものの、「同じものとは思っていない」とする発言のなかに、芦別山笠が博多に完全に認められているわけではないことが読みとれる。これに反応するように同新聞の別の記事として、「芦別振興会」会長の青井氏の話が次のように掲載されている。

……「七百五十年の伝統を持つ博多と、十三年目の芦別では残念ながら格式、規模は違う。ありのままを見てもらう」という青井会長だが、本家を迎える感激と緊張が次第に高まっている。

歴史の厚みによる格式の差。これが、芦別が博多を本家と崇め、従属する理由であった。「階層意識」の根本には、伝統というものが横たわっていることになる。それに呼応するかのように平成八年七月十日付「北海道新聞空知版」には、

……今年は、博多から祇園山笠振興会の会長らが初めて芦別入りする予定で、関係者は「本家の眼鏡にかなうかどうか」と緊張きみだ

……という記事が出ている。「眼鏡にかなう」という言説、つまり「博多振興会」が芦別山笠をどのように評価するかという部分に、当番法被の染め直しや餅まきの廃止論議などが収斂するのである。

それでは、何故に「博多振興会」は芦別を訪れることにしたか。当時の会長である石橋清助氏は、次のように回顧する。

平成七年井上会長の時代、自分は副会長だった。七月十二日に芦別から青井さんたちが「挨拶」にやってきた。芦別健夏山笠が博多山

笠を真似ていることは、樋口前会長の時代から、町おこしということで、半分公認みたいになっていた。その「挨拶」だったのだが、井上さんがあまり簡単に手を入れてしまった。自分も「あれっ」と思うほどだった。手を入れた以上は「よかたい」(しかたがない)ということになって、正式認知みたいになっていた。

平成八年に、こんなに簡単に芦別を認めていいものか、ということになった。第一見てもいないものを。これではいかんということになり。まずは見てみようということになった。そのときは、自分が会長になっていた。それで五人の役員といっしょに芦別に行った。

「芦別振興会」が「歴史的手一本」とよぶ「博多振興会」の芦別認知は、この話から実は完全なものではなかったことが判る。既に述べたように、あまりに簡単に承認となったことについては、芦別側でも同様に疑義に思っていたことと一致している。それはマスコミが果たした結節の結果であったからである。認知ということに対する責任という意味の視察だったわけであるが、その芦別の対応ぶりに「博多振興会」は驚くことになる。

空港に着いてみると驚いた。芦別の人たちが当番法被の正装で迎えてくれたからだ。芦別市長も来ており、我々の滞在中、ずっと付き添ったのにも驚いた。

千歳空港に迎えに向いた「芦別振興会」一行の姿が、当番法被だったことに驚くとともに、市長の迎えにも驚くのである。つまりは、博多と同じ当番法被礼装。芦別市をあげての迎えに対する印象である。「芦別振興会」役員たちは空港で「博多振興会」を待つ間、いろんな人たちのまなざしに晒されていた。

博多山笠振興会の役員を千歳空港に迎えに行ったとき、当番法被を着て行った。そのとき、北海道の人々からはアイヌの祭りとお勘違いされたが、九州の人からは懐かしがられた。

というのである。この感覚は、地域的特性と文化的認識をもとにした経験知による差を表していることになる。同じものでも九州人には博多山笠の衣装、北海道人にはアイヌの民族衣装と認識されたのである。この話は北海道においては、山笠がいかに異質なものであるかを証明していることでもある。しかし、それは一般人のみが該当するものではなく、山笠に関わる芦別の人びとにとってもある意味同様であった。次の話はそれを証明している。

最初に作った当番法被のデザインがアイヌの文様のように見えて、関係者の間でも、「蝦夷流」とよばれたこともある。

ともあれ、この法被を粋と感じる心性は、祭りを支える観衆にはまだ希薄であったことの証明でもある。芦別山笠が祭礼として発展していくためには、「見るもの」の意識のなかに、これを「粋」に感じる感性を育てることが必要であることを認識したのである。

「博多振興会」視察の模様を『十年史』は、

七月十九日……視察に訪れたのは、石橋清助会長、後藤久義副会長、波多江五郎副会長、中村全事務局長、梶栗誠一郎本部役員（会計）、瀧田喜代三本部役員（広報宣伝）の六名であった。……ＪＲ芦別駅横で飾り山笠と昇き山笠を見学した後、スターライトホテルで芦別市主催のレセプションとなった。振興会からは、各流の委員以上が出席した。皆当番法被姿である。はるか雲の上の存在と思っていた博

多祇園山笠振興会役員と話が出来たことで、感激のあまり泣き出す者までいた。（六〇頁）

と伝えている。これほど博多山笠は芦別にとって憧憬の対象として当初から存在してきたのであるが、それにしても一度も会ったことがない「博多振興会」役員を、何故に認識できたのであろうか。次の話が参考になる。

芦別の人にとって、テレビなどに登場する博多山笠の人びとのうち、取締は「厳しい人」、町総代は「雲の上の人」、振興会役員は「神様のような人」というイメージで捉えられている。知っている人が画面に出たりすると、身近に感じる。

実は、ここにも「電承」が働いていたのである。テレビで放送される博多山笠関係の番組には、必ず「博多振興会」の役員が登場する。この事例から画面上に現れる姿を通して、芦別で心象が構築されており、しかも「階層化」までがなされていたことが読みとれる。博多山笠の情報を要用としていた芦別は、始まりの頃からテレビとは縁が深い。次の話は芦別がテレビを使って、自らの情報を伝達するメディアとして活用している事例である。

テレビ中継などの機会が多いことを知っている博多派遣組には、テレビカメラが来ているときに、芦別にいる仲間には自分の存在を伝えようとする振る舞いをする人が多い。追いつ山るときを絶好の機会と捉え、清道（筆者注…櫛田神社の境内）のなかをわざと横切ってみたり、突然走ってみたり、うろろうしたりして、自分の存在をアピールする。芦別では、みな必ず博多の追いつ山の生中継をＢＳで見たい

るので、それと分かれるという。

ともかくも、テレビの映像でしか見たことのない「博多振興会」役員が、眼前に存在するということ。それは芦別にとって、博多との交流が現実のものとして確信された瞬間でもあった。

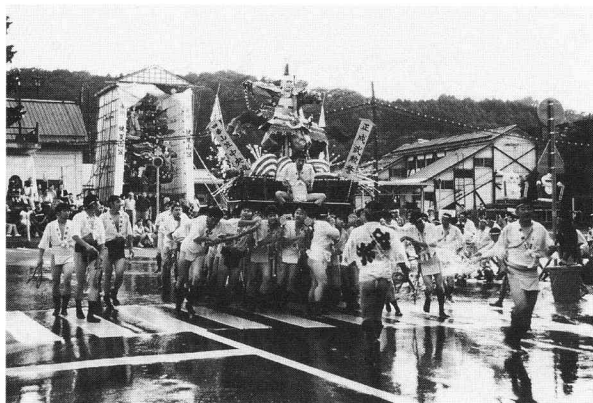
さて、実際に芦別山笠は「博多振興会」の役員にはどのように映ったのだろうか。『十年史』には次のようにある。

七月十九日、本部席で追い山を見ていただいた。博多の十分の一以下の人数で二・一キロメートルの距離を昇く姿に、博多の役員の皆さんから賞賛の声が上がった。(六〇頁)

「博多振興会」会長の石橋氏は、

芦別の山笠をとにかく見てみようというのが目的だったが、意外だった。小さな町なのに、もう五本の山があった。平成七年に始めたらしいが、さらに飾り山まで立っていた。

そのときの印象をこう語った。氏は芦別訪問の翌年のことになるが、博多において「北海道の山笠」と題した文章をしたためる。それは、博多



芦別の追い山 後ろに飾り山が見える 平成11年

山笠の時期にあわせて無料配布されるチラシ『博多山笠のしおり』に掲載された。芦別で「博多振興会」役員が受けた印象はこの記事のなかに凝縮されている。

……毎年七月の第三土曜日、または、第四土曜日(博多の追山《七月十五日》が終わった直後の土曜日)の夕方六時から、追山形式で実施している。山止め(スタート)は、JR芦別駅前の大通り。そして街中を一周(約二、一〇〇メートル)して、また、駅前に戻ってくる。昇き手は、多い流で一五〇人位、少ない流では七〇人位で、全コースを十七・八分から二十四・五分位で走り抜く。我々博多のものの感じとしては、この少ない人数でよく頑張っていると感心する。廻り止め(ゴール)へ帰ってきた昇き手達は、殆ど全コース休みなく担いで精も根も尽き果てたという顔をしている。

この熱意が人口の少ない芦別で、十数年にもわたって、山笠行事をつづけてくることが出来た原動力であろう。服装にしても、締め込み・水ハッピー・脚絆・地下足袋・かき縄と姿形も博多と寸分変わらない。また、当番ハッピー・ステテコ・草履という山笠の正式の服装も、キッチリ揃えてある。

よくぞここまで完璧を期してやって来たものだと感じたし、さらに敬意を表したい。……(石橋清助記)

「博多と寸分変わらない」という部分に、「博多振興会」役員たちの驚きが現れている。「歴史が違う」としてまだ芦別山笠を認めていないと思われた「博多振興会」事務局長についても、追い山を見てのその気持ちに動きがあることが読みとれたという。臨席していたS氏は次のように話す。

平成八年に博多祇園山笠振興会の役員が芦別にみえたとき、中村事務局長だけは、当地の山笠を認めたくないようでした。しかし、追い山を見た後は、その気持ちが変わったのがわかりました。

芦別山笠の規模、それから博多山笠との類似性などに、「博多振興会」役員は驚きを隠せなかったというのが事実であろう。短い期間にここまで博多山笠を模倣し、実現させたということに対する答えが「賞賛の声」に現れたと見るのが妥当である。中村事務局長についても、氏から直接の言葉はなかったものの、真摯に対応するなかから、気持ちの変化を察知できたものと思われる。

この状況の最中「博多振興会」役員たちは、「芦別と博多は気性が似ているね」という発言をする。彼らは、芦別における博多山笠の受容の要因を、「気性」などの心性に類似を見出したことになる。これに続いて、

石橋会長が追い山を見終わったときに自分のカバンから博多山笠で使う「会長の招き旗」を取り出して、青井会長に渡した。その旗は、カバンに入るように下部が切り取られていた。これを見た後藤副会長は、

知らない
かった
らしく、
石橋さん
独自の
アイ
デアで
あった
らしい。



芦別に贈られた「博多振興会」
会長の招き旗 平成11年

その後、副会長の招き旗も送られてきた。

この旗は博多では役員たちのステータスであり、やってくる山笠を招くように使うものである。芦別では、この行為を「芦別山笠を博多が認めてくれた証」と理解した。これまでの博多山笠受容の営為を博多に認められたいと切望してきた「芦別振興会」にとって、それを実感できる瞬間となった。

かくして、平成八年七月二十一日付「北海道新聞空知版」には「本家博多も『見事』勇壮な『追い山笠』という見出しの記事が載ることとなる。

博多祇園山笠の流れをくむ芦別の夏祭り「健夏山笠（けんかやまがさ）」は二十日、祭りの華の「追い山笠」を行い、閉幕した。今年は七百五十年の伝統を誇る本家の福岡・博多から祇園山笠振興会の石橋清助会長らが初めて見学に訪れ、「北の山笠」に及第点をつけた。……石橋会長は「博多に比べ参加者が少ないのはやむを得ないが、最後まで勢いがあり、見事だった」と話し「山笠はいくら早く走っても賞状一つ出ないアマチュア精神の権化のような祭り。大事に育ててもらいたい」と「北の山笠」を激励した。

芦別山笠は「博多振興会」のお眼鏡にかなった。そして「及第点」を貰うこととなった。ここにおいて、「芦別振興会」は博多の正式「公認」を得たという実感を初めて味合うことになるのである。

「権威」の言葉

「博多振興会」役員は来訪時、芦別山笠についてさまざまな指摘を行っている。たとえば、当番法被である。栄流が黄色く染めた法被を見た「博多振興会」会長の石橋氏は「博多では、黄色はキナイといい、着ない」

と述べる。キナイとは博多方言で黄色のことを表す。博多では現実には、山笠飾りなどには黄色をできるだけ避け、使わないようにしている。これは、芦別にとって未知の博多の心性にかかわる禁忌であった。正統な伝統を重んじるあまり、本家博多に遠慮する意味からした行為が禁忌に触れることを知った芦別の榮流は、その後、慌てて黄色く染めた部分を落とそうとするのだが、地色の藍色も黄色と一緒に落ちてしまう結果となった。また次のような指摘もあった。それは、外見からでは分からない範疇に入ることである。N氏の話である。

博多山笠振興会の役員が芦別の山笠を見たとき、「締め込みはそんなに強く締めないでもゆるまない、それでは、座れないだろう」と指摘を受けた。それまで、芦別では、締め込みはしっかりと強くしめて、しゃがむことすらできないようにしていた。それからは、少し緩く締めるようになった。

若手が立ちっぱなしで世話することを伝えるテレビの情報や実際の博多体験から、締め込みはきつく締めるものという認識があったと推測される。しかし、実際にはそれが誤りであることを指摘されている。「博多ではこうあるもの」という固定化した心象から抜け出すには、このような「権威」の言葉が必要であったことを示している。

また、このとき初めて「博多振興会」役員といっしょに「博多祝い唄」といわれる「祝い目出た」を唱和する経験をする。そこで、芦別はいままで気づかなかった本場博多とのテンポの違いを知る。「博多振興会」役員視察後の八月五日に開催された反省会で、「追い山」実施に関して次のようなことが議題になっている。

駅前でのセレモニーの際の『祝い目出た』のテンポが遅いので、各

流のテンポを徹底する。また、来年度からはマイクを使う。練習のため、忘年会・新年会等の祝いの席では必ず『祝い目出た』を歌うこととする。⁽⁶⁶⁾

推測だが、役員の唄の調子の方が芦別よりも早かったのであろう。異例であるが、テンポを早めることが反省会の席で確認されている。しかも、日常の宴会でも必ず歌うようにするというのである。この事情についてN氏は次のように語る。

「博多振興会」の役員が芦別に来たとき、「祝い目出た」のテンポについて役員から指摘があった。人によってテンポは違うが、祝い目出た自体、本来一部の人から発声するもので、全体となるとなかなかうまくテンポが合わない。この指摘を受けて、ことあるごとに「祝い目出た」を練習することになった。

この取り決めは、芦別の博多受容を日常化することにつながる。博多においては「祝い目出た」は、いろんな宴席の終焉に歌われる。それは多くの場合、締めとすることで手一本を伴う。いわば、民俗的要素なのである。博多山笠を模倣する芦別は、「博多振興会」役員の言葉によって、日常の「繰り返し」のなかで、知らず知らずのうちに博多の民俗文化を身につけてゆくことになったのである。

さらに、山笠にかかわる言葉も整理する。平成九年六月二十四日の「芦別健夏山笠振興会総代会兼取締（赤手拭筆頭）寄り会議」で「山笠の呼称を『やまかさ』に、山笠の数え方を『一本、二本』に統一する」ということが申し合わされている。これまで、芦別では「やまがさ」と濁って発音される場合が多々あったが、それを清音に変えるというのである。博多が「やまかさ」と濁らないのに対し、博多周辺では、「やまがさ」と

濁って発音することが多い。しかし、博多との交流が進むにつれて周辺地域でも、濁らないように発音するように変わっていく傾向がある。その代表例を福岡県飯塚市の山笠に看することができ。

また、「本」に変えるということはどういうことか。これも、博多での山笠の数え方が「本」を用いるからである。それまで芦別は山笠の数え方も定まらず「基」や「台」などを使うことも多かった。これは、先に述べた「祝い目出た」の日常化と軌を一にするものであることは間違いない。言葉という民俗ともっとも密接に関連した部分から博多受容を進めようというものである。

言葉を同じくするということは、ある意味「仲間に加わる」という機能を持つてくる。言葉を共有することは、同じ生活を基盤としていることでもあるからである。若者言葉や職人言葉などと共通した感覚であろう。芦別が言葉を通した「共同体」を形成し、博多と民俗文化を共有するということである。これとて、博多山笠と同族的系譜上に芦別山笠を位置づける営為にはかならない。

文化的序列化

平成八年の「博多振興会」の視察を機に、「芦別振興会」では役員組織等の改革が行われている。提案理由には、

現在の振興会役員組織については平成元年九月八日の振興会設立時に定められたものであるが、その後、事務局の設置、流主体の運営体制への移行等さまざまな情勢変化があり実情に合わない部分が出てきている。ついては、次のとおり振興会役員組織等を改革することとして総会に会則変更案を提出するものとする。⁶⁷⁾

提案のなかに、流総代を「総務 博多祇園山笠振興会と同一の名称に

する。」という項目がある。それまで、流当番制の実施に伴って、流の代表者を「流総代」という名称でよんできた。平成八年九月一九日の総代会では、その名称を「総務」に変更しようという案が上程されている。博多では、流の代表者のことを「総務」とよんでいる。この提案は、役員名称までも「博多振興会」と同一にしようという動きにほかならない。「博多振興会」の視察後の「公認」という過程がなければ上程されることはなかったであろう。

しかし、この案は翌年の二月一五日に行われた臨時総会で、振興会役員の総務・会計を統合した役職として幹事長として改正することができず、「総務」という名称が残ったことにより、見送られている。流委員とよんでいた役職は「委員」と言うようになっていく。このこと自体の動きが急であり、「博多振興会」の来訪と密接な関係にあることを表しているといえよう。

「博多振興会」来訪の影響は手拭制度にも現れた。同日の臨時総会では、次のような会則の変更も行われている。

(手拭制度)

第十四条 役員は、その身分を明らかにするため、振興会が作成するところの赤、白(細)、紺、白(細)、茶、白(細)、緑、白(細)、茶、白(細)、紺、白(細)、赤、白(細)、縦縞で振興会の紋(直径75ミリ)を右上隅に白抜きした手拭を着用することとする。

どこが変更になっているかを確認するため、以前の「平成八年度芦別健夏山笠振興会定期総会会議録」議案第5号 平成八年五月十七日のものを次に掲載する。

(手拭制度)

第十四条 振興会役員は、その身分を明らかにするため、振興会が作成するところの紺、白、赤の博多絞りで振興会の紋（直径一〇〇ミリ）を中央の白部分に濃紺で染めた手拭を着用することとする。

3、流の役員は、その身分を明らかにするため、振興会が作成するところの次の各号に掲げる手拭を着用することとする。

（1）流総代は、赤、白（細）、紺、白（細）、茶、白（細）、緑、白（細）、茶、白（細）、紺、白（細）、赤の縦縞で振興会の紋（直径75ミリ）を右上隅に白抜きした手拭とする。

役員手拭の仕様が変更になっていることが解る。役員手拭が、それまでの流総代手拭と同じ柄になっているのである。これは、博多では「山笠委員」とよばれる各流の委員が身につけるもので、いわば流の手拭にあたる。それまでであった「博多絞り」の振興会役員の手拭自体が、会則から消えていることが解る。

「博多絞り」とは、「博多振興会」の役員だけが身につけることができる手拭に使われているもので、博多の伝統染色技術で製作されるものである。芦別山笠が博多に非公式ではあるが、認められる「お目こぼし」に至る発端となった手拭である。⁽⁶⁸⁾ 芦別が心から切望し、実現してきた手拭がこの時点で消えるのには、以下の話が理由になっている。



「芦別振興会」役員手拭を身につけた昇き手
平成11年

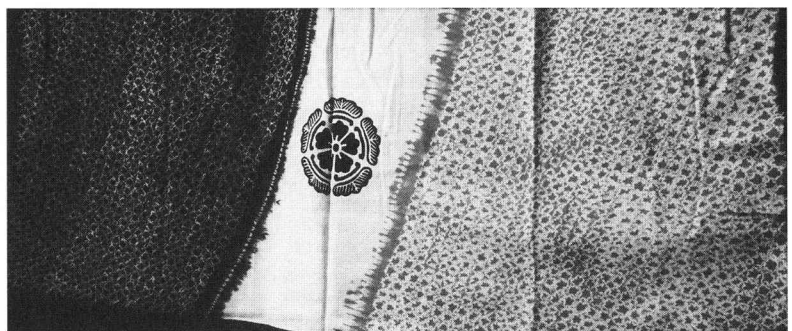
現在、役員手拭の博多絞りをやめています。これは「博多振興会」の後藤副会長から手拭（の真似）だけは、勘弁して欲しいと言われたからです。

つまり、「博多振興会」の来訪時、役員の指摘によって改正されたことが裏づけられる。芦別の山笠に「及第点」を与え、博多山笠の模倣を公認した「博多振興会」にとっても、譲れないことがあったわけである。

それが、この博多絞りの手拭だったのである。博多においても、手拭制度は祭祀組織維持と深い関係にある。

手拭によって、山笠に参加する何千という人間を序列化し、組織的行動を実施するための表示として用いているのである。その手拭制度自体を芦別が採り入れたのは、芦別の博多化推進には、しごく自然なことであった。手拭は、山笠の権威の象徴であったからである。なかでも、「博多絞り」の役員手拭はその頂点にあるものとして、ぜひ必要なものだったのである。

しかし、「博多振興会」役員は、「芦別振興会」の役員たちが身につけていた「博多絞り」の複製手拭を見て、それを認めなかったわけである。この言説からすると、「博多絞り」の手拭だけは博多山笠の主体性が凝縮されたものであり、決して他所にあってはならないものという認識であることが理解できる。



「芦別振興会」博多絞り役員手拭い



博多絞りの手拭を身につけた
博多大黒流役員 昭和63年

この指摘によって「芦別振興会」は、「博多絞り」の製造手法を変えて模造するのではなく、その柄の役員手拭そのものを会則から削除することを選んだ。また、それまで「芦別振興会」役員の下に位置した流総代の図柄を役員の手拭として格上げすることに決定している。ここに、芦別山笠は博多を頂点とする序列の中に組み込まれたことになる。つまり「博多振興会」の次席として「芦別振興会」がくるという階層化であり、芦別山笠を博多山笠の流の一つとして位置づけることでもあった。新聞紙上で表現された「兄弟山笠」・「本家と分家」などの階層的表現がこの手拭制度改革と符合してくるのである。

「お墨付き」という言説

「博多振興会」役員の視察以降、博多による芦別山笠の「公認」ということを堂々と公言できるようになった。視察直後に出た平成八年八月一日付『共済だより』に「本場博多に次ぐ勇壮な祇園山笠」という見出しで掲載された「芦別振興会」役員のN氏の言葉がそれを如実に表している。

最初は見よう見まねでそっくり真似をした。博多の人形師に飾り人

形製作を依頼するため正式に福岡市から「認知を受けましてね。これは日本では芦別市だけです。ここまで本格的にやっているなら認めざるを得ない、ということだったようで、これからは決してどこにも認知は与えないそうです」と誇らしげにNさんは言う。

まだ、「認知」という言葉を使っているものの、博多の公認が芦別だけの唯一無二の特別なことであるとしている部分に、この視察の影響が現れていると考えていい。

実は、芦別が堂々と博多との関係を公言できるようになったのには、この視察時にもう一つの出来事があったからである。その翌年の博多山笠において、芦別市長と「芦別振興会」会長が集団山見せのときの「台上がり」に招待されたのである。「台上がり」というのは、山笠に乗って昇き手を差配することであり、博多においても、誰でもできることではないこととされている。芦別にとっては、この誘いはこの上もない名誉であり、博多が自分たちの山笠を認めてくれたことの何よりの証として認識された。石橋清助氏は、

芦別市長や芦別健夏山笠振興会役員が付きっきりで我々の世話をしてくれたことへの御礼の意味で「台上がり」に招待した。

とそのことを回顧している。

芦別の喜びは尋常ではなかった。それは平成九年五月八日の総代会の議事録に付された書簡の原案から読みとることができる。青井会長から石橋会長に宛てられたものである。その一部を引用すると、

……さて、昨年七月、皆様には、ご多忙のところ芦別まで起こしの上、ご指導頂き、あらためまして、厚く御礼を申し上げる次第でこ

ございますが、その際に、林政志・芦別市長と私に対しまして有難くも本年の御山笠へのお誘いいただきましたことは、至高の喜びであり、お言葉に甘え、林市長はじめ、計六名で、七月十二日から十五日の日程にて、訪問させていただきたいと存じ、謹んでご連絡を申し上げます。

私どもものにとりまして、このお誘いは、身に余る光栄であり、意気込みだけは、どなたにも負けないほど十分であり、決して皆様にはご迷惑はおかけしない心構えではありますが、いかんせん、未熟の輩であります。お手数ながら、宜しくご指導もいただけますように、併せて、心からお願いを申し上げます。

とあり、招待が芦別来訪のときであったことを述べている。「身にあまる光栄」、「未熟の輩」という部分に芦別の喜びと畏れが表れている。平成九年五月二十五日付「北海道新聞空知版」には、「博多との交流さらに市長が本家祇園訪問へ」という見出しで、

……林政志市長と健夏山笠振興会（青井慎介会長）一行が博多を訪問する。昨年、博多から石橋清助祇園山笠振興会会長らが視察に訪れ、「北の山笠」にお墨付きを与えたが、今年は逆に芦別の一行を招待した。

祇園山笠が最高潮となる七月十二―十五日に訪問し、桑原敬一福岡市長への表敬訪問や山笠への参加も予定している。青井会長は「最高の名誉とされる山笠への台上がりも認めてくれており、交流を一層深めていきたい」と話している。

ここに、「お墨付き」という言葉が初めて登場する。この招待によって芦別は完全に博多に認められ、その山笠行事のありかた全般に認可を

受けたという認識に至るのである。平成九年七月五日付「北海道新聞空知版」には、

……こうした熱意が本家に認められ、昨夏、芦別入りした石橋清助博多祇園山笠振興会長は「最後まで勢いがあり、見事だった」と評価、七百五十年の歴史で初めて「分家」を公認し、青井会長らを感じさせた。

とあり、つまり博多山笠が長い歴史と伝統のなかで初めて公認し、芦別が博多山笠の分家であるという同族的系譜のなかに位置付けられたという認識に至るのである。芦別にとって博多と同じ系譜に入ることが博多山笠受容の最大の目標だったといっても過言ではないからである。

ここまで、「博多振興会」に芦別山笠が「認知」され「お墨付き」をもらうまでの言説について新聞を中心に示してきた。この芦別山笠と博多山笠との関係性言説の変化は、どのようにして起こったのであろうか。「芦別振興会」のS氏は、次のようにその事情を語る。

博多との関係を新聞から取材を受けるときに、振興会がその「言葉」を提示したのです。その選択にあたっては、博多に対して失礼がないように、「言葉」を慎重に選びました。たとえば「認知」というのは、博多がはじめて知ったというニュアンスであるというような具合です……。

これはマスコミの一方的な認識によるものではなかったのである。実は「芦別振興会」が博多との交流で醸成された距離感、そして権威者としての「博多振興会」との関係性を熟慮して作り出した言葉だったのである。すなわち、この言葉には芦別が自認する博多受容の度合いが反映

されているということである。ある意味「芦別振興会」はマスコミを博多との関係を表明するメディアとして活用していたことになる。つまり「言葉」を選び報道に載せることで、博多との関係の達成度を見極めようとしていたといえよう。

「台上がり」招待の件に話をもどそう。これは、福岡でも大きく新聞各社が報じた。平成九年七月五日付「西日本新聞」には、「交流乗せ山かける『博多』手本にまちおこし」という見出しで次のように述べている。

博多祇園山笠振興会（石橋清助会長）は五日、「集団山見せ」（十三日）で台上がりを務める顔触れを発表したが、博多祇園山笠をまちおこしに取り入れた北海道芦別市の「芦別健夏（けんか）山笠」を代表して林政志市長（五七）が初めて、桑原敬一福岡市長（七四）と並んで一番山笠に台上がりすることになった。博多と芦別の両山笠関係者は「日本列島の北と南の『兄弟山笠』」に交流を一層深めていきたい」と、張り切っている。

芦別健夏山笠は、博多山笠のテレビドキュメンタリー番組に感動した芦別市の有志が「まちおこしに、博多山笠をやろう」と思い立ち、一九八四年から始めた夏祭り。男たちは締め込みに水法被姿で、博多山笠とそっくりの昇（か）き山五流れで「追い山」を行い、博多の「祝いめでた」と「手一本」で祭りを締めくくる。八九年からは「本場の山笠に学ぼう」と、博多山笠・大黒流（ながれ）の下新川端町に毎年十数人が参加。祭りのしきたりを学んで、山笠の腕を磨いている。

昨年七月、博多祇園山笠振興会の石橋会長らが初めて芦別市を訪れて、健夏山笠を見物したが「よくぞここまで、やんしゃった」と、博多っ子のいきな計らいで、芦別市長の台上がりを実現させた。

これまでの芦別山笠の歴史や博多山笠との交流が報じられたのである。そして「兄弟山笠」という同族的言説が、博多の地でも公言されたことになる。

民俗の受容と拒絶

しかし、この芦別の喜びに影には、悲しみがあった。この年、台上がりの招待を受けた青井会長が急逝したのである。博多山笠が始まる七月一日のことである。その計報は平成九年七月五日付「北海道新聞空知版」で「法被姿の五〇人、棺担ぐ 一五日に追善山笠」という見出しで報じられた。

山のぼせが逝った。芦別健夏山笠（やまがさ）振興会の青井慎介会長が一日死去、五六歳。十四年前、ふと見たテレビで博多祇園山笠の勇壮さに感動、仲間と語らい、見よう見まねで育て上げた。熱意は本家に通じ、本年ついに「北の山笠」を公認された。熱狂的な山笠人を博多っ子は、山のぼせという。三、四両日の葬儀は、山のぼせにふさわしく。山笠の法被を着た会員が棺を担ぎ、涙を誘った。……葬儀には、五百人余りの振興会員を代表し約五十人が法被姿で駆けつけた。祭壇に飾り山の写真が置かれ、棺には愛用の法被。……また、同振興会は十五日の祝儀山を中止し同日、青井会長の死をいたむ追善の山笠が市内を走る。

博多では、山笠関係者の葬儀には当番法被が着用される。いままで芦別では、その経験はなかったはずであるが、この記事では会葬者は当番法被を着用して葬儀に臨んでいることがわかる。祭りの法被を葬儀に着用することなど、芦別の日常においてはあり得ないことであり、博多の心性を理解しないことには、とても実行できないことであつたろうと想

像される。

葬儀に関連して、博多山笠では、山笠に貢献のあった物故者のところに昇き山を廻して追善供養する行事が行われる。それを一般には「追善山」とよんでいる。芦別ではそれまで実施されたことはなかったが、平成四年の博多派遣組が、その感覚を芦別に伝えていた。派遣時、芦別山笠を「お目こぼし」してくれた「博多振興会」樋口前会長の追善山が行われたからである。⁽⁶⁹⁾しかし体験者のT氏は、博多山笠を芦別に実現するために当初から関わってきた人であるにもかかわらず、この経験がいかに芦別の日常からすると戸惑わずにいられなかったかを、次のように語っている。

追善山を体験して、死んだ人のところに行って「祝い目出た」を歌うのは、よくわからなかった。

いわゆる伝統的な祭礼では、「黒不浄」と称して死の忌みを避ける。これからすると、博多山笠において行われる追善山という行事は異例なものといえよう。物故者の追善供養をきらびやかな祭礼の作り物である山笠で行うということのほか、T氏が異質に感じた部分はどこにあるのだろうか。それはすなわち芦別の違和感と共通する部分となろう。博多でこの行事がどのように行われているかを示すため、大黒流川端町での事例を述べる。

軒先に三段の祭壇が準備され、最上段には当番法被を着た故人の遺影、当番法被、取締手拭、生花が飾られ、中段には位牌が安置される。一段目には、焼香香炉、燭台、供物などが飾られる。供物は川端町の若手が供えた酒二升。これには赤熨斗が掛けられている。祭壇に向かって右手には薦樽、そして子どもたちに配るお菓子。左

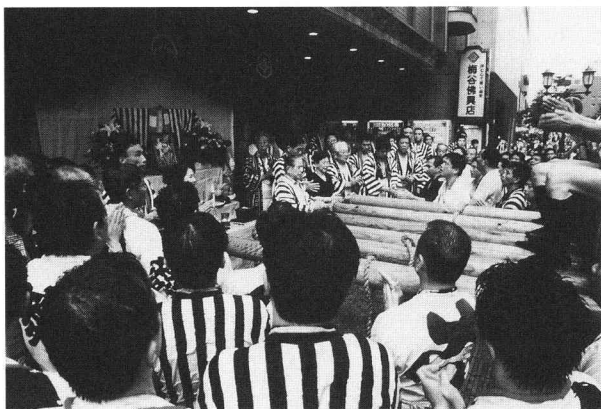
手には麦酒サーバーが準備される。麦酒は黒麦酒である。山笠が来る前に僧侶による礼拝が行われた。

山笠は「表」を祭壇のぎりぎりまで寄せて、ゆっくりと着地する。普段より静かに行われる。昇き手が手拭をとると、すぐに、台上がりの音頭で「祝い目出た」が唱和される。そして手一本が入る。その間、遺族は黒の略礼服を着て対峙する。続いて、役員と主立ったものが焼香する。川端町の若手が「どうぞ、どうぞ」と麦酒・酒を勧める。同時に、昆布・鰯・蒲鉾のナマクサケも進める。子どもにはお菓子が振る舞われる。

しばらくすると、昇き手が手拭を締め直して山につく。祭壇の前からゆっくりと下がり方向を変える。この間静かだ。祭壇正面をはずしてしばらく静かに進み、そこで「ヤー」の声があがり、オイサのかけ声で山小屋に帰る。⁽⁷⁰⁾

僧侶、喪服、位牌、遺影、焼香と当番法被、祝い目出た、赤熨斗。不祝儀と祝儀の要素が不思議なくらいに混淆したかたちである。慰霊ではあるが、この行事には機能的に、忌み明けの儀礼までが組み込まれている。焼香の後、ナマクサケと酒がそれを担うのである。芦別から参加したT氏が戸惑うのも当然である。

芦別は、この行事自体を行う受け皿として取り決めだけ



追善山で「祝い目出た」を歌う博多大黒流 平成13年

は既に整備していた。平成六年五月二十日の定期総会で審議された「芦別健夏山笠運営規定」第十二条には、「追善山」という項目が追加され、「振興会で行う追善山笠の対象者は、振興会役員及びその経験者とする。流で行う追善山笠の対象者は、それぞれの流で定めるものとする。」と規定されている。これを受けて同年六月九日の総代会で「流運営規定」を、

第三条 流で行う追善山笠の対象者は、流総代、流委員取締及びその経験者とする。

2 流で行う合同追善山笠の対象者は、赤手拭筆頭、赤手拭、顧問、若手頭及びその経験者とする。

と対象者を規定している。この規定は、博多に倣ったものである。博多における追善山のありかたは、流によってまちまちである。例えば、恵比須流では追善山とは言わず

に「弔問山」とよんでいるという具合である。すなわち芦別のこれは博多というよりは、大黒流に倣ったというべきであらう。大黒流には追善山の他に「功労山」というものがある。これは役職経験による区別で、追善山は取締経験者以上が対象であり、功労山は赤手拭経験者を中心とするものの、一般の昇き手もその対象となる。追善山では「祝い目出た」の唱和と手一本が入



功労山の準備をする博多大黒流若手 平成13年

るが、功労山では手一本のみである。恵比須流では、この区別はない。芦別で「合同追善山」と称しているのが、博多の功労山にあたることになる。平成六年といえ、芦別山笠が振興会中心制から流当番制に移行した年である。平成九年七月十七日付「北海道新聞空知版」には、

一日急死した芦別健夏山笠振興会の故青井慎介会長Ⅱ五十六歳Ⅱをしのぶ追善の山笠が十五日夕、市街を駆けた。

山笠の本来・博多は、功労者が亡くなると、故人をしのび、山笠の継承を誓う「追善山」を行ってきた。健夏山笠は十四年の歴史で初の「追善山」となった。……午後七時、合図とともに駆け出した山笠は、一番街商店街を経て会長宅へ。祭壇には、愛用した山笠の法被と遺影が飾られ、遺族が出迎えた。

焼香が始まると、にわかに雨が振り、参加者は「追善山の第一号がまさか会長とは。涙雨か・」。最後に全員で手締めをし、「山のぼせ」とまで言われた熱狂的な山笠好きの会長の遺影に祭りの継承と発展を誓った。

とあり、法被や遺影そして焼香・手締め（手一本）があるものの「祝い目出た」の記載がない。それを直前の七月八日に行われた総代会の議事録から確認すると次のようになっている。

1 各流詰所から出発した全流の昇き手が出発点に集合し、故青井慎介会長の追善山として山笠二本を自宅に昇き入れる。

（中略）

7 故青井慎介会長の自宅前では、黙祷、手一本を行うこととし、祝い目出たは歌はない。発声は、黙祷を一番山笠中央流台上がりの吉岡副会長。手一本を三番山笠緑幸流台上がりの齋木副会長

実際の実施にあたっては、やはり「祝い目出た」は歌われず一本のみとなっている。いわば大黒流の功労山の形式で行われたことになる。

青井会長には、大黒流という最高の慰霊方式である追善山の形式を実施することが、先に定めたことからするとふさわしいはずである。何故に歌わなかったか。芦別の心性との葛藤であろう。物故者遺族の前で「祝い目出た」を歌うことに対する違和感が表出したものと推測される。すなわち、追善山の作法が芦別の日常のなかでは、あまりに異質すぎたということである。山笠関係者の中では既知のことでも、この死者の慰霊に関しては、一般の人びとをも巻き込むことであることから、日常感覚との食い違いを意識したものと推測できよう。博多にはない要素として「黙祷」という行事が入っている。この宗派によらない慰霊方法をとることにより、この齟齬を解消しようとしている工夫が見られる。

追善山の実施で、博多山笠という祭礼行事が、博多の人びとの日常生活や心性といかに密接な関係のもとに構成されているかを芦別は再認識することになったのではないか。また、この事実が「芦別振興会」以外の芦別の人びとは、まだ共通認識として博多山笠の細部、つまりしきたりや意識などが共有されていないということを物語っているようにも思える。芦別はこの追善山を実施するに先だって、七月十二日に市長台上がりを務めるべく「博多訪問団」を博多に送っている。平成九年度博多祇園山笠訪問団資料のスケジュールには、「七月十二日、八・〇〇出発（青井宅停車）青井宅（故青井会長お迎え）……一八・〇〇博多祇園山笠振興会歓迎会 会場雅加栄」とある。この「故青井会長お迎え」とは遺影のことである。青井会長の遺影を抱えて博多へ向かったわけである。「博多振興会」が「博多訪問団」の歓迎会を予定していることもこの資料から解る。このときの様子を同行したN氏は次のように語る。

青井さんの死後、その遺影を抱えて博多に行った。博多祇園山笠振

興会は料亭「雅加栄」に歓迎の席を設けてくれた。その会場には、故青井会長の席がちゃんと準備してあった。これには感動した。

山笠の期間中に遺影に対し饗応する「博多振興会」のありかたを目の当たりにしての彼の「感動」は、追善山の芦別での実践にひとつの示唆を与えるものであったことには間違いないだろう。しかし、芦別の追善山の実施で「祝い目出た」を歌うことをやめるといふ決断を下す場面にそのN氏はいたのである。

青井さんの追善山るとき、振興会で話しあって「祝い目出た」はやめようということにした。それは、青井さんの遺族は、遺影を前にして「祝い目出た」を歌うことを理解しても、芦別の人びとはみな理解できるわけではないだろう、という理由からだ。また、山に携わる芦別の昇き手のなかにも、このことを理解できないものがあったからだ。

と彼は語った。芦別の日常にも馴染まない、また山笠という非日常のなかにいても、この儀礼はまだ理解されてなかったということである。博多山笠のすべてを模倣していくなかにおいて、人びとの心意にかかわる部分については、いくら山笠のかつこよさが強調されようとも、すぐには全体のものにならないということをも、この件は語っていることになる。

翌年の六月十二日の臨時総会で、服喪に関連した取り決めが次のようになされる。

（喪に服する期間）

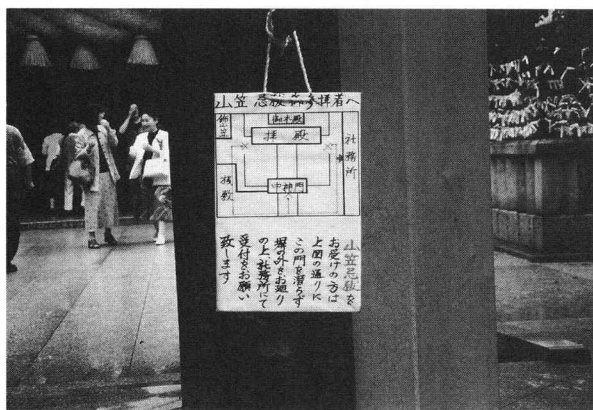
第十四条 振興会役員及び流役員が喪に服するのは、一親等までの

親族が亡くなった場合に限り、その期間は四十九日までとする。ただし、会長が特に認める場合は、この限りではない。

平成十年六月十七日の「市流会報」の解説によれば「第十四条については、振興会役員が長期に喪に服すると、山笠行事の運営に支障が生じるので、その影響を最小限にするために規定されました」とあり、実務的な理由での取り決めということになっている。

ここにいる、四十九日という日数は、伝統的な忌明けに日数とされる。各地の民俗事例では、この期間中は神社に参拝することを遠慮するというのが一般的である。そこには「黒不浄」観念がある。右の説明に即していると、実務上であれば、この日数の間、山笠に参加することを慎む必要はないと思われる。イベントとの一環として始まった芦別山笠を、それこそ伝統的な祭りへと変貌させようという意図が、この取り決めからも見えてくる。イベントであれば、喪に服する期間などはほとんど問題にする必要がないことであり、服喪期間を定めたこと自体が、芦別山笠を「神事」としての「奉納行事」にしていることとする芦別の計画の現れととれる。

博多山笠でも同様の規定がある。しかし、その期間を明けぬうちに山笠に参加したいとするものには違う道がある。櫛田神社で「山



櫛田神社神門に掲げられた「山笠忌祓」の案内
昭和63年

笠忌祓」を受けることである。これによって、喪は明けたとするのである。「会長が特に認める……」という下りは、この本来神社が担ってきたことを翻訳したものとも考えられる。

芦別のこの動きは、「芦別健夏山笠振興会は、平成元年九月八日の設立以来、地域に根ざした『祭』を目指して活動が続けて参りました」という言説に集約できるだろう。祭りを志向することこそ、博多文化の受容を進めることであり、それこそ「ウツス」ということだったのである。

⑥ 「ウツス」ということ

当番町の経験

平成十年は博多下新が大黒流の当番町を務める年だった。当番町とは、大黒流の山笠行事の一切を取り仕切って世話をする町内のことである。大黒流には十二の町がある。

したがって、十二年に一度当番町が巡ってくることになる。当然のごとく、すべての町内を束ねて行事を恙なく遂行するにはそうとうの重責がかかってくる。また、この任を果たすためには多くの人手が必要となる。

下新は現在、かつての街並みは消滅している。再開発ビル「リバレイン」が建設され、平成十一年に開業したためである。現在はスーパージャン



リバレイン前にある下新詰め所 平成13年

ドシティ、アジア美術館などが入っているビルの最上階にかつてその場所存在した町内がある。川端町が八世帯、下新、麴屋町、寿通がそれぞれ一世帯。多くの住民が、リバレーンが誕生したときに町外へ移っている。下新が当番町を務めたのは、この再開発ビルの建設が進むさなからだった。平成十年五月十五日の芦別山笠定期総会で、

お世話になって下新川端町が今年当番町となる。については、各流から力になれる人を派遣して欲しい。また、当番法被が不足しているということなので、下新川端町の当番法被を持っている方は貸して上げて欲しい。

との報告がなされ、居住者が離散した下新は、芦別へ加勢を依頼していることが解る。当番法被については、芦別に残っていたものをすぐに送ることとなった。問題は、これは通常の博多派遣とは状況が違っているということであった。

平成十年に博多に行った。その年は、下新が十二年ぶりに大黒流の当番町を勤めることとなり、平成九年に博多から「山を分かっている人」を派遣して欲しいという要求に答えたものだった。この年の派遣は、博多を学ぶためではなく、下新のお手伝いという位置づけになった。

「山を分かっている人」とは当番町運営の実践力を持った人を指している。翻って考えると、下新はある意味、芦別の実力を認めていたことにもなる。この申し出にそって「芦別振興会」は、通常の赤手拭クラスの派遣に加えて取締クラス以上の役員も含めた十名を下新に派遣することになった。

当番町での仕事は、それまで博多派遣とは比較にならないほどの密度を持ったものだった。この派遣では、七月九日のお汐井とりから十五日追い山まで、山笠行事のすべてに参加している。これもそれまでにないことであった。通常では、予算の関係から全日程ということはあり得ず、七月九日のお汐井取りから参加した場合は十一日の朝山まで、十三日の集団山見せからの場合は十五日の追い山まで、と二泊三日の日程と定めていた。一週間の長丁場となったこの派遣は、芦別が新しい博多山笠を発見することに繋がった。

なかでも収穫が多かったのが博多山笠の当番町運営のありかたを知り得たことだった。当番町は、常に山笠という作り物からは一歩引いた部分でかわっていくことになるからだ。昇き山が支障なく巡行できるような気配りすることが当番町の責務である。だから、流昇きなどの通常の山昇きでも、当番町の若手は昇き山に付くことはない。取締は山笠の前を常に走り指示を出し、運行についての全責任を負う。赤手拭は山笠の運行路を確保し、勢い水の準備などの指示を若手に対して行う。地道ではあるが、これがなければ山笠は動かないのである。

この当番町の人びとの動きは、山笠を凝視している限り周りからは見えない。運行を中心に述べたが、他にも行事の始まりを各町に案内することや、取り決めに伝えることなど、当番町の仕事は多岐に渡っている。昇き山は当番町の詰め所横にある山小屋に収められるが、昇き出し前には、山笠の脚を水で濡らし台を締めて、山昇きが終わった後には丁寧に補修も行う。台脚につける銅鉄などは、期間中に何度か取り替える。また、人形飾りを囲んでいる「杉壁」のうち、色あせた枝を取り替える。このような仕事は通常はまったく人目に付かない地道なことなのである。しかし、縁の下のような力持ち的な当番町にも山笠は花形となる出番を用意している。そのひとつが、当番町の取締・赤手拭筆頭・赤手拭の三役が山笠の昇き棒上に正座して、参集した各町の昇き手を迎える儀礼である。

昇き手たちと相對峙して手一本を入れる姿には、当番町の威厳と粋が現れる場面である。ある意味「かつこよさ」を感じ瞬間である。何といつても最高の出番は、追い山の櫛田入りで台上がりして清道を回るときであろう。そして追いや山が廻り止め（決勝点）に入つた後の山崩しで、当番町取締は山に揺すられながら、「男泣き」する。重責を終えた安堵感のなか「感動」という言葉がふさわしい情景となるのである。

それまで芦別では誰一人として、この当番町の仕事を体験したものはいなかった。芦別はそこでどんな経験をしたのだろうか。

参加者のひとり市流のT氏によると「このときの仕事は、水当番と山小屋当番の他、御神酒当番もやらせてもらった」と言い、下新は基本的な部分を芦別に任せていることが解る。水当番とは、昇き山



櫛田入りで台上がりする大黒流当番町三役 昭和63年



昇き手を迎える大黒流当番町三役 昭和63年

巡行進路の水を確保し、山笠や昇き手に勢い水をかける役である。また、山小屋当番とは別名「山守」とも言い、山小屋に据えられた昇き山を警備することである。基本的には流各町が分担してあたるが、当番町が夜警を受け持つことが多い。御神酒当番とは、流昇きや朝山など山笠が巡行するときに、当番町に参集した各町の昇き手に昆布・スルメ・イリコなどとともに御神酒を振る舞う役である。これには、山昇きに際しての清めの意味がある。

市流総代のY氏は当番町での体験を次のように述べた。

博多では、いろいろな辛い体験もした。当番町の仕事は山を昇くことではなく山のお世話をするところが中心である。その一つに水当番があるが、「水囊を持ってうろちよろするな」、「みなさんが一生



山小屋当番の大黒流若手 昭和63年



大黒流当番町取締の「男泣き」 昭和63年

懸命やっていることは分かりますが、袖若の法被を着ているものとしては動きが悪い」、「袖若の水法被を着ていることを忘れるな」と言われた。当初は、下新の赤手拭の三分の一には、芦別に博多の山笠が行ったことに対して、根強い反感があると聞いていたが、このことが反映しているように思えてしかたがなかった。博多では、自分たちのことを名前ではなく「北の人」とよぶのもその影響だと思っていた。

「袖若」とは下新の若手を指す名称で、水法被にはこの文字が染め抜かれている。当番町が極度の緊張状態にあり、自分たちに対する扱いにも、伝統ある博多山笠が芦別へ流失したことの不満があることから、辛くあたられるのだと感じていたようである。しかし、本質は違っていた。派遣者のひとりであったK氏は、

博多では、いつもの派遣と違って「手伝い」としてあつかわれた。最後には、大黒流下新の若手頭や赤手拭も、当番町を務めるのは二年ぶりなので、自分たちも正直いつてわからないことが多く、慎重になってしまって申し訳ないと言われた。

と言い、この厳しい叱責は当番町としての下新の張りつめた空気起因したことであった。そんななかでかつてない体験をする。Y氏はそれを、山小屋から昇き山をちよつと出して、当番町の三役が棒の上に正座して他の町の昇き手を待ち、手一本を入れる作法などは、このときはじめて経験した。実際に山小屋から山を出す部分を我々にやらせてくれた。それを見ていた博多の長老が驚いているのが分かった。

また、山当番（山守）の仕事も初めての体験だった。これで「山笠

には神様が宿っている」という感覚を体験した。

と話す。下新は芦別派遣組に行事の一部を試行させたわけである。このときの下新の長老の反応は、芦別が博多の身体技法を身につけていることに對する驚きであったと思われる。この語りから、着実に芦別に博多山笠が受容されていると下新が認識したことを証明している。また、山守の体験から、山笠という作り物に「神が宿っている」という感覚を初めて体験している。当然のごとく芦別では山笠は神の乗物であり、それを奉納するものであるということは、知識としては一応理解されていた。しかし、実感できたのはこのときが初めてであったわけである。この言説は、知っていることと感じ取ることとは異なる次元に属するものであることを示している。

また、平成九年から赤手拭を務めている市流のK氏は、

当番町の仕事を体験した。水当番は山につけないから大変な役だった。山笠の縁の下の方持ちと思った。その役は「若手頭」が仕切っているが、それを気遣うアカテ（筆者注：赤手拭のことをこうよぶ）は印象的だった。これに比べると芦別のアカテは、博多の若手組のレベルであると感じた。博多では、若手が「水張り」（筆者注：勢い水を撒くこと）のとき、赤手拭が人を切ってくれる（筆者注：どけてくれる）。また、普段はあまりうるさくものを言わず、山が動き出すと気配りをしている赤手拭の姿が、「かっこいい、粋」と映った。

この赤手拭の印象に関しては、当番町派遣の時以外の派遣者も同様に感じていることであった。平成六年に博多に行ったH氏も同様の感想を次のように語る。

芦別と博多の赤手拭の違いを感じた。博多の赤手拭は、他の町の昇き手を接待するときに仕切っている。大きな違いは、赤手拭が自分を下にして若手を持ち上げて接待していたのが印象的だった。しかし、このような下働きをする赤手拭であるが、町を歩いているとその姿に「かつこよさ」があふれていると感じた。

山笠の縦社会組織の働きを認識していることが解る。しかもその組織が機能することこそが、「かつこよさ」を発現する要因になっていることも悟っている。経験することなくして、これらのことは理解できないことであつた。K氏はまた、

通常の博多派遣では得られないことがたくさんあつた。山崩しの後の山ゆすり、翌年の当番町に台を運んだときなどに見た取締や受け取りの涙は、強く心をうった。自分も貰い涙が出ってしまった。また、追い山の前、冷泉公園で待機する山笠で山守をしているとき、初めて台上がりした。これは、うれしくて写真を撮つた。この写真は今「家宝」にしている。

ここの「受け取り」とは、次年度の当番町の取締を指している。当番町は追い山が終わっても、仕事は終わらない。山崩しで飾りを下ろした素の山笠を受け取りの町内へ運んで行くのである。このときの情景を語つたものである。彼のもらい泣きは博多の意識との共感を示している。また、台上がりにしても、もちろん動いているものに台上がりしたのではなく、静止した山笠のことであるが、感動はただではなかったことが判る。それが「家宝」という言葉に表れている。台上がりがいかに重要な位置づけにあるか理解していなければ、この感覚は生まれ得ないことと理解できる。

芦別に博多を「ウツス」

このときの体験は、芦別ではどのように伝えられたのだろうか。それまでに平成二、四、九年と三回の博多派遣の経験を持つ「芦別振興会」のT氏は、

下新が当番ということもあり、客人ではなく加勢として参加になった。このとき、それまで気が付かなかった山笠運営のノウハウ、マナー、山の昇き方が理解できた。

と述べている。それまでの派遣を評して「客人」としているが、この当番町での経験は山笠運営の核を学ぶ絶好の機会となり、いままで気づかなかったこと、つまり博多山笠の「心意」などを含む微細な部分が芦別へ運ばれたことを示唆している。具体的にはそれはどんなことだったのだろうかY氏の話聞いてみよう。

平成十年の博多派遣であるK氏が博多で学んできた「勢い水のかけかた」は芦別に戻ってから彼の「専売特許」とされ評判になった。「水入ります」と声をかけ、水囊を手を抱えて山笠を待つ姿は、それまでの芦別山笠には無いスタイルであつた。また、実際にこの声がかかると、自然に人が切れたことの驚きもあり、芦別では「かつこいい」と評価され、これを真似る若手も増えている。彼は博多に行くまでは山笠に対して熱心ではなく、山笠に参加することをやるかもしれないとまわりが心配していた人だったが、博多から帰ると、人が変わったように熱心になった。

そう言われたK氏自身の語りは次の通りである。

博多から帰ってくると、芦別の山笠の水のかけ方がダメだと分かった。芦別での山笠きの最中であつたが、芦別の若手の勢い水を見てみると、居ても立ってもいられなくなり交替して自分が勢い水をしてみせた。そして、若手にかけかたのコツは「水囊を押し上げるようにすること」と伝えた。博多の勢い水は綺麗な弧を描いてかけられる。この美しさと、その身振りが芦別でも「かつこいい」と言われ、たちまち若手の間に広まった。

当番町からもどつてすぐに、芦別の山笠に彼の経験が取り入れられ、博多山笠の微細な部分に属する秘訣が伝えられていることが判る。ここで重要な点は「かつこよさ」である。若者たちの間に広がるのが速かつた要因は、まさにそこにある。

山笠に携わるもの以外にはどういう影響があつたのだろうか。これもK氏の話である。

博多での写真を小学校二年生の自分の子どもが見て、自分のしてきたことを認めるようになった。博多に行つて「のぼせた」ことを語ると、自分も締め込みをして山笠に出てみたいと言ひ出した。今年（筆者注：平成十一年）の芦別の山では、前走りをした。「博多で山笠の昇き棒に付けるのはすこ



芦別祝儀山の水当番 平成11年

いことだぞ」と語ると、（筆者注：K氏は長身のため、芦別では棒鼻）「パパは芦別では棒鼻を昇っている。これはすごい」と言った。最初は締め込みが「かつこわるい」と言っていたのが、「かつこいい」に変わった。子どもだけではなく、妻も理解するようになった。

山笠に直接携わることもない人びとまで、博多が伝えられていることになる。既に述べた「山のぼせ」という変容した意識状態を経験することが、博多を伝承するための重要な要素であることを証明している。これによって締め込みに対する子どもたちの認識などは百八十度転換している。また、それに関連しては次のようにも語った。

来年（平成十二年）から、子供山には台上がりでできないようにした。それは、台上がりが大変名誉な役であることを子どもたちに知らしめるためである。「台上がりすることは、すごいことだぞ」と教えると、今まで締め込みを嫌がっていた子どもも、進んで締め込みをするようになった。

博多の男たちが法被に締め込みで山笠に携わるのも、実用という部分だけではなく、そのスタイルを観衆が「かつこいい」と感じるまなざしがあるからである。実際、これ



芦別子供山 平成11年

がなくなつたところではどうなるか。佐賀県東松浦郡呼子町小友の山笠は海中に入つて山を昇くため、水に濡れても緩まない締め込みは実用品である。ところが、観衆にもその意識がなくなると、携わる青年たちが締め込みを嫌がるようになった。しかし伝統であるということで、半ズボンの上から締め込みをするという結果となっている。ここには伝統の形骸化、「視線」の質の問題がある。実は、かつて博多山笠もこの問題かかえていた。博多川端町の山笠取締経験者の話として、平成十五年七月一日付「朝日新聞」には次のような記載がある。

……山笠が全国にまだ知られておらず、昇き山を担ぐ人を集めるのに苦労した時期だ。締め込み姿を嫌い、「あんな格好を息子にさせられない」と断る親さえいた。

山笠を知らない観衆には、それを「粋」を感じ取ることができないのである。しかし、昭和五十四年に博多山笠のテレビ放送がはじまると、この状況は一変したという。

……この年、山笠のテレビ中継が始まった。地域外から「参加したい」との希望が相次ぐようになり、これ以降、人集めの苦労はなくなった。

テレビ放送によって、博多山笠が伝えられ、その結果参加者が増えて「山のほせ」が増えることで、締め込みも「かっこいい」ものと捉えられるようになったというのである。芦別が博多山笠を知り、その「かっこよさ」を感じて、ここまできたのもテレビの影響だったことを考えると興味深いことである。これは、芦別・博多という一線を越えた問題として考えることも可能であると思われる。

博多山笠というものを捉えるとき、芦別ではまず形式にこだわってきた。それが受容の第一段階だった。それがここに至って意識つまりは「心意」に迫る部分さえも、伝えられ始めていることが判る。K氏は言う。

博多に行つて、それまでの思い込みはころっと変わった。その意識を芦別でも伝えたい。芦別でも山のことを伝えるときは、知らないうちに敬語でしゃべってしまう。それは、博多で学んだ「山は思いやりで走る」のだということが作用しているのだと思う。

ここまでの言説で、芦別にとって経験に裏打ちされた「かっこよさ」は博多を伝える原動力であり、その背景には「思いやり」つまりは、「共同する意識」が必要なことを感得していることが判る。それが、受容という場面にとつても力を発揮していることが確認できる。

山笠を少し小屋から出して昇き手を迎えるという作法も、芦別には「かっこいい」と映っていた。それはどうだったか。T氏によれば、

このときの経験は、今年（筆者注…平成十一年）の芦別山笠で緑幸流が、「祝儀山」の昇き手を接待するときにはじめて取り入れた。これは、少しでも博多に近づきたいという考えからである。

翌年にこの経験も受容されていることが解る。博多に近づくという目的であればこれまでの芦別の歩みとなんら変わらないが、これについてN氏は

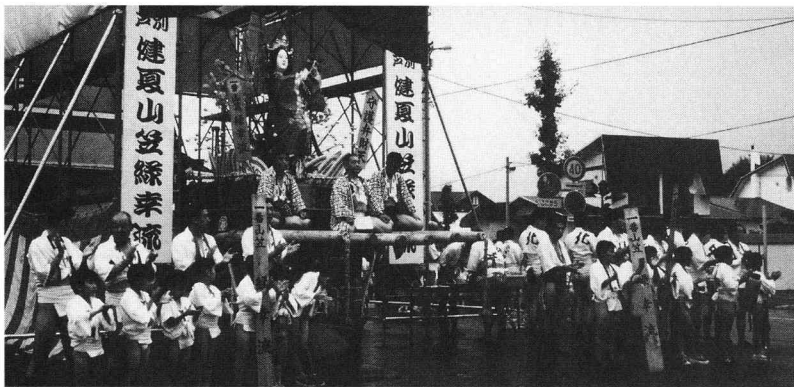
この経験は、さつそく緑幸流が独自に取り入れた。これまでも、真似事ではやったことがあったが、実際に当番町の仕事を経験してからのやりかたは真似事とはあきらかに違うという感覚だった。

それまでの真似ごとと当番町経験に基づいて実施したことでは、外見は同じに見えても異なるものであるという感覚をN氏は持っていることが解る。これは単なる模倣ではなく、博多の意識までも含んだ「真正」なものというを感じていることになるだろう。そこに何があるのか
が問題である。平成十一年、実際には次のように行われた。

市流・中央流・北大黒流・北流・栄流・緑幸流の六つの流の昇き手が南二条東一丁目にある一番山笠緑幸流の山小屋に隊列をなして集まってくる。緑幸流は祝

儀山の当番流である。緑幸流の総代・委員・取締の三役は山小屋から半分引き出された状態の山笠の棒の上に正座して台上がりして各流の昇き手を出迎えた。

それぞれの流が到着すると、必ず手一本を入れる。赤手拭筆頭以下の昇き手は山の両端に立ち迎える。このとき、コブ・スルメ・御神酒で昇き手を接待した。山笠が祝儀山を終えて山小屋前に帰ってくると、台上がり棒上に立って手一本が入った。山小屋に納めた後、三役は台上がらず、各流を拍手で見送った。



昇き手を迎える緑幸流三役 平成11年

御神酒当番の経験も生かされ、博多山笠の場合と寸分違わないものであった。筆者がこの情景を見て驚いたのは事実である。これを実施した緑幸流のW氏は、

「正しいものを博多からもらい、広めて、こなして行こう」というのが緑幸流の考え方。博多の正しいものには「年齢階梯制」がある。これを芦別で正しく受け入れていきたい。これには、礼儀に繋がるものであるからである。子どもに伝えなければいけないので、緑幸流では博多から取り入れた行事をするときには、必ず子どもも入れて行う。世代間に一本筋があるようにしなければ、正確に伝承できないからだ。今年から始めた「祝儀山」での昇き手を迎え、御神酒を出すやりかたは、何度も博多に行って見ていたので、このあたりでやってみようということになって実施したものである。

と導入の動機を語り、博多山笠に内包された「年齢階梯制」に注目し、世代を越えた伝承を目的としていることが判る。

山笠では、子ども、青年、中年、壮年、老年と年齢に応じた仕事を与えられる。かつての博多では、「年齢階梯制」が地域の日常生活にとつて不可欠なものとされていた。しかし現在では、都市部のドーナツ化現象により、住民そのものが減少してしまい、この制度が見える場としては山笠だけになった観がある。とはいっても、その効果は現在の生活のなかにも存在し、学童の非行率の低さや地域との密着度の高さに現れていると指摘する教育学の研究者もいる。⁷³⁾

この緑幸流の目論見は、地域の紐帯を創ることによって博多の民俗文化の受容を進めることが可能になるという見識に立っていることを窺わせる。彼らは博多山笠の「かつこよさ」の中からこの要素を発見していることになる。緑幸流は芦別の流のなかでも最も地域との結びつきが強

く、町内会と一体となって山笠を運営している流である。この地域特性からであろうか、他の流ではまだ見られない、博多山笠の当番町取締が追い山終了後に見せる「男泣き」も、この緑幸流では見られるようになってきている。博多山笠の当番町取締同様に、行事終了後にこのW氏が男泣きするのである。「芦別振興会」のS氏は、この男泣きについて、「これは緑幸流が、人が少なくその運営の苦労からくるもので、博多と同じ意味ではないようです」と話すが、ある意味その感情の発露の仕方にも、博多の様式が浸透しつつあることを示しているとは言えまいか。また緑幸流の「年齢階梯制」への注目は、次のような状況を生みだしている。

緑が丘小学校の学区（緑幸流）で、小学生が普段の生活で何か決めることをするとき、きつちりと手一本を入れて、話をまとめるということが流行っている。この流行は、学年や年齢が上のものが出しているのを見て、下のものも真似るといふ伝わりかたをした。

このような緑幸流の博多受容のありようは、伝統というものを再生産する。「芦別振興会」のN氏は、

緑幸流は、山笠はスピードレースではないと捉え、伝統を重んじた山笠を進めていこうとしている。追い山の成績より、その前後の行事をきちつとやる。直会のように、加勢人を水法被に締め込みのままで接待する姿にはそれが現れている。博多に行ったことのある人間には、このやりかたが本当の山笠だと理解できる。

直会では、緑幸流だけが締め込みを「落とす」締め込みをはずして着替えること（ことなしに、山舁きのままの姿で、加勢人や町内の人々を接待する）である。そこには、裏方で料理作りに精を出す女性の姿もあった。

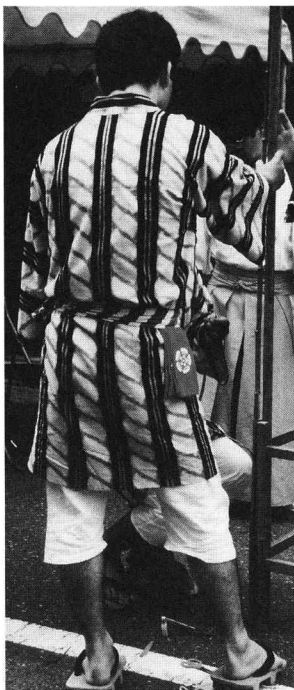
これは、博多山笠の直会での当番町のありかたと全く同じである。以上の事例を観てくると、山笠という祭りの枠を越えて、博多のありかたそのものが芦別に受容されていることになる。それはもう、博多の民俗文化そのものが受容され定着しつつあると考えてもいいだろう。

集団の性格と受容差

地域と密着した山笠運営を行う緑幸流にとっては、子どもから年寄りまでを含んだ部分に焦点化されて博多が受容された。それでは、もうひとつの要素、赤手拭についてはどうだろうか。

博多の赤手拭に粹を感じるのには、何も芦別だけのことではない。それは、北部九州一帯の山笠を見渡せば確認できることである。⁽⁷⁴⁾ 当番町派遣者だけではなく、博多山笠経験者が均しく語るものとしても、赤手拭の「かつこよさ」はある。次の二話は、平成十一年派遣者のものである。

ムコウ（博多）のしきたりは「縦社会」で若手のかたがたが一生懸命務めているのを見て、勉強になった。若手の上にいる赤手拭が要所を締めている。これからは、博多のアカテのようなことを芦別でもやりたいと思った。博多で感じたことを芦別にも伝えていきたい。



博多大黒流の赤手拭
昭和63年

博多の赤手拭は「威厳」がある。まずは若手にまかせてみて、自分が陰でサポートする。芦別には、自分たちがいい博多のしきたりを取り入れようとするが、まだ、歴史が浅いので、まず山をやってみなければわからない面も多い。

次の話は、民間企業から市流に参加している赤手拭のB氏のもの。彼は平成七年の派遣である。赤手拭の背景である、「縦社会組織」について言及している。

博多山笠の雰囲気を知り、実際にその空気に触れたいというのが目的だった。第一印象は「縦社会」というものだった。芦別の上下関係がわりと距離が近く、梓にはまった関係ではないことと比べると、かなりの差があった。

実際の博多山笠で仕事をしてみると、上の人が「ずいぶんえらい」ということに気づかされた。自分たちも、博多では「先走り」か「後走り」を指示され、その厳格な縦社会を身をもって体験した。また、「三番棒見送り台下に入れ」と指示されてうれしかったが、よく考えてみるとそこは博多の人が誰も入らない位置だった。とはいっても、博多での気分の高揚を、そのまま芦別に伝えられたことは意義のあることだった。

博多に行ったことのある人は、日常の話のしほしに「博多弁」が出てくる傾向がある。

「博多弁」の使用など、ここに受容の目安となる大きな要点が述べられている。

実際に博多に行くと、それまで「そこまで熱心にやれない」と言っ

ていた人も不思議と「やらなければ」というふうに変わってしまう。博多の「縦社会」を経験すると、芦別の現状を変えようという動きが出てくる。例えば、「直会」の後かたづけなどは、上下関係なく役付も含めて全員であたるようにしてきたが、最近では若手から役付はしてはいけないと言われるようになった。これも、博多での若手の働きを見てからのことである。このように、芦別でも取締以下の年齢組織が徐々にできてきている。

これは市流総代のY氏の話だが、その意識変容の要因は、博多山笠が持つ「伝統的」な組織にあると見ていることがわかる。いわゆる「山のぼせ」とは、このような基盤から発生してくるものだったのである。まだ博多派遣経験がない市流の青年は、

まだ、博多に行ったことはないが、博多には芦別と全然違う厳しさがあるように思う。上下関係などもっと厳格ではないかと想像する。芦別は人数が少ないので、博多と同じようにするには限界があるように思う。しかし芦別でも、もっと仕切る人がいると従いやすいのに、と思う。博多のことは、仕事上の上司が仕事の合間にも話してくれるので理解している。博多のことを伝えることは「山の魅力」を伝えることである。上司も山笠からの人離れを恐れると「博多に行つてこい」と言う。

と言ひ、派遣者との温度差を明言している。博多経験者である市役所の上司も、その意識を変革させるには博多を体験する以外にないという認識があることが解る。博多経験に伴う意識変容がなければ、赤手拭というものが出てくる組織体系は実感できないことを示しているといえよう。山笠との紐帯が切れそうになると博多派遣を進める言葉にもそれが現れ

ている。

芦別で最も若い取締で平成五年派遣G氏は、

博多に行って一番学んだことは、礼儀だった。その原動力は博多の手拭ごとの位置づけにあるとみて、芦別でも真似ようということになった。市の四組は市流のなかで、最も上下関係が厳しい組であり、若手もそれをよく守り、育っている。

これらの言説はすべて、市流の人びとのものである。彼らは芦別の各流に加勢として入り、博多山笠の流儀を正しく伝えることを責務としてきた。その意味で、地域と一体となって芦別に博多山笠を「ウツシ」てきた緑幸流とは違った理解のしかたになっている。同じ博多を見ていても、緑幸流が「年齢階梯制」に注目しているのに対し、市流は縦社会としての「手拭制度」⁽⁷⁵⁾を注目していることがわかる。いわば赤手拭は博多山笠の縦社会組織の表象と理解しているのである。

しかしながら、この「年齢階梯制」と「手拭制度」は大きな意味では、階層制という同じ範疇に入ることといえる。ただし、年齢階梯制が年齢で階層化されるのに対し、手拭制度が必ずしも年齢順ではなく「山への貢献度」を重視して階層化されるという違いがある。市流の言説は、山笠の組織面に重きを置く視点が顕在化したものであるといえよう。市役



市流の赤手拭
平成11年

所職員で構成される市流にとってみれば、芦別山笠での最大関心事は組織化であり、博多山笠の神髄をそこに見て、芦別に伝えることになったのは自然なことである。上下関係を厳しくするというものをもって、その経験を博多に伝えたG氏の言葉と、既に述べた緑幸流の場合とを比べてみると、博多山笠の同じ範疇の部分を経験しても、集団の特性によって伝えられたことが、違った形となって受容されるということを、芦別の例は示していることになる。また、博多を受容したことは、彼らの「博多弁」使用に現れることになる。これも、先に述べた博多山笠と同一の語彙使用と同一線上にあり、博多山笠との同族的系譜関係に入ったことを体現していることになるだろう。またこれは、世代間伝達の方法としての方言という民俗学の認識とも合致してくる。

この赤手拭に関して、先に述べた当番町派遣者のH氏の動きを、平成十一年に芦別で筆者は実際に見た。彼の赤手拭としての仕事ぶりは、彼の発言にあるように、博多の赤手拭の動きを忠実に再現しようとして動いていた。それは、頑ななほどであった。山笠が通る四つ角では、車が来ていないのに、両手を広げて車を止める身振りをするところなどに現れていた。この事実は、伝えられたことを純粹に、ある意味形式的に実践している姿ととれる。ここに民俗伝播の本質の一端が伺える。

受容と葛藤

順調に博多山笠を受容してき芦別だが、ここに「博多風」という言葉がある。これは、「芦別振興会」のT氏によると以下のようなことである。

芦別の人々が全員博多に行っているわけではない。中には、「博多、博多と言っんじゃない」とか、博多に行った人が言う言葉に批判的な人もいる。「博多風ふかすな」という意見もあるので、現在「博多ではこうある」という指導は慎重にしなければならない。

一部にこのような認識があるのである。それは「山のぼせ」という意識と関係しているように思われる。平成六年派遣の市流のH氏によると、

博多の町の雰囲気中市流の組ごとに伝えた。また、市役所の職場内でも、よくこのことを話題にしてしゃべった。山笠に熱中してくる過程がみえる「山のぼせ」はすばらしい。博多に行つて帰ってくる、芦別ではまわりの見る眼が違う。だから若い人は、一度は博多に行きたがる。

つまり博多に行く行為自体が権威化されているのである。「見る目が違う」というのがそれを表している。それは何故か。「山のぼせ」が特殊な意識状態であるからである。博多経験がないものには理解できない意識状態であるため、共感できないのである。そこから「博多風」という言葉が生まれてくる。それはまた、博多での経験が芦別の日常とは異なるものであることを示している。商店街で構成されている市流は、仕事の関係からなかなか博多へいく機会がない。そこで起こった以下の問題は、このことを如実に語るものである。

市流は芦別の中心地にあり、縁起を大切に市流である。独自性が強く、「博多風」についてもあまり快く思わない。商店に務める人が多く、長く店を空けるわけにもいかず、博多に行った人が最も少ない市流でもある。かつて、市流が加勢に行つていたときのこと、追ひ山後の直会で「博多ではこうある」という市流の主張に対して、独自性を主張する市流の人と意見の相違が表面化した。これが原因で、現在は市流の加勢を受けない。

ここで、博多の事例をあげてみたい。博多山笠は盤石の基盤にあるよ

うに思われがちだが、実は芦別と同じような問題に直面しているのである。それが「アンチ山笠派」の登場である。「博多振興会」の石橋清助氏の話である。

博多の町が山笠で一枚岩かというところではない。最近では「山笠、山笠言うな」という山笠に対して批判的な住民も博多の中に現れてくるようになった。それで、振興会やそれぞれの町でもあんまり「山笠、山笠」と言わないように気を付けている。山笠に批判的な人びとを「アンチ山笠」とよんでいる。

これは、芦別の博多山笠受容のように、未完成のものが完成に向かつていくのと反対の方向性といえる。つまり完成されたものが崩れていく過程に現れてくる現象と考えられる。昔からの住民に代わって新しい住民が博多に入ってきた。彼らにとってみれば、山笠は命をかけて行うようなものとは映らないのである。「山のぼせ」という意識を共有できないことが、この葛藤を生んでいることになる。やはりこれも「共同する意識」の問題なのであり、ある意味芦別と共通している。

この事例も含めて「博多風」という問題を考えると、意識の共有化が深化する過程、つまり博多の民俗文化受容が進展するなかでおきる拮抗関係の表出と捉えることができるのである。つまり、この葛藤は文化受容の達成度を表す指標とも考えることができる。

以上のような経過を経てきた芦別山笠は、平成十年に「芦別振興会」十周年を迎えた。各流独自の当番法被を揃え、山笠という民俗行事としての体裁も一応整い、芦別の行事として定着したとして、再度「博多振興会」役員を芦別に招き記念式典を開催した。ここにおいて博多山笠及び博多を「ウツス」ことに奔走してきた芦別は、その受容に一段落つけるのである。

伝播・受容の要因

芦別の博多での体験に関する様々の言説から、我々は民俗文化の伝播・受容に関してのひとつのあり方を知ることができる。巧みな実践の背景には、単なる形態の模倣では民俗文化が受容されたことにはならない、真に必要なのは「意識」の共有である、という認識がある。このことは、広く民俗文化を考えるときの要件となってくるであろう。これまで述べた事例からすると、彼らの博多の理解と実感が高まるにつれて、言説はより微細な意識の部分へ向かっていることが判る。当番町を経験するなかにおいて市流総代のY氏が「山笠には神様がいます」と実感できたというのは、まさしく、博多の「心意」を共有し始めたことを示しているといえるのではないか。その共感を生むのが「山のぼせ」という特殊な意識状態である。つまり、博多山笠を芦別が「ウツス」には、この意識状態が全体に広がる必要があるということである。

南九州にも、博多山笠の人形を譲り受けて地域の祭りを行っているところがある。宮崎県延岡市の「まつりのべおか」である。詳しく述べる余裕はないが、芦別同様に「地域活性化」の手段として博多山笠の昇き山に注目して祭りを始めたものだが、この意識状態にまでは参加者が至っていない。すると、山笠という形は同じであるが、昇き山を巡行させる参加者の身体技法その他に「博多」が窺える部分が少ないものとなっている。つまり博多山笠はモノの形としてはそこに現れているものの、趣はまったく異なるものとして発現しているのである。

芦別は、本稿で述べた十八年という歩みのなかで、いうなれば「形から心へ」という転換を果たしてきた。そのなかで受容されていた山笠のありかたを民俗と捉えたと、「ウツス」とことは何であるか、民俗伝播・受容とはどのようなことがある程度見えてくるように思われる。これは、単に芦別の特殊な事情とは言いきれないように思われるからだ。これに関しては、他地区の事例との比較を通して明らかにする必要がある

るが、別稿に譲ることにしたい。

⑦構築されるハカタ

調査者と民俗伝播

最後に、「調査」という行為がどのような影響を当該地域に与えるかを述べておく。この場合筆者のことである。

私が芦別の地に足を踏み入れ、多くの人びとから聞き書きをしていくなかで、博多山笠に関する様々な質問を受けた。女性参加の問題、子どもをどうしているかなど、請われるままに博多山笠でのありようを話した。あるとき、市流の直会に参加した。そのときに「芦別振興会」会長から私の紹介があった。それでは「本場博多の人が見ているので、身が引き締まる」という言葉だった。ある意味、私は博多を背負った存在として芦別に認識されていたのである。芦別の人びとにとってみれば、「博多振興会」が来芦したときと似たような感覚だったのだろうか。それはとりもな



祝儀山後の市流直会 平成11年

おさず緊張感を与えていたこともある。このとき私が話した事柄は、博多という「権威」と重ねて人びとに捉えられたであろうことは想像に難くない。調査者が当該文化に対して「権威付け」をする、ということである。私が芦別を調査に来たという事実は、それだけで、芦別山笠を博多山笠と同族的関係に位置づけるための言説を補強することにも繋がったであろうと思われる。

芦別を去るに際して、調査のお礼として、筆者の論文が掲載された雑誌を「芦別振興会」の役員数名とお世話になった流の役員にも渡した。それは、北部九州に分布する山笠が博多の影響を受けて成立していることをまとめたものであった。ハカタウツシという言葉もそれには記されていた。後日、筆者のところにある封書が届いた。「芦別振興会」広報渉外役員のT氏からだった。それは彼が平成十一年十月二十八日に行った「北海道都市問題会議」における「人間尺のまちづくり」と題した講演で使用したレジュメだった。それには次のようにあった。

……さて、私ども、このおまつりを始めて以来、度々「芦別でなぜ九州の山笠なのか」という疑問を向けられました。皆様も、多かれ少なかれこの疑問をお持ちのことと存じますので、この辺のところからお話させていただきます。つい最近しったことですが、博多を中心とした、北九州一带に「博多うつし」という言葉があるそうです。「博多と同じ」「博多から持ってきた」といった意味あいのようにして、博多祇園山笠を軸として、博多が持つ、民俗文化が、その魅力の故に、周辺に伝播し、もしくは模倣された、物ですとか、その状態を意味しているようです。芦別の山笠は、正にこの「博多うつし」であります……。

紛れもなく筆者が芦別に残した論文からの引用であった。ハカタウツ

シという範疇で芦別山笠が語られている。この語彙が受容されてしまった感がある。調査をするということが、一方的なことではなく、互いの対話によって一つの民俗文化を創り出すという営みであることが明白である。干渉のない調査などあり得ないことなのである。

また、筆者と同時に芦別に入ったM氏は中央大学でスポーツ社会学を教えている。今回、ラグビーのクラブ組織と芦別山笠の組織が共通しているとして調査に来ていた。氏の場合は、私とは異なる文化的背景があった。博多呉服町の生まれで、毎年東流から博多山笠に参加し、実践している人であるという点である。彼は「芦別振興会」の役員と、平成十一年の博多の追い山について話し、博多の伝統ある大黒流が何故「櫛田入り」のあとの全コースでの一位を取れなくなったかを説明していた。その後、若手を相手に、「台上がりは昇き棒の上に跪いてするのが本当であり、台下の昇き手は台上がりの足を昇き棒で固定するようにイノウ（昇く）のだ」と教えていた。また、現在、博多でもこれができるのは大黒流と土居流くらいであるとも話していた。彼の話は、伝統技法に関することで、博多においても誰でもが知っていることではなかった。M氏は調査者という枠組みを越えて、博多山笠の微妙な秘訣を伝える伝承者に変貌していたことになる。彼がここで話したことは「権威」の言葉として、確実に芦別山笠に受容されていくだろう。

以上の事例は、研究者が調査に入ることによって、当該地域に影響を与えるものであることを証明している。いい悪いという判断は別にすると、調査者が当該民俗文化にかかわり、権威付けや改変に参与するものであること、また、その文化的背景によっては、たとえ研究者といえども民俗事象を伝播させるメディアたり得るということも、筆者とM氏の事例は示しているよう。

構築される「古風」

これまで芦別山笠の博多山笠との受容経過を見てきた。博多山笠を取り入れて祭りを創造すること、「地域活性化」のなかで生まれた発想であったにせよ、それは博多を「ウツス」こと、すなわちハカタウツシにほかならなかった。そして、この営みの結果として、芦別にひとつのハカタが誕生することになった。現れた様態は、紛れもない博多といってもいいほどのものであった。

しかしながら、ここに出現したハカタが、実際の博多と完全に同質であると言い得るかという点になると、答えは否である。芦別のそれは構築されたもの、換言すれば博多のイメージが再生産されることによって結実したものであるからである。実は「ウツス」時点で既に実際の博多とは異なったものになっているのである。それが、どのように変質して認識されたのかという部分が伝播・受容の問題とかわわてくる。そこに現れてくるものは、理想化されより原初的なイメージに変貌し、伝統的装いを身に纏った博多、換言すれば「古風」なハカタである、ということができるからである。芦別の事例からの理解は、純化された意識をもなった受容の営みは、いわゆる「古風」を構築するのではないか、ということになる。次の石橋清助氏の話は、この点について我々に多くの示唆を与えるものである。

山笠には、いろんなしきたりがある。博多の人が、みんなこんなしきたりを守っているというわけではない。どちらかというと、よそから博多に来た人の方が、厳しくしきたりを守る。昔から博多に住んでいる人はそんなでもない。よその人は博多の人が山笠の間中、厳粛にしきたりを守っていると思っているだろうが、それは違う。たとえば、山笠の期間中胡瓜を食べてはいけない。それは、祇園様の御紋に似ているからだという。しかし、博多の人はわりと食べ

る人が多い。かくゆう私も博多山笠振興会会長時代に人前で食べたことがある。そのときには、同席していたよその人に「それは胡瓜ですよ」と注意された。まわりが「博多の人は厳粛に守っている」という理想像を描いていることが分かった。

博多山笠も、最近では、よその人が大勢を占めている。博多に古くから住んでいる人より、新しい人が伝統をよく守り、現代の伝統を作っている。

もうひとつ別の話を聞いてみよう。博多山笠内部の千代流の例である。現在は博多山笠七流のひとつとして活躍している千代流だが、五十数年前までは加勢町という立場で山笠に参加していた。昭和二十五年に昇き山を持つようになったとき、千代は博多の伝統的な流からノウハウを学んだ。その意味では千代流も芦別同様の受容過程を経たと考えることができるわけである。大黒流とある取締経験者は、この千代流と芦別山笠のありようを比べて、



芦別に掲示された博多山笠（一番山笠千代流）のポスター 平成11年

千代流は五十年前に習った通りを踏襲している。博多の他の流の山笠が変わっても、千代だけは頑固に変えない。私には、芦別も千代と同じように思える。

と語っている。以上のような言説を踏まえて考えると、芦別に誕生したハカタは典型的な「伝統ある博多」をイメージして創り上げてきたものということができるであろう。

芦別を訪れた石橋清助氏をはじめとする「博多振興会」役員たちは、博多山笠を芦別に伝えた春口栄治氏に後日「芦別の方が、博多よりハカタらしい」と述べていたという。伝統を守る立場にある彼らから見てもそうだったということになるだろう。筆者は、ここに民俗伝播・受容の課題があると考えている。

おわりに

柳田国男が示した民俗学の理論のなかに「周囲論」がある。それは中央で花開いた文化が波紋のように同心円を描いて伝播していくというもので、周辺に比べいくほど「古風」な民俗事象が残るといい、その波紋は時間すなわち時代差をあらわすというものであった。本来は民俗学のなかの方言という一分野から析出されたものであったが、その後多くの研究者によって民俗事象全般での適用が試みられてきたものである。

筆者は、今回の芦別の博多受容というひとつの事例の叙述を終えて、この柳田の理論を再考する必要性を感じるようになった。それは、ハカタウツシに関連して、周辺や遠隔地に構築される模倣要素は、模範とする中心の純粋な部分をより伝統的に構築するため、周辺部に「古態と感じられる事象」が見られる要因になっているのではないかと推測されるからである。いわゆる「古風」は残存してゆくものばかりではなく、新

たに構築されてきたものも少なからずあるのではないか、という問いである。

注

- (1) 拙稿「都鄙連続論」の可能性―北部九州の山笠分布を中心に―(福岡市博物館研究紀要)第二号 平成四年三月
- (2) ハカタマネビ、ハカタナライと言うところもある。
- (3) 拙稿「山笠の分布とハカタ文化圏」[FUKUOKA STYLE] Vol. 9 平成六年六月三〇日 福岡総合印刷株式会社 一〇六頁
- (4) もちろん、口承文芸に関しては「伝播」という語を使って問題を柳田も論じている。また、岩本通弥「地域性論としての文化の受容構造論―『民俗の地域差と地域性』に関する方法的考察」(国立歴史民俗博物館研究報告)第52集 平成五年十一月十日)がある。
- (5) 山笠には車輪がない。大勢の人間によって担がれ地面を引きずりながら進むこれを「昇く」という。
- (6) 博多山笠の起源には、いくつかの説がある。起源説話を分析しこの七六二年という数字が近代において成立したことを分析した論考として、宇野功一「都市祭礼の起源説話の生成と祭礼の『不変性』の確立―幕末以降の博多祇園山笠における革新と伝統」(西日本宗教学雑誌)第二〇号 平成十年)がある。
- (7) 元博多祇園山笠振興会会長石橋清助氏の御教示による。
- (8) 山笠の走る速度のことを言う語彙。
- (9) 注(1)と同じ
- (10) 拙稿「現代の祭りにおける『伝承』のありかた―北海道芦別市の健夏山笠を題材に―」(福岡市博物館研究紀要)第十号 平成十二年三月)。
- (11) 電子メディアによって民俗事象が伝承・受容されることを表した筆者の造語
- (12) 同振興会では「無形文化財なのでどこでもという訳にはいれないが芦別で本当に出来るのであればノウハウを提供してもよい」との見解も示してくれました。(提案書)四頁
- (13) 「芦別健夏山笠振興会総代会議事録」3 協議事項 平成二年三月十六日
- (14) 芦別健夏山笠振興会 平成十年九月二十日
- (15) 「芦別健夏山笠振興会総代会議事録」3 協議事項 平成二年三月十六日には、次のようにある。
(1) 健夏山笠用品の発注及び作成について
3 昇き縄及びたすきの作成について

- ・昇き縄の作成については、老人クラブで対応できるか横市総代があたる。
・たすきについては、比較的容易に作成できるため祭が近くなつてからの対応とする。
- ・山笠の横幕についても見積もりを取ってみる。
- (16) 平成三年九月二十日の「芦別健夏山笠振興会総代会会議録」の協議第2号「博多祇園山笠上飾り導入に係わる調査員の派遣について」には、「1派遣時期 平成三年一〇月中(博多人形師の都合により調整) 2派遣人員 2名(関谷総務と会長、副会長の中から一名) 3派遣日数 三泊四日 4調査内容 1人形師の確保 2製作依頼 3価格の交渉 4輸送手方法、費用 5使用済上飾りの所在 6寄付集めの状況 7その他」とある。
- (17) 平成三年十一月二十二日「博多祇園山笠上飾り導入事業に係わる打合わせ会議案」報告第1号
- (18) 平成三年十一月二十二日「博多祇園山笠上飾り導入事業に係わる打合わせ会議案」参考によると、「緑町町内会長 幸町町内会長 中央区町内会長 栄町町内会長 西宮元町町内会長 東宮元町町内会長 あかつき町町内会長 溪水町町内会長 中央団地町内会長 三角山町町内会長 雇用促進ひばり町町内会長」の名前がある。
- (19) 文書 関谷誠から亀田均宛 平成四年二月カ
- (20) 平成五年四月五日「芦別健夏山笠振興会総代会会議録」協議第1号には、「飾り山笠について」以下のような項目があがっている。
・山笠の製作に取りかかる(福司総代待遇に一任)
・テントの建設準備(金子総代に一任)
・運賃の見積及びテント設計図の入手(横市副会長担当)
・建設現場については、もともち公園を第一候補に検討
・詳細については、次回総代会で再検討と」とある。
- (21) 中央流、宮元流(のちの北大黒流、緑幸流、北日本流(のちの北流)、栄流と呼んでいた。
- (22) 大黒流、土居流、恵比須流、東流、西流、中洲流、千代流である。千代と中洲は戦後生まれの新しく誕生した流。
- (23) 注(1)に同じ
- (24) 平成四年五月十九日「博多祇園山笠上飾り導入決定のための打合わせ会議録」には、「4その他 1各流の希望をとったところ、五流全てが希望したため、全流の抽選となった。2まず、今年度の番割により中央流、宮元流、緑幸流、北日本流、栄流の順で抽選を行った。その結果、宮元流、中央流、栄流、北日本流、緑幸流の順で抽選で行うこととなった。3続いて本抽選を行い、その結果宮元流が「大黒天」、中央流が「織田信長」、栄流が「金太郎」と決定した。」とある。
- (25) 「平成五年度飾り山笠及び上飾り導入打合わせ会議案」の協議第1号には、優先順位は1上飾り、2飾り山笠とし、上飾り二体については早急に発注する。
- ・飾り山笠については、一月以降の産炭地活性化支援事業補助金の動向を見ながら発注する。場合によっては、七月の健夏まつりには間に合わず、一〇月一三日の一〇〇年記念式典での展示や、翌年の健夏まつりでの展示となつても止むを得ない。
- ・上飾り二体導入に係わる緑幸流及び北流の負担金については、今年度導入した流と同様二〇万円とする。
- (26) 注(10)の五十八頁
- (27) 担当ディレクターからの書簡では、「……取材の成果は九州では先月二十五日に放送し、芦別のさわやかな山笠は福岡で大きな反響を呼びました。北海道でも放送を予定していましたが、オリンピックなどの関係で残念ながら見送られました。皆様にも色々と迷惑をお掛けしたのにもかかわらず、わたしの力不足のために芦別の祭りを北海道の視聴者に紹介できなかった事を心からお詫び申し上げます。……今回の取材を始めた時期が遅く十分な準備ができなかったために、五分間リポートという中途半端な形の企画を生むことになってしまいました。しかし、来年はすべての追い山に亀田先生の人形が飾られ、飾り山も登場するかもしれないことなので、できればまたお邪魔させていただきたいと思っております。今後ともよろしく願います。尚、福岡で放送したテープのコピーを同封しますので、どうぞご覧になってください。青井真介様 八月五日」とある。
- (28) 実際に博多で芦別山笠のことを聞くと、「あれは春口さんの山だから」という言葉を聞くことができる。
- (29) 平成四年九月十八日「芦別健夏山笠振興会総代会会議録」協議第3号の陳情書
- (30) 同右
- (31) 平成三年十一月三十日付「北海道新聞空知版」の見出しには、「芦別健夏山笠の上飾り 博多の人形師が製作へ 来年夏に三体登場『本場なみに』の夢が実現」とある。
- (32) 平成三年七月二十日付「北海道新聞空知版」には、「地元では山笠に夢中になり仕事の手がつかない人を「山のぼせ」と呼ぶ。」とある。
- (33) 平成四年五月十七日付「北海道新聞道央広域版」には、「青井会長は『今まで

の健夏山笠は仮の姿。今年から本場に負けない祭りの姿が始まります」と意欲をみなぎらせていた。」とある。

- (34) 平成六年五月二十日「平成六年度芦別健夏山笠振興会定期総会会議録」の議案第一号 第二次長期目標の設定について(案)
- (35) 平成六年五月二十日「平成六年度芦別健夏山笠振興会定期総会会議録」議案第2号 会則 第二条
- (36) 平成六年五月二十日「平成六年度芦別健夏山笠振興会定期総会会議録」議案第2号 芦別健夏山笠運営規定(山笠行事及び流)
- (37) 竹沢尚一郎「共同体としての山笠」[FUKUOKA STYLE] Vol.9 平成六年六月三十日 福博総合印刷株式会社 五十六頁
- (38) 平成六年五月二十日「平成六年度芦別健夏山笠振興会定期総会会議録」議案第2号 芦別健夏山笠運営規定(山笠行事及び流)
- (39) 注(10)の六十頁
- (40) 平成六年六月九日「芦別健夏山笠振興会総代会兼取締り会議録」議案第5号
- (41) 平成六年五月二十日「平成六年度芦別健夏山笠振興会定期総会会議録」議案第2号 会則第三条
- (42) 平成元年九月八日「芦別健夏山笠振興会設立総会議事録」添付資料
- (43) 「祝うて(二)拍、まひとつ(二)拍、祝うて三度(三)拍」という方法、博多でも流ごとに詞章は異なったバリエーションが存在する。
- (44) 「北海道都市問題会議資料(3)」平成十一年十月二十七日
- (45) 平成三年一月二十四日「芦別健夏山笠振興会臨時総会会議録」議案第2号によると「4その他 長野周史新赤手拭の紹介、5手一本 横市副会長」とある。それ以前の会議録にはみあたらない。
- (46) 注(1)と同じ
- (47) 招き板自体は、本来は山が走るコース上に配置された水桶(山笠が来たときに、掛ける「勢い水」を入れた桶)の所有を示すための立て板だったもの。それを、たまたま子供が持つて走ったことから採り入れられたものといわれる。
- (48) 「星の降る里・芦別健夏まつり健夏山笠部打合わせ会議兼芦別健夏山笠振興会臨時総会会議録」協議第4号では追い山について「平成五年七月八日には「*招き板については、各流で責任をもつて期日まで間に合わせる」とある。
- (49) 平成六年五月二十日「平成六年度芦別健夏山笠振興会定期総会会議録」議案第4号
- (50) 新天町、渡辺通り一丁目、博多駅商店連合会、ソラリア、福岡ドーム、博多リバレイ
- (51) 平成六年八月二日「第25回星の降る里芦別健夏まつり山笠部会反省会兼芦別健夏山笠振興会臨時総会兼取締(赤手拭筆頭)寄り記録」によると「その他(金)・昇く日を一日増やしたいという意見が出ている。火曜日がいいのか、金曜日がいいのか、祝儀山笠を二基にして充実させた方がいいのかを九月の総代会で方向を決め、五月の総会で決定する」とある。
- (52) 博多山笠振興会「博多山笠」(昭和六十年一月二十八日)九十七頁
- (53) 「星の降る里村民コーナー 北緯43度のマチから」(「広報星の降る里」あしべつ)8 平成三年八月一日 九頁
- (54) 平成七年二月二十三日「芦別健夏山笠振興会臨時総会兼総代会兼取締(赤手拭筆頭)寄り会議録」議案第6号
- (55) 平成七年八月十一日「第26回 星の降る里・芦別健夏まつり健夏山笠部反省会兼芦別健夏山笠振興会臨時総会兼取締(赤手拭筆頭)寄り会議録」では「8 当番流の引継ぎ・北流・市流から栄流に当番流を引き継ぐ」とある。
- (56) 注(10)の五六頁
- (57) 平成七年八月十一日「第26回 星の降る里・芦別健夏まつり健夏山笠部反省会兼芦別健夏山笠振興会臨時総会兼取締(赤手拭筆頭)寄り会議録」反省事項第8号
- (58) 注(10)の五六頁
- (59) 現在博多では、決勝点と呼ぶ「廻り止め」と呼ぶようになっていて。一種の伝統回帰が見られる。
- (60) 平成六年八月二日「第25回星の降る里芦別健夏まつり山笠部会反省会兼芦別健夏山笠振興会臨時総会兼取締(赤手拭筆頭)寄り記録」協議第7号で「決勝点の横断幕が欲しい」という論議がされている。
- (61) 平成七年五月二日「芦別健夏山笠振興会総代会会議録」議案第1号
- (62) 平成七年六月九日「芦別健夏山笠振興会総代会兼取締(赤手拭筆頭)寄り会議録」その他
- (63) 注(10)四十五頁の人物飾りを武者絵で代用した例など。
- (64) 平成七年九月四日「芦別健夏山笠振興会臨時総会議案」議案第1号
- (65) 注(10)の五十八頁
- (66) 平成八年八月五日「第27回星の降る里・芦別健夏まつり健夏山笠部会反省会兼芦別健夏山笠振興会臨時総会会議録」反省事項第8号
- (67) 平成八年九月十九日「芦別健夏山笠振興会総代兼取締(赤手拭筆頭)寄り会議録」議案第4号
- (68) 注(10)の五十八頁
- (69) 平成五年五月十八日「芦別健夏山笠振興会総代会会議録」の平成四年度事業実績報告では、平成四年七月十三日から十五日まで参加している。この年初め

て、自費参加二人と会員外自費参加一人が明記されている。公費参加は一三人。また、追善山は故樋口博多祇園山笠振興会会長外とある。

(70) 観察調査 平成十三年七月十二日

(71) 平成九年七月八日「第28回星の降る里・芦別健夏まつり健夏山笠部打合せ会兼芦別健夏山笠振興会総代会兼取締（赤手拭筆頭）寄り会議録」協議第2号

(72) 「陳情書」平成九年十一月十一日

(73) 財産団法人・福岡都市科学研究所が平成十三年に実施した「福岡市子ども調査」のデータを、「博多部」と「他地域」に分けて分析した福岡教育大学の油谷佐和子（教育社会学）の研究など。平成十五年七月三日付「朝日新聞」には「福岡教育大学の油布佐和子教授の調査では、博多小など『山笠地域』の小中学生は、他の地域に比べて大人とのつながりが強く、親教師への信頼感が高い。また、『やる気になれば何でもできる』と思う割合が高い傾向も見られた。」とある。

(74) 拙稿「アカテノゴイー民俗伝播と変容の過程」『民具マンスリー』第二六卷十一号 平成六年二月十日 神奈川大学日本常民文化研究所

(75) 博多では、振興会役員ほか、流総代、取締、赤手拭など、役職を手拭の色と柄で表示する制度をとっている。

“Transfer” – The Process of the Acceptance of the Hakata Gion Yamakasa in the Ashibetsu Kenka Yamakasa in Hokkaido

FUKUMA Yuji

Yamakasa are festival floats that are tsukuri-mono mounted with splendid decorative images. They are to be found mainly in northern Kyushu. Of these, the centripetal force of the Hakata Gion Yamakasa, which is backed by 762 years of tradition, has greatly influenced festivals in regions throughout the country. The folk term “Hakata utsushi” represents the relationships between these various festivals. The Ashibetsu Kenka Yamakasa in Hokkaido is a festival of this type that is found in a region the furthest distance from Hakata. It is a contemporary festival that was established 18 years ago. And it was a television program that mediated the relationship between the two. The Ashibetsu festival is a good example of what the author calls “densho”, which is the passing on of folk customs through electronic media.

In the beginning the impetus for the Ashibetsu Yamakasa came from the Hakata Yamakasa and was nothing more than a copy that was transformed into a local festival. However, with the passage of time the acceptance of the Hakata Yamakasa in Ashibetsu gained momentum so that ultimately it transcended the framework of “tsukuri-mono” as it became a pursuit for the folk culture of Hakata itself. In this process there were a number of stages of acceptance that involved television, personal experiences, commodities, and the exchange of local identities, from which we may derive an overview of the process by which Hakata folk culture was transmitted and accepted on multiple levels in Ashibetsu. This was accompanied by a growing awareness of a genealogical relationship with the Hakata Yamakasa, which gave rise to a variety of statements that asserted authority. This is essentially the construction of “Hakata” in Ashibetsu and is a reproduction of the image of “Hakata”.

The aim of this paper is to discover from the relationship between the two as described above the fundamental nature and process of the transmission and acceptance of folk customs. It pays particular attention to differences in acceptance resulting from the electronic media, “being trendy”, collective consciousness and group characteristics. Based on the comments of people in the regions concerned and newspaper articles, the paper attempts to describe and analyze what sort of effects these differences brought to the actual site of the acceptance of folk culture while including the perspectives of the involvement of those questioned for this study. In the course of writing about this example the author has come to the conclusion that the question of the peripheral matter of “old customs” articulated in folklore studies up to the present has not been a matter of survival so much as a matter of construction.
